

平成26年度文部科学省指定
スーパーグローバルハイスクール
Super Global High School

研究開発報告書
(第五年次)



渋谷教育学園渋谷高等学校

目 次

| | |
|--|-----|
| スーパーグローバルハイスクール研究開発報告書の発刊にあたり | 1 |
| 30年度研究開発完了報告書 | 3 |
| SGH構想図 | 22 |
| 実施報告 | |
| I. 2050年の世界 | 24 |
| 公民科の取り組み | 24 |
| 英語科の取り組み | 31 |
| II. 広島プロジェクト | 33 |
| 国語科の取り組み | 33 |
| 公民科の取り組み | 40 |
| 情報科の取り組み | 45 |
| 英語科の取り組み | 47 |
| フロリダ研修 | 61 |
| III. Wars and Conflicts | 65 |
| 英語科の取り組み | 65 |
| IV. Social Justice and Service Learning Projects | 68 |
| 英語科の取り組み | 68 |
| 地歴科の取り組み | 83 |
| 家庭科の取り組み | 84 |
| 理科の取り組み | 86 |
| V. 修学旅行プロジェクト | 90 |
| 修学旅行プロジェクト | 90 |
| VI. Write for the Future Projects | 93 |
| 英語科の取り組み | 93 |
| Write for the future | 93 |
| VII. Water is Life 2018 | 98 |
| VIII. 運営指導委員会の活動状況 | 105 |
| IX. 取り組みの発信 | 107 |
| SGH研究報告会 | 107 |
| SGH校等との連携 | 108 |
| 第3回SGH全国フォーラム | 108 |
| X. 生徒の活躍 | 109 |
| XI. 連携大学等との協力 | 111 |
| XII. 評価分析 | 112 |
| SGHアンケート分析 | 112 |
| SGH5年間の変化分析 | 127 |

スーパーグローバルハイスクール研究開発報告書の発刊にあたり

渋谷教育学園渋谷中学高等学校
校長 田村 哲夫

本校が平成26年度より、スーパーグローバルハイスクール（SGH）の指定を受け、今年度で最終年度を迎えました。この5年間、連携大学である東京外国語大学をはじめ、多くの団体・企業からご支援ご協力をいただきました。また、運営指導委員の皆様からも貴重なご助言を多く賜りました。ご支援をいただいた皆様に心より感謝申し上げます。

本学は、「自調自考」～自ら調べ、自ら考える～という教育理念のもと、国際人としての資質を養うことを教育目標の一つに掲げ、教育活動に取り組んで参りました。SGH指定校となり、中高一貫校の特色をいかし、教科間で連携した活動を取り入れ、国際社会に対する生徒の興味関心を高めるとともに、課題解決にむけたリーダーシップ力の向上をめざした取り組みを行っています。

今年度は、通常の活動に加えて、SGH5年間のまとめとして、世界高校生水会議（Water is Life 2018）を開催いたしました。2018年7月24日～28日の5日間、渋谷教育学園渋谷高等学校・同幕張高等学校を会場として開催された会議には、世界18カ国、43校から137名の生徒が参加しました。また両校から500名を超えるボランティア生徒（CAST）が運営に加わり、盛会のうちに終えることができました。今回の会議では、世界の高校生が、持続可能な未来を構築するために必要な手立てを考え、ビジョンを共有する機会となりました。また、ワークショップやポスターセッション、水に関する様々な施設を訪問など充実したものとなりました。世界の課題を共有しあうとともに、日本が水とどのように向き合ってきたのか、発信する場ともなりました。

日本では初めての開催ということもあり、手探りでの運営でしたが、多くの皆様にお支えいただき、学ぶことも多い会議でした。お支えいただきました多くの皆様に心より御礼申し上げます。ありがとうございました。

この報告書を作成することで、5年間の実践を振り返り、次につなげるとともに、本書をご覧いただいた方々から多くのご助言をいただくことを期待し、巻頭のご挨拶といたします。

(別紙様式3)

平成31年 3月 29日

研究開発完了報告書

文部科学省初等中等教育局長 殿

住所 東京都渋谷区渋谷1-21-18
管理機関名 学校法人 渋谷教育学園
代表者名 理事長 田村哲夫 印

平成30年度スーパーグローバルハイスクールに係る研究開発完了報告書を、下記により提出します。

記

1 事業の実施期間

平成30年4月 2日(契約締結日)～平成31年3月29日

2 指定校名

学校名 渋谷教育学園渋谷高等学校

学校長名 田村哲夫

3 研究開発名

探究型学習を、いかにして「行動できるリーダーの育成」につなげるか

4 研究開発概要

複数教科・科目から学ぶアプローチと問題発見・解決型の活動を重視し、それにより知識の充実、発信意欲・技術の向上、交渉・連携しつつ行動する力の強化を図る。テーマを「人間の安全保障」とする。

今年度は、従来の教科横断による取り組みに加え、世界高校生水会議の開催にむけての準備、運営を行った。生徒ボランティアの募集や、教員の仕事分担、保護者への定期的な情報の発信に取り組み、学校全体として、会議を成功に導いた。

行動できるリーダーの実践として、多くの生徒が会議やその他の取り組みに積極的に参加した。

5 管理機関の取組・支援実績

(1) 実施日程

| 業務項目 | 実施期間 (契約日～31年3月29日) | | | | | | | | | | | |
|----------------------|---------------------|----|----|----|----|----|-----|-----|-----|----|----|----|
| | 4月 | 5月 | 6月 | 7月 | 8月 | 9月 | 10月 | 11月 | 12月 | 1月 | 2月 | 3月 |
| The World in 2050 | ← | | | → | | | | | | | | |
| Project HIROSHIMA | ← | | | | | | | | | | | → |
| Wars and Conflicts | ↔ | | | | | | | | | ← | → | → |
| Social Justice | ← | | | | | | | | | | | → |
| 修学旅行プロジェクト | | | | | | | ↔ | ↔ | | | | |
| Write for the Future | ← | | | → | | | | | | | | |
| 国際高校生水会議 | ← | | | | | | | | | | → | |
| 大学による評価会 | | | | | ↔ | | | | | ↔ | | |
| 運営指導委員会 | | | | | ↔ | | | | | | ↔ | |
| 報告書作成 | | | | | | | | | | ← | → | → |
| ホームページ作成 | ← | | | | | | | | | | | → |
| SGH 成果発表会 | | ← | → | | | | | | | | | |

(2) 実績の説明

本学は、「自調自考」－自ら調べ、自ら考える－という教育の基本目標のもと、「国際人として資質を養う」ことを教育目標の一つに掲げ、中高一貫校の特徴をいかし、国際理解教育やコミュニケーション力の育成を継続して行うことで、広い視野を持ち、国際社会で活躍できる人材を育む教育を目指している。渋谷教育学園渋谷高等学校、同幕張高等学校の両校ともに学内の校務分掌に国際部を設置し、定期的に会議を開催している。また目標達成にむけて積極的に行動できるよう、学内研修会を行い共通理解がすすむよう支援している。さらに長期的な視野のもと、学園の取り組むべき戦略を管理職と共有すべく、両校の副校長も交えた戦略委員会をたちあげ、連携した実践にむけた取り組みを支援している。今年度は、特に以下の実施について、取り組みを行った。

・学园内情報共有支援

SGH 最終年度となる今年度は、その集大成として、7月に世界高校生水会議 (Water is Life 2018 以下 WIL) を実施した。その準備として、従来の SGH 委員会に加え、WIL 委員会を設置し、学園での共通理解が図れるよう定期的に委員会を開催した。また、外部にむけた研修報告会の開催、生徒の成果報告の機会や学校訪問の受け入れなど、SGH 普及活動に努めた。

(2018 年度開催回数 戦略委員会 (含む SGH) 24 回 国際部会 15 回 WIL 委員会 8 回)

・カリキュラム実践への支援

引き続き外部との連携を図り、課題研究に沿った講演会やワークショップを開催するとともに、連携大学からの留学生 (院生) をメンター (TA) として受け入れ、授業への参加を依頼した。また担当教員の授業時間数を削減し、ユネスコスクールとしての活動と SGH の活動の連携を図った。

(2018 年度 TA 受け入れ人数 88 名 外部講師依頼 4 名)

・運営指導委員会開催支援

SGH 運営指導委員会にて取り組みの評価・検証を中立的に行った。SGH 運営指導委員には、定期報告並びに評価検証を行うとともに、プログラムの進捗状況、経理を含めたプロジェクトの管理状況について都度確認・報告を行った。運営指導委員からは、本取り組みについて生徒へ適切な助言、及び全体の取り組みへの適切な助言をいただいた。

(開催回数 3回)

・情報公開に関する支援

定期的に学校の広報紙を通じて保護者や学校関係者へ周知し、カリキュラムの内容や実施成果についての広報に努めた。また多くのSGH校、関係委員会等の訪問を受け入れ、成果の普及に努めた。WILの開催にあわせて、SGH研究報告会を開催し、会議の公開と取り組みの発表を行った。通年で本学園の取り組みの公開に努めた。

(受入れ総数 16回 学校 11校・海外 2団体・教育委員会 2回・官庁 1回)

(学校広報誌掲載 6回 SGH 研究報告会 1回・12校より生徒教職員来校)

・中間評価後の取り組みに対する支援

3年目の中間評価では、「優れた取り組み状況であり、研究開発のねらいの達成が見込まれ、更なる発展が期待される」との最高評価を得た。また、学校への個別評価コメントは、次の通りである。

○課題研究における研究内容と英語コミュニケーション能力向上のための指導のバランスが取れており、更なる発展が期待される。

○平和や戦争、安全保障など将来の日本人には避けて通れないテーマに正対し、それに様々な工夫をしながら段階を追って生徒に考えさせている点が高く評価できる。

○社会貢献活動に取り組んだ生徒の割合、グローバルリーダーとして国際社会で活躍したいと答える生徒の割合が大きく向上している点も高く評価できる。

これをうけて、①卒業生に対する調査手法の確立、②行動できるリーダー像の明確化、③評価方法の工夫に取り組んだ。具体的には、同窓会組織のネットワーク化の構築、公欠の規定の明確化、評価基準の共有化を進めた。

・世界高校生水会議 (Water is Life 2018) 開催支援

今年度最大のプロジェクトであった世界高校生水会議 (WIL2018) の成功にむけて、連携大学以外に、様々な外部機関との連携を図った。具体的には、会議前に提出された各チームの論文審査を行う審査員の依頼、講演者の依頼、トヨタ自動車をはじめ、様々な企業によるワークショップの準備、見学先施設の選定・準備など多岐にわたる調整、準備を実施した。会議には、世界18か国140名の高校生を含め250名を招き、参加者数300名あまりが参加した。5日間にわたる会議では、5つの部門に分かれた討議やポスターセッション、関連施設の視察や講演、ワークショップ、日本文化体験など密度の濃い会議となった。事後アンケートの結果からも、参加者の満足度が高く、成功裏に終えることができた。また、渋谷中高、幕張中高から500名近い在校生がボランティアで運営に関わり、英語で行われる国際会議の経験を積むことができた。

(開催時期 2018年7月24日～28日)

(参加者 世界18か国 高校生137名 教員54名)

(支援企業・団体数 17)

6 研究開発の実績

(1) 実施日程

| 業務項目 | 実施期間（契約日～31年3月29日） | | | | | | | | | | | |
|----------------------|--------------------|----|----|----|----|----|-----|-----|-----|----|----|----|
| | 4月 | 5月 | 6月 | 7月 | 8月 | 9月 | 10月 | 11月 | 12月 | 1月 | 2月 | 3月 |
| The World in 2050 | ← | | | → | | | | | | | | |
| Project HIROSHIMA | ← | | | | | | | | | | → | |
| Wars and Conflicts | ↔ | | | | | | | | | ← | → | |
| Social Justice | ← | | | | | | | | | | | → |
| 修学旅行プロジェクト | | | | | | | ↔ | | | | | |
| Write for the Future | ← | | | → | | | | | | | | |
| 国際高校生水会議 | ← | | | | | | | | | → | | |
| 大学による評価会 | | | | | ↔ | | | | | ↔ | | |
| 運営指導委員会 | | | | | ↔ | | | | | | ↔ | |
| 報告書作成 | | | | | | | | | | ← | → | |
| ホームページ作成 | ← | | | | | | | | | | | → |
| SGH 成果発表会 | | ← | | → | | | | | | | | |

(2) 実績の説明

グローバル・イシューとして「人間の安全保障」を設定し、それに関わる課題（平和・人権）に取り組む。その探究活動を通じて、課題解決に向けての方策を考え実践できる力を身に付けるために、次のようなプロジェクトを実施した。

① The World in 2050 （高校1年生対象・1学期 207名）

- i) 中学までの地理・歴史・公民の学習内容を、「これからの世界を考えるために必要な知識」と位置づけ、それらを活用するために『2050年の世界：英「エコノミスト」誌は予測する』を導入として用いた。

『2050年の世界』の中で、国際政治や秩序についてどのような変化が起こるのか取り上げた。19世紀のイギリス、20世紀のアメリカ合衆国という覇権国家による国際秩序と、21世紀に入りグローバル化とともに多極化する世界、テロとの戦いなどの不安定要因、トランプ政権の外交戦略（シリアへの空爆やロシア疑惑など）を取り上げた。Gゼロ時代の国際秩序が混沌とする世界情勢に関心が集まった。

また、「女性の機会」「AIとの未来」「少子化と高齢化」といった課題を取り上げ、ロールプレイなどを取り入れて様々な視点から議論を重ね深め、小論文にまとめた。今年も、連携大学から海外の女性研究者を招き、その方を特別講師として授業を行った。（公民科）

- ii) 公民科で学習したトピックに関する新聞・雑誌記事（英文）を授業教材として取り上げ、読解力を養うとともに内容に関する更なる調査を行い、それをもとにプレゼンテーションやディベート、エッセイ（英語）として完成させた。（英語科）

② Project Hiroshima (高校1年生対象・年間 207名)

広島への研修とその前後の期間に、戦争・紛争や平和についての価値観の文化間比較を通して「人間の安全保障」について多角的に理解を深めると共に、英語を用いて「広島」を発信する方法を実践的に学び海外校での発表の機会を設けた。

- i) 図書館の資料やインターネットを利用して広島について調べ、その情報を精査し発信力を高める授業を行った。(情報科・1学期)
- ii) 戦争に対する理解、国際法上禁止される兵器、戦後の核開発と軍縮、現在の状況を整理した。前年までの反省を取り入れ、視点が偏らないよう留意し、多面的に学べるよう、特に以下の点について配慮した。
 - I、全員が意見を言える授業にする
 - II、熱い議論ができるよう、多様な意見を持つ生徒がグループをつくる
 - III、メッセージボードを活用し、1対1の議論をする (公民科・2学期)
- iii) 連携校である St. Stephen's Episcopal School (以下 SSES) と連携し、現地での研修で学んだことをもとに、アメリカの高校生に広島を紹介する冊子をチームごとに英語で作成した。完成した作品をウェブサイトに掲載し SSES の生徒たちの意見や評価を得た。また、ヒロシマが教育の場でどのようにとらえられているかを国ごとに調べ、それぞれの違いについてデータや資料をもとに意見を英語でまとめた。(英語科・2学期)
高い評価を得たチームは実際に SSES を訪問し、直接プレゼンテーションを行い交流した。また帰国後、校内でフィードバックの機会を設けた。(英語科・3学期)
- iv) 核兵器に関する文学作品「黒い雨」とハリウッド映画を取り上げ、現代日本における核兵器への意識を考察しその表現方法の違いについて学んだ。(国語科・2学期)

③ フロリダ研修 (高校1年生対象)

英語科で行った Hiroshima Brochure Project に取り組み、広島を海外に発信するパンフレット(英語)を作成した。全37班の中から、パンフレットの完成度・英語での発表・東京外国語大学留学生とのやり取りを総合的に高い評価を得た班の中から、米国フロリダ州にある連携校の Saint Stephen's Episcopal School (以下 SSES) が上位2班を選び、SSES にて研修を行った。SEES では、世界史の授業でのプレゼンテーションと質疑、全校集会でのスピーチ、小学校での日本文化紹介、貧困家庭の子供たちが多く通うチャータースクールの見学など幅広い研修、ワークショップとなった。参加生徒は、通訳なしのすべて英語での発表だったが、しっかりと事前研修の成果を十分に発揮した。

(参加生徒9名 引率1名 期間 2019年1月31日～2月5日)

④ Wars and Conflicts (高校1年生対象・1・3学期 207名)

- i) 高校1年間を通じて行ってきた平和学習のまとめとして、現代社会が抱える諸問題から生じる Wars and Conflicts を以下の6つのアプローチにより解決策を探り、発表し、国際社会での問題や国連の役割について学び、国際情勢に関する理解と知識を深めた。また、(社)経済広報センターの招きで来日した北米の社会科教員10名が来校し、授業へ参加した。日頃の学びの成果を英語で発表し、コメントをいただくことができた。
(公民科・1学期)

- ii) 少人数のグループを構成し、6分間のプレゼンテーション（1人1分以上話す）と大学院生のメンターによるQAセッションを実施した。また、必ずフィードバックセッションを行い、振り返りも行った。
- A：国語的アプローチ（新聞・雑誌・文学作品）
→「戦争文学」「フェイクニュース」
 - B：美術・音楽的アプローチ（映像・絵画・歌）
→「戦争における歌の役割」「啓蒙キャンペーン動画」
 - C：数学・理学的アプローチ（科学技術・統計・確率）
→「戦争におけるドローンの使用の是非」
 - D：家庭科・保健体育的アプローチ（保健・衛生・健康・食）
→「難民キャンプの食住環境の改善」
 - E：歴史的アプローチ（歴史的変遷、過去と現在の比較）
→「IS台頭の歴史的背景」
 - F：社会科学的アプローチ（経済・教育・法・国際機関・政策）
→「国連は本当に必要か」「多文化理解教育」（英語科・3学期）

⑤ Social Justice and Service learning（高校2年生対象・年間 233名）

- i) 現代世界における政治問題の背後には、経済的・文化的摩擦があり、それは歴史で読み取れるという考えに基づいて、通史の中で読み取っていくという授業を試みた。特にSGHのテーマであるSocial Justiceの中で、関係性が深いものについては積極的に取り上げた。
- ・貧困・社会的階層の分化を含む経済的摩擦について
 - ・宗教・民族を含む文化的摩擦について（地歴公民科 世界史）
- ii) 世界各地の環境問題、民族問題、人口問題、貧困などの諸課題には、その地域の自然環境、産業、文化が複雑に関係している。高校2年次の地理では、以前より能動的に社会に関わる力の育成を念頭に置き、世界の自然環境（気候・地形）、産業（農牧業・鉱工業）、生活文化（都市・人口・民族など）を中心に学習活動を行ってきたが、その学習活動の中で、本校SGHのテーマ「Social Justice」をふまえて、系統地理的に授業を展開した。
- ・アラル海周辺地域における環境問題について（地歴公民科 地理）
- iii) 生物基礎の教育課程に沿って「種・遺伝子・生態系」3側面から生物多様性について深く学んだ。
- ・DNAの構造と機能について
 - ・野生生物の保護政策について
 - ・種の大量絶滅と大規模な気候変動の関わりについて（理科 生物）
- iv) 「共に生き、共に支える社会の実現」について、保育領域の「子どもの権利と福祉」を通して子供たちが受けている人権侵害の実情を通じて考える授業を行った。
- ・『児童の権利に関する条約』について
 - ・「世界の子ども達の現状」（ユニセフ発行）について（家庭科）

v) 国際社会における様々な問題（人権・エネルギー・環境など）について教科で専門的に学んだ経験をいかし、それを英語の授業で統合し発信した。今年度は、①人権、②水資源、③エネルギー政策、④幸福感、⑤イスラム、⑥生物多様性、⑦フェイクニュースを取り上げた。（英語科 年間）

vi) これまでの授業で諸問題に関係した社会貢献活動をそれぞれが計画し実行するプロジェクトを行った。実行したプロジェクトは学内で報告し、検証する機会を設けた。
（総合的な学習の時間・年間）

⑥ 修学旅行プロジェクト（高校2年生希望者対象 2学期 177名）

中国への修学旅行において、現地の高校生との交流事業を実施した。1対1での交流を実施することで、英語でのコミュニケーションの機会を設けた。また、互いの文化を紹介する時間を生徒主体で行い、それぞれの文化的背景についての理解を深めた。

（交流校 北京第一中学 及び 北京市広渠門中学）

⑦ Write for the Future（高校3年生全員対象 1学期 200名）

これまでに学んだグローバル・イシューや地球社会への貢献に関する知識や経験をもとに、テーマを設定し論文を作成し、発表した。

⑧ 連携大学による協力

英語授業での生徒の討議や作成物への支援として、連携大学より TA として留学生を招き、継続的にグループ討議に参加する機会を設けた。また評価にも加わり、教員の授業の進め方等多方面にわたり指導・助言を得た。

また、WIL での発表者への事前指導、会議での審査員等、様々な形でご協力いただいた。

⑨ Water is Life 2018

2年に一度開催される世界各国の高校生による、水に関する国際会議を開催した。

参加する高校生は、自国の水問題に結び付け、科学的・政治学的・経済学的、または学術的視点から水に関する研究活動をチームで行い、論文を作成する。論文は、会議前に提出され、実際の会議では、その研究成果を持ち寄り、互いに発表することで、他国の生徒たちと共有する。研究テーマは、科学技術・生物多様性・教育・地域・管理行政（政策）の5つの中から、チームごとに選ぶ。2014年に第1回が Raffles Institution（シンガポール）の主催で開催されて以降、2年ごとに行われている。第2回は、2016年に Maurick College（オランダ）で、今年 2018 年は、渋谷教育学園で開催された。

本校からは、2チーム6名が選ばれ、それぞれ教員指導のもと、研究活動を行った。1チームは、学校教育の機会を利用した東京湾の海洋汚染を削減する取り組みを行い、実際に小学校現場で、教育活動を行った。本会議において、教育部門での最優秀賞を受賞した。もう1チームは、災害時に利用できる雨水から飲料水をつくる技術をテーマとして実験を繰り返し行い、身近なものを利用した浄水装置の開発に取り組んだが、会議後も研究を重ねている。

また、本校からも200名近いボランティア生徒が会議の運営やホストをボランティアで引き受け、会議の成功に貢献した。参加した生徒の事後アンケートからは、実際の国際会議に関わった興奮や国際社会で活躍する夢に近づいた実感、運営の楽しさ、また SGH 校

であるのことの誇りを持ったなど、前向きな表現が多く寄せられた。英語力の別なく、自分の得意分野での貢献に自信につながった。

参加したチームの概要は、以下の表の通り。

| SCHOOL | COUNTRY | THEME | TITLE |
|---|-------------|---------|---|
| Sir Karl Popper Schule Wiedner Gymnasium | Austria | Eng&Tec | Methods of the Analysis of Microplastics in Water |
| Beijing National Day School | China | Bio | Research on Major Causes of Eutrophication in Poyang Lake |
| Collegio Claustro Moderno | Colombia | Eng&Tec | Bioremediation Efficiency of Contaminated Water Using Lemma minor |
| Vordingborg Gymnasium & HF | Denmark | Bio | Wetlands: A Multifunctional Solution |
| Tokyo Gakugei University International Secondary School | Japan | Eng&Tec | The Quality of Japanese Water |
| River Valley High School | Singapore | Eng&Tec | What is a Water Efficient Canteen? |
| Mahidol Wittayanusorn School | Thailand | Bio | The Efficiency of Mushroom and Fungi Isolated from Soil and Effluent for Decolorizing Red Reactive Dye |
| Makuhari Senior High School | Japan | Commu | Water Efficiency in Japan |
| Shibuya Senior High School | Japan | Edu | Recovering Water Quality in Tokyo Bay |
| d'Oultremontcollege | Netherlands | Commu | Water Problems in Fortified Cities |
| Kopernik Lyceum | Poland | Eng&Tec | IV Liceum Ogólnokształcące im. Mikolaja Kopernika w Rybniku Poland |
| Collegi Mare de Deu del Carmen | Spain | Stew&P | Public or Private Management of Water? |
| Mahidol Wittayanusorn School | Thailand | Eng&Tec | Development of Paper-Based Sensor with Portable Device for Real Time Fieldwork Detection of Arsenic in Water Resources by Electrochemical Method |
| Saint Stephen's Episcopal School | USA | Commu | Effects of Bicarbonate Addition on Montipora Growth Rate and Calcification |
| Sir Karl Popper Schule Wiedner Gymnasium | Austria | Eng&Tec | Bioanalytical Tools in Advanced Water Treatment |

| | | | |
|--|--------------|---------------------|---|
| Collegio Claustro Moderno | Colombia | Eng&Tec | Bioremediation Efficiency of Contaminated Water Using Microalgae |
| Center for Young Scientists (CYS) | Indonesia | Eng&Tec | Domestic Waste Management System Community Based Sanitation (SANIMAS) in Kampung Kodok Br. Tunggal Sari Desa Dauh Peken Tabanan |
| Shibuya Senior High School | Japan | Eng&Tec | Use of Filters and UV Rays for a Dual-Filtering System During Disasters |
| St. Odulphus Lyceum | Netherlands | Eng&Tec | Rainproof |
| Raffles Institution | Singapore | Eng&Tec | Zinc Content in Metal Alloys and Its Relationship to the Antimicrobial Efficacy in Decontaminating Polluted Water |
| St Andrews College & Dlocesan School for Girls | South Africa | Eng&Tec | The Effect of Natural, Bio-Absorbent Substances on Heavy Metal Removal |
| John Monash Science School | Australia | Commu | Improving Melbourne's Urban Water Catchments |
| Oak Bay High School | Canada | Edu | Identifying Recyclable and Non-Recyclable Plastic Polymers on Southern Vancouver Island Beaches |
| Beijing National Day School | China | Edu | Research on the relationship Between Economic Growth and the Awareness on Water Protection—A Case study of China and Japan |
| Eisbjerghus Internationale Efterskole | Denmark | Commu | Local |
| Vordingborg Gymnasium & HF | Denmark | Eng&Tec | Biomagnification of Microplastic in the Food Chain |
| Dillmann-Gymnasium | Germany | Edu | Tap Versus Bottled Water: Water Preferences in Germany |
| International Christian University High School | Japan | Edu | Japanese's Extravagant Consumption of Water and How Education Can Ameliorate the Situation |
| Kumon Kokusai Senior High School | Japan | Commu | Issues of Water Conservation in Japan |
| Makuhari Senior High School | Japan | Eng&Tec, Commu, Bio | For Sustainable Inba |
| Narita Kokusai High School | Japan | Edu | The Waste of Water in Japan |
| Narita Kokusai High School | Japan | Commu | Sessui or Saving Water ~To Live with Water ~ |

| | | | |
|--|-------------|------------------|--|
| Sakura High School | Japan | Stew&P | Preserving the Native Eco-System of the Inba Swamp |
| d'Oultremontcollege | Netherlands | Edu | The Rainwater Problem in the Netherlands |
| Maurick College | Netherlands | Bio, Edu, Stew&P | The influence of the Tide on the Drowned Land of Saeftinghe |
| Raffles Institution | Singapore | Commu | A Case-Study Investigation into the Effectiveness of Waterbody Management: Lorong Halus Wetland |
| River Valley High School | Singapore | Commu | Research on Active, Beautiful and Clean (ABC) Waters |
| Collegi Mare de Deu del Carmen | Spain | Bio | Drinking in Life: The Importance of Water |
| Detroit Country Day School | USA | Stew&P | The Great Lakes Water Quality Agreement: Challenges and Solutions |
| Centro Federal de Educacao Tecnologica de Minas Gerais | Brazil | Bio | Impact of Acid Irrigatio on the Development of Plants for Human Consumption |
| Centro Federal de Educacao Tecnologica de Minas Gerais | Brazil | Commu | Sustainable practives: Aleternatives for a Complex Problem |
| Lyce Saint Joseph | France | Bio | The Impact of Human Activity on the Rivers Water Quality of Our Town, Vervins (Picardie, France) |
| Maurick College | Netherlands | Eng&Tec | Waterfactory |

7 目標の進捗状況、成果、評価

(1) 生徒には、①授業アンケート②SGHアンケートの2種類を実施し、その成果を分析した。

結果、多くの生徒が授業の成果としてスピーキング力とプレゼンテーション力が身につけていると感じている。GTECの結果でも4技能すべてで年間の伸びが著しい。また、留学生による授業支援は評価している生徒が多く、継続的な支援をすることで活発な討議につながり、発信力の育成につながることが確認された。本校SGHの特徴である教科横断の取り組みにより、生徒たちの課題へのアプローチ方法が広がり表現の幅が広がったことで、英語で長文を書く、新聞を見ることへの抵抗感が低い。また高校1年生の時期から、将来への目的意識を持つ生徒の割合（将来自分の得意な分野で活躍したい）が徐々に増えており、継続的な取り組みの効果が次第に下級生へ伝わっていることが確認された。

最終年度を迎え、教科の連携がスムーズになり、カリキュラムとして落ちついたことで、生徒が先を見通して学習に取り組むことができ、更に授業への意欲・理解が深まったことが読み取れる。これまで学んだ知識やデータの活用力が大切だと考える生徒が増え、学びの広がりや深まりを感じ楽しむ様子があった。

SGH3 期となる 18 期生は、高校入学時に全学年が SGH となった最初の学年である。このため、SGH の流れを理解していたこともあり、高校 3 年終了時には、多くの項目で、これまでの学年を上回るアンケート結果を残した。「インターネットの英語サイトを利用できる」と答えた生徒の割合が 80% になるなど、新しいツールや技術を積極的に活用していることが読み取れる。また、より専門的な内容を英語でも取り入れることに自信をもつ生徒が増えている。特に、当初不得意な生徒が多かった「科学技術、研究開発に関する英語を読む、聞く」、「政治・経済・様々な社会問題に関する英語を読む、聞く」といった項目でできると答えた生徒の割合に大きな上昇がみられた。教科横断の授業が機能し、他教科での専門的な学びと英語の教材が生徒の中で結びついていることが読みとれる。（図 1）

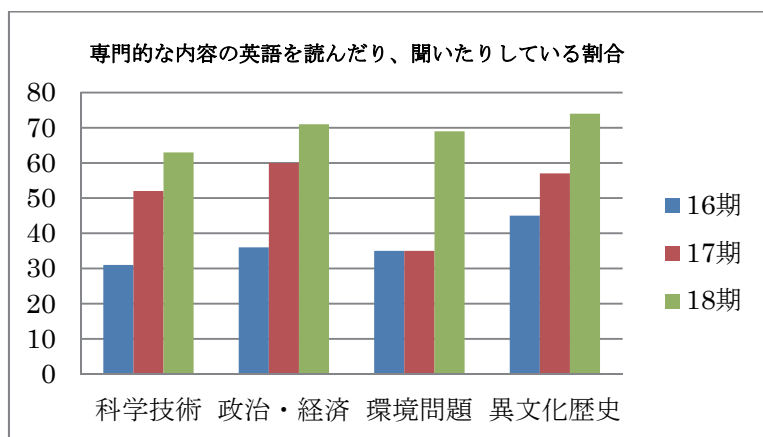


図 1

また、これと呼応するように、「自分の得意な分野でリーダーとして活躍したい」、「日本が存在価値のある国になるように自分ができることをしたい」、「国際会議で発言したい」など、貢献意欲が高まっていることが読み取れる。（図 2）

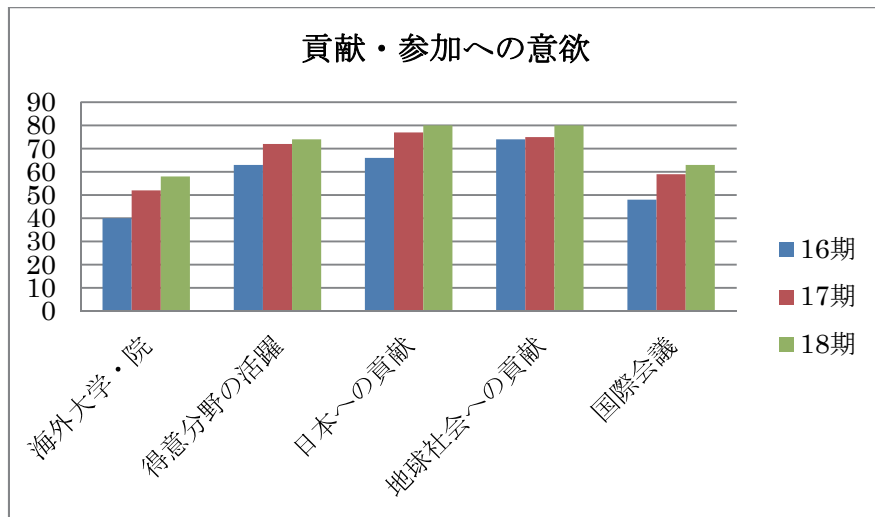


図 2

このことは、本校 SGH が目指してきた「行動できるリーダーの育成」という狙いが生徒に確実に伝わっているといえる。

前述した世界高校生水会議に多くの生徒が率先して関わったことから、行動できるリーダーの育成という狙いが十分に達成されている。また、学校外活動への参加意欲も高く、また表彰される生徒数も多くなった。

(2) 2018年度 SGH 活動成果一覧及び評価

Social Justice and Service learning の事例

1年間に取り組んだ活動総数 97件

- 主なもの
- | | |
|--------------------------|-----|
| 子供の人権にかかわる活動 | 25件 |
| (子ども食堂支援・放課後学習支援・保育園手伝い) | |
| 福祉・医療にかかわる活動 | 14件 |
| (病院ボランティア・療育サポート) | |
| 環境保護にかかわる活動 | 19件 |
| (城跡下草かり・富士山美化活動) | |
| 震災復興にかかわる活動 | 3件 |
| (石巻復興支援・被災動物支援) | |
| 海外にかかわる活動 | 14件 |
| (WIL ボランティア・外国人観光客支援・通訳) | |

Write for the Future の事例

平和・紛争に関するもの

「現代社会における平和学習として適切な授業はどのようなものか」

「レバノンの難民問題を解消するには」

社会課題に関するもの

「高校生にもできるホームレス支援とは」

「移動式託児所～子連れでも楽しめる渋谷にするには～」

「日本の児童虐待を減らすためには」

(3) SGH その他の活動一覧

- ・第3回 SGH 全国フォーラムへの参加(代表生徒2名 高校1年生)

- ・国際水学会(International Water Association)の世界大会

Water is Life 2018 における渋谷教育学園の研究成果が審査員から高い評価を受け、東京ビッグサイトで開催された上記大会に招待された。研究をした生徒たちは WIL2018 の概要と自分たちの研究成果について世界各国から集まった専門家や企業の方々の前で発表した。

- ・SGH 研究報告会

7月26日、渋谷幕張中高にて、世界高校生水会議 WIL2018 と並行し、渋谷と渋谷合同でSGH研究報告会を開催した。渋谷は高校2年生を代表して、広島女学院のSGH研究発表会で発表したチーム、フロリダ研修に参加したチーム、授業で印象的なプレゼンをおこなったチームが日本語と英語で報告し、文部科学省、SGH校の教職員や生徒の皆さんから高い評価を受けた。

- ・世界こどもの日ユース・フェスティバル内 SGH 校発表会

11月17日、聖心女子大学で開催された上記イベントにおいて、高2生4名が本校の社会貢献教育とその成果について発表した。特に子ども食堂における活動と小学生や幼稚園児を対象とした教育活動が高く評価された。

- ・第二外国語講座78名 (通年) (中国語・仏語・独語・西語)
- ・さくらサイエンスプラン(科学振興機構)によりベトナムの高校生が来校、交流 (7月)
- ・ユニクロ古着回収協力 (全校)
- ・飛龍祭 (文化祭) における募金活動 (世界寺子屋運動 及び LGBT 支援)
- ・シンガポール Raffles Institution 生徒の受け入れ (9月)
- ・オーストラリア St.Francis Xavier College の生徒の受け入れ (9月)
- ・オーストラリア Loreto College の生徒の受け入れ (1月)

(4) 2018年度 活動主な表彰一覧

- ・模擬国連世界大会 優秀賞 (高2生 2名)
- ・模擬G20サミット2019 in 北京 最優秀チーム賞 (高1生1名、高2生2名)
同 最優秀元首賞 (高2生1名)
- ・第7回日本高校生パラメンタリーディベート連盟杯全国大会 優勝 (高3生 3名)
同 ベストディベーター賞 (高3生1名)
- ・第8回日本高校生パラメンタリーディベート連盟杯全国大会 第3位
(高1生1名、高2生2名)
同 ベストディベーター賞 (高1生1名)
- ・東京都高英研主催 第22回 高校生英語ディベート大会 優勝 (高1生 4名)
- ・第4回 PDA 高校生パラメンタリーディベート世界交流大会 優勝
(高1生1名、高2生2名)
- ・第4回 PDA 高校生即興型英語ディベート全国大会 準優勝 (高1生1名、高2生2名)
- ・PDWC2019 高校生パラメンタリーディベート世界交流大会 準優勝
(高1生1名、高2生2名)
- ・JWSDC 第2回全国高校生英語ディベート大会2018 準優勝(日本チーム内第1位)
(高1生1名、高2生2名)
- ・第7回日本高校生パラメンタリーディベート新緑杯 準優勝 (高2生3名)
- ・NSDA ディベート日本第4回全国大会 準優勝 (高3生2名)
- ・英語ディベート東京工業大学杯2019 準優勝 (高2生1名 招待参加)
- ・国際言語学オリンピック世界大会 日本代表 (高3生1名)
- ・平成29年度第2回国際連合公用語英語検定試験 特A級外務大臣賞 (高2生1名)
- ・第57回全国高等学校生徒英作文コンテスト 入選 (高1生1名)
- ・図書館を使った調べる学習コンクール 毎日新聞社賞(日本語部門優秀賞)(高2生1名)、
図書館振興財団賞(英語部門優秀賞)(高2生1名)、佳作 (高2生1名)
- ・関西学院大学、読売新聞社、ジャパン・ニューズ主催第10回高校生英語エッセーコンテスト 優秀賞 (高2生1名)
- ・東京家政大学主催 生活をテーマにする研究・作品コンクール 優秀賞 (高2生1名)
- ・旺文社主催 第62回全国サイエンスコンクール 人文社会科学教育部門 旺文社赤尾好夫記念賞 (高2生1名)
- ・全国高等学校書評合戦ビブリオバトル in 東京 優秀賞 (高1生1名)

- ・ 國學院大學主催 第 14 回「地域の伝承文化に学ぶ」コンテスト 地域文化研究部門 佳作
(高 2 生 1 名)
- ・ 高校生の君たちへ 漱石作品読書感想文募集 優秀賞 (高 3 生 1 名)
奨励賞 (高 3 生 1 名) 入賞 (高 3 生 9 名)

(5) 2018 年度 英語力の分析結果

2018 年度も帰国生を除く高校 1 年生、2 年生が GTEC for students を受検した。
(Reading320 点、Listening320 点、Writing170 点の 810 点満点の筆記テスト及びタブレット端末を使用した Speaking テスト 170 点満点)

【高校 1 年生】

| | |
|-------------------------|---------------------------|
| Reading 207 点 (64.6%) | Listening 235.3 点 (73.5%) |
| Writing 121.1 点 (71.2%) | Speaking 135 点 (79.3%) |

【高校 2 年生】

| | |
|-------------------------|----------------------------|
| Reading 241.3 点 (75.4%) | Listening 255.2 点 (79.75%) |
| Writing 122.1 点 (71.8%) | Speaking 138.6 点 (81.5%) |

S G H アンケートでも「字幕に頼らずにテレビ番組や映画を理解できる」と答えた生徒の割合が 48% から 67% へ上昇した。Speaking 力や Listening 力が向上し、英語に慣れた生徒が増え、4 技能がバランスよく伸びている実感を生徒が持ったことを示している。

8 5 年間の研究開発を終えて

(1) 教育課程の研究開発の状況について

複数教科・科目から学ぶアプローチと問題発見・解決型の活動を重視し、それにより知識の充実、発信意欲・技術の向上、交渉・連携しつつ行動する力の強化を図るという狙いについては、十分に達成できたものとする。

学校設定科目を設けず、従来の教科のもと連携をはかるという今回の研究開発は、英語科を扇の要とし、より専門的な内容理解と言語を活用した発信力の育成を 2 本柱として、教科特性を活かした教科連携を進めることとなった。また、平行して行っている自調自考論文(卒業論文)作成のさいにも、学外活動を活かす生徒や専門分野にこだわる生徒が増え、副次的な効果も上がった。

テーマが「人間の安全保障」という難しい設定であったが、時事教材やニュース、外部講師の支援をうけ、高校生としての理解しやすい工夫を毎年行うことができた。

また、毎年のアンケートから、生徒の興味関心をとらえ、その成果を次の学年に伝えて、調整をはかるなど、縦横の連携が進んだ。また、高校生の活躍は、併設の中学生にも興味関心が広がり、中学 3 年の公民の授業でも取り入れるなど、学校全体で、研究開発に取り組むことができた。

「探究型学習を、いかにして「行動できるリーダーの育成」につなげるか」という課題については、学ぶことの社会的な意義を実感し、行動主体としての自覚を持つと同時に、研究や新しい技術に触れ、より学びたいという意欲につながっていることが読み取れた。また、世界高校生会議を実現したことで、実践の場を提供できたことで十分な成果が上がったと考えられる。

(2) 高大接続の状況について

東京外国語大学との連携は、①生徒への直接支援、②教員への支援、③高校生水会議への支援の柱で行われた。①の生徒への直接支援は、英語の授業支援が中心となった。

留学している大学院生がメンターとして継続的に授業に参加し、アドバイスを送ることで、英語を使う機会が増えるとともに、自分の意見を表現する発信力の強化につながった。

②の教員支援では研修の講師として、授業の組み立てや資料提示の助言をいただいた。また、③の高校生水会議では、論文・発表・プレゼンテーションのすべての部門において、審査の中心的な役割を担っていただいた。

また、大学訪問も実施し、大学への理解を深める取り組みも行ったが、単位認定制度の導入には至らなかった。

(5年間の連携大学への合格者16名 入学者8名)

(3) 生徒の変化について

SGHアンケートの学年(期)の比較からは、5年間の変化が読み取れる。200語以上でエッセイが書けると答えた生徒の割合は、高校1年ではあまり変わらないが、高校3年で上昇している。このことから、高校の授業で、力がついていることが読み取れる。

(図3)

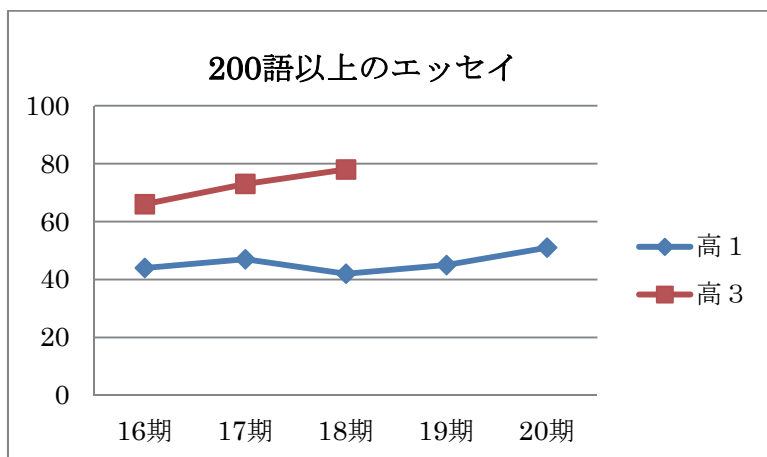


図3

グローバルリーダーと地球社会に貢献したいと答える生徒の割合も同様であり、授業での取り組みにより、高校時代に伸びた資質であるといえる。(図4)

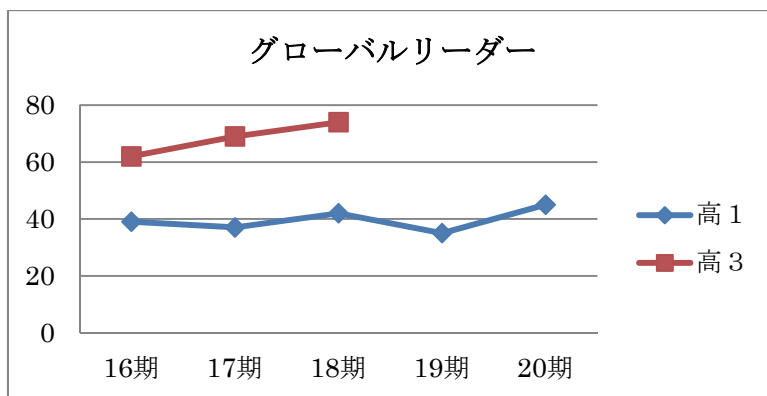


図4

一方、政治経済の社会問題に関する英語を読んだり、聞いたりしていると答えた生徒の割合は、高校1年では、5年間で減少し、高校3年で上昇している。これはSGHを進める過程で、このトピックを高校1年よりも高校2年で取り上げることとしたカリキュラムの変更が影響している。このことから、生徒の理解とカリキュラムの相関が高いことがわかる。(図5)

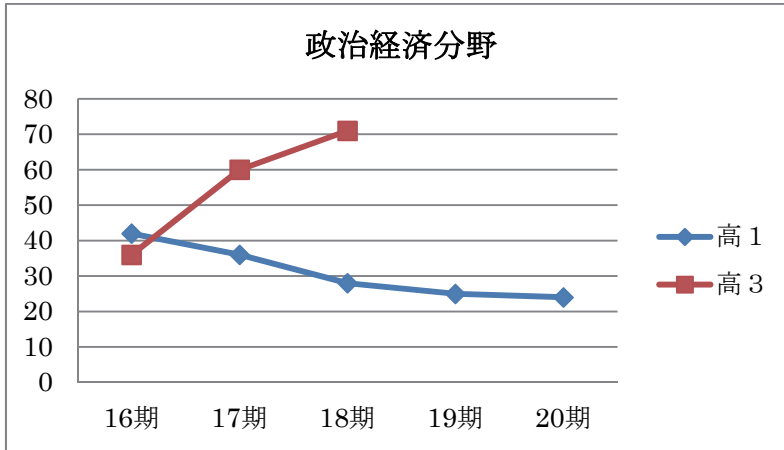


図5

海外大学・大学院への希望は、微増している。進学者の数値に変化がないことから、大学の国際化の影響もあり、進学後の留学を考える生徒が増加したと思われる。(図6)

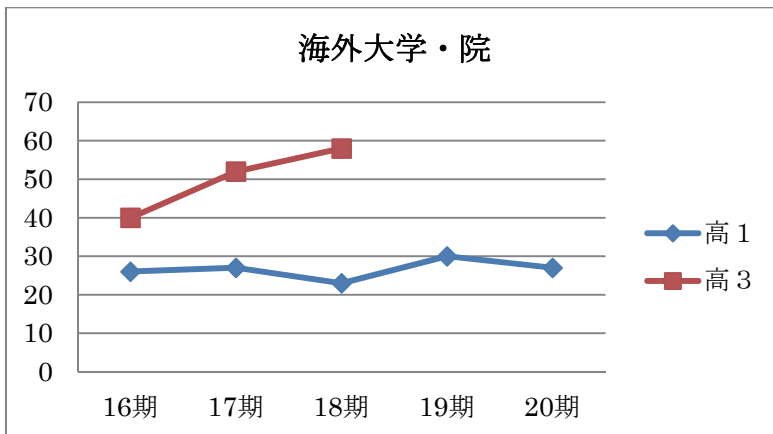


図6

その一方、「自分が得意とする分野を極めたい」と答える生徒は、もともと90%を超えており、SGHによって、大きな変化は見られない。ただし、「英語で発信したい」、「日本がグローバル社会の中で、存在価値のある国になるよう自分ができることをしたい」と答えた生徒の割合が大きく上昇した。Service Learningを始めとする、社会貢献活動や国際会議を経験したことで、行動とするリーダーとしての認識が高まったことが読み取れる。

世界高校生水会議 (Water is Life 2018) のアンケート結果からは、次の点が読み取れる。

- ・会議参加生徒の満足度は総じて高く、すべての項目で最高評価をしている。コメントでは、次の3点についての評価が高かった。

① 専門家から学ぶ

3回の専門家による講演、企業のワークショップ、大学教授からの発表へのコメントは、相手を高校生扱いせず、時に厳しい指摘も多くあった。しかしながら、研究をし

て臨んだ会議で、自分たちの至らなさを感じることは、次への意欲につながったと感じている。このことの意義は大きい。

② 生徒同士で学び合う

各チームは、ポスタープレゼンテーションや分科会で自国の状況を発信して共有すると同時に、本やインターネットでは知りえないような他国の状況を知ったり、自分と同じ高校生による取り組みに刺激を受けたりする貴重な機会となった。

③ 国際交流を楽しむ

18ヶ国から集まった137名の高校生と、東京謎解きオリエンテーリングや分科会で親睦を深めることができた。また最終日の **International Afternoon** では、個人で、あるいはチームで、それぞれがお国自慢のパフォーマンスを披露したことに会場は大いに盛り上がった。

- ・キャスト（大会運営ボランティア）・ホスト（ホームステイ受け入れ）生徒の満足度は、おおむね高かった。一方その関わりの深さによって、評価にばらつきがでた。もっと主体的に動かたかった、時間が足りなかったという声があり、生徒たちがこの会議を楽しみにしていた様子がうかがえる。満足に感じた点は、次の3点である。

① 国際会議を自分の学校が開催したことへの自己肯定感

世界18か国の高校生と直接会話したことで、この会議に意義を実感した生徒が多かった。体験することの重要性を指摘する声が多かった。また、外国の生徒の頑張りをみて、自分も頑張ろうと思ったという声もあった。

② 自分の得意分野で会議に貢献できた達成感

英語に自信のない生徒でも自分の関心事や特技が活かせるような職種を多数用意したことで、無理なく楽しく参加できたと感じる生徒が多かった。

③ 英語のスキルアップへの意欲

英語の得意な生徒は、分科会でのファシリテーターや式典でのMC、また施設見学先での英語でのガイドなど、事前に勉強会や実践トレーニングが生きる経験を積んだことで、自分の英語力に自信が持てたとする生徒がいた。また、外国人の友達ができ、もっと英語を話せるようになりたいと思う生徒もおり、英語のモチベーションがあがったと答えた生徒も多かった。

- ・海外参加者からの評価は、満足度95%と大変に高いものであった。

スムーズな運営やバラエティの富んだプログラム、ボランティア生徒の関わりなど、本校が、SGH校として狙いをもって取り組んだ内容に評価が高かったことは喜ばしい。残念だった点としては、ホームステイにしたことで、慣れない公共交通機関移動の疲れや暑さが挙げられた。日本の学校文化が世界と異なる点でもあるので、興味深い指摘であった。

(4) 教師の変化について

専任教員数 78名のうち、5年間でSGH委員会に所属した教員は、47名、該当する学年の関わった教員が述べ51名であり、WILも含めると、ほぼ全教職員がなんらかの形で、この構想に関わった。関心をもって取り組んだという割合は85%近くになった。

また、毎年SGHアンケートの結果を次年度の授業に反映させていることから、ほとんどすべての項目で、生徒ができると答える割合が上層しており、教科や学年として、

このプロジェクトを活用していることが読み取れる。

S G Hに関しては、

- ・他教科の学びに関心を持つようになった
 - ・生徒の多様な面がはっきり視覚化できるようになった
- と連携強化を挙げるコメントがある一方、
- ・生徒や教員の多忙化
 - ・学業（受験）との両立の困難
 - ・プロジェクトの種類が多い

といった、限られた時間の中での消化不良を心配するものもあった。

(5) 学校における他の要素の変化について（授業、保護者等）

保護者会等を利用し、S G Hの取り組みを紹介したり、飛龍祭（文化祭）や学校説明会で、発表する機会を設けたことで、保護者から不安視する声が少なく、取り組みへ高い関心を持っていただけた。毎年発行される保護者組織(教育後援会)の会報でも、S G H、留学といったトピックで特集を組むなど、学校への理解が深まった。

また、同窓会組織（アトラス）のネットワーク化の機運が高まり、卒業生が母校へ関心を寄せてくれるようになったことも変化の表れである。

(6) 課題や問題点について

課題については、大きく2つあげられる。①教員の課題、②生徒対応である。

教員の課題としては、特定の教員への負担増が挙げられる。中核となる教員に仕事が集中しないよう、人的な配慮や時間数配慮による負荷は、継続の上で今後の課題である。また、大学や企業のやりとりなど、新しく増えた連携強化の負担増は、I Tツールなど、新しい技術を利用する発想や機器準備なども必要になる。こういった新しい対応が課題である。

また、生徒の中には、興味を持ってない生徒、カリキュラムに熱心にとりくみ疲労を訴える生徒など、対応が必要な生徒もいた。担任やカウンセラーなどと協力し、生徒への負荷を調整することも課題となった。

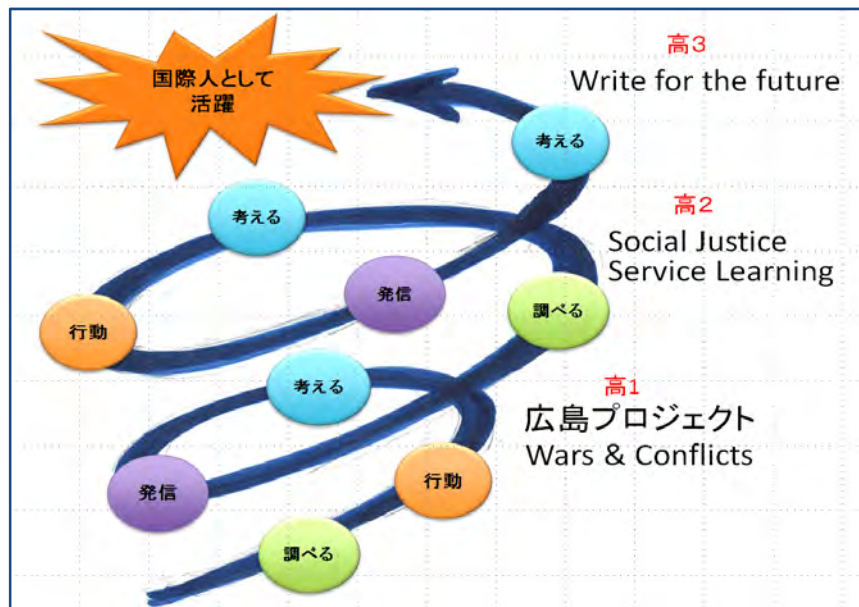
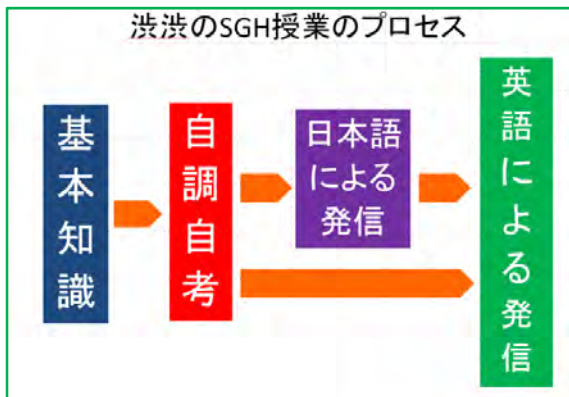
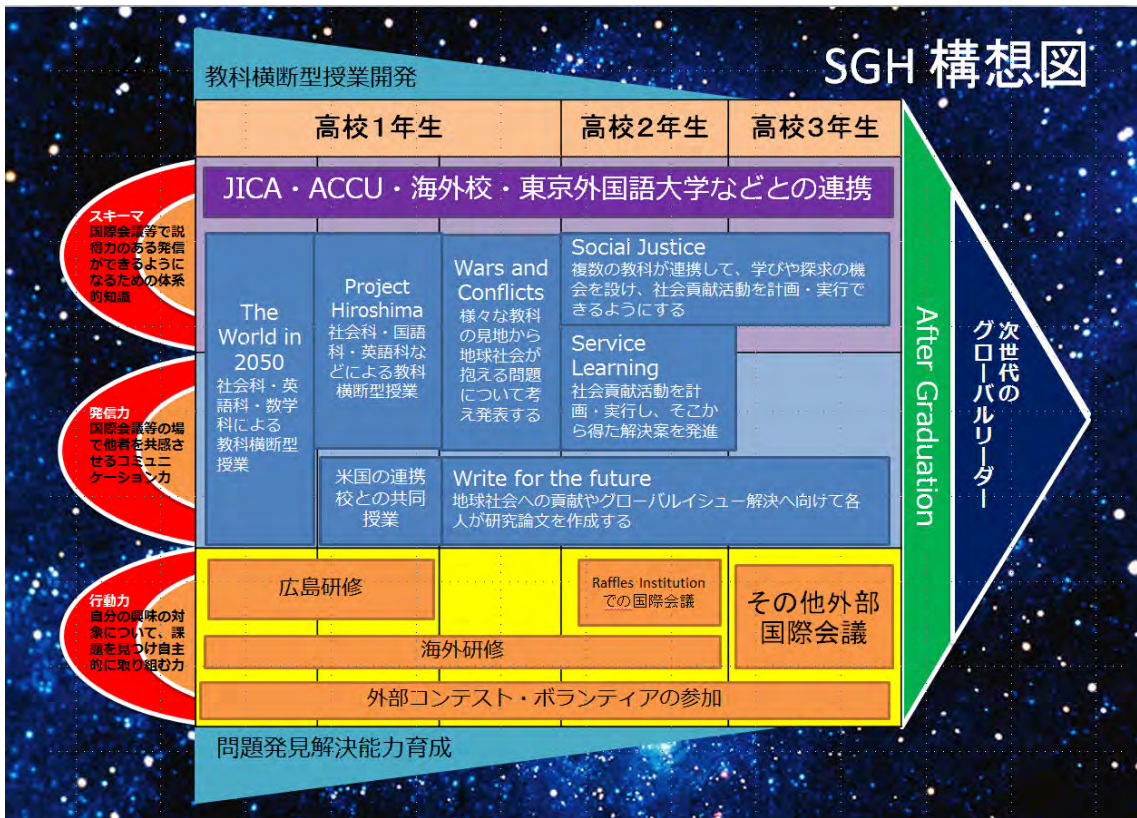
(7) 今後の持続可能性について

S G Hのプロジェクトは、上記の結果からも生徒の自主性、自立性を育て、将来に対するビジョンに育んだ。今後は、高1の広島プロジェクトによる平和学習と国際交流、高2のService Learningによる社会貢献活動を軸として、継続していくことを予定している。

また、S G Hに取り組む中で、①長期的に一つの問いを探究する姿勢を育てる困難、②チームで学ぶことの意義を実感できないこと、③高校生が主体的に運営する機会の不足を感じた。引き続き、生徒が活躍できる場の提供も行っていく予定である。

【担当者】

| | | | |
|-----|--------------|--------|------------------------|
| 担当課 | 渋谷教育学園渋谷高等学校 | TEL | 03-3400-6363 |
| 氏名 | 高際 伊都子 | FAX | 03-3486-1033 |
| 職名 | 副校長 | e-mail | takagiwa@shibushibu.jp |



実施報告

I. 2050年の世界 (The World in 2050)

中学までの学習内容を中学までの地理・歴史・公民の学習内容を、「これからの世界を考えるために必要な知識」と位置づけ、それらを活用するために『2050年の世界：英「エコノミスト」誌は予測する』を共通テキストとして用いた。人口動態の激変が産業及び社会構造にどのような影響を与えるのか、また新たな科学技術（テクノロジー）のめまぐるしい進化により人間社会がどのように変わるのかを、書籍資料、新聞記事、ドキュメント番組を活用し時代の情報を集め理解し、議論を重ねながら授業展開をした。多様な価値が溢れる社会における正義の議論もサンデル教授のテキストを活用し議論を深めた。今年も、連携大学より海外の女性研究者を招き、その方を特別講師として授業を行った。英語科では、公民科で学習したトピックに関する新聞・雑誌記事（英文）を授業教材として取り上げ、読解力を養うとともに内容に関する更なる調査を行い、それをもとにプレゼンテーションやディベート、エッセイとして完成させた。また、北米の教員が来校した機会を利用し、クラス授業に入っただけ、授業を展開した。（対象：高校1年生 1学期）

公民科の取り組み： 「2050年の世界」を生きる
特別授業 「シリアの現状と女性の機会」「北米の先生考える」
英語科の取り組み： The World in 2050

公民科の取り組み： 「2050年の世界」を生きる

1. 『2050年の世界』

(1) 国際秩序のゆらぎ

『2050年の世界』の中で、国際政治や秩序についてどのような変化が起こるのか取り上げた。19世紀のイギリス、20世紀のアメリカ合衆国という覇権国家による国際秩序と、21世紀に入りグローバル化とともに多極化する世界、テロとの戦いといった不安定要因、トランプ政権の外交戦略（北朝鮮の核とミサイル開発と米朝会談など）を取り上げた。Gゼロ時代の国際秩序が混沌とする世界情勢に関心が集まった。

(2) 社会課題を考える

2050年における少子高齢化と科学技術の進歩について考える機会を設けた。トピックとして「AIとの未来…AIは天使か悪魔か」、「少子化と高齢化…人口減少社会の課題」の2つを取り上げ、メディア教材や報道資料を通じて、グローバル社会が抱える様々な視点を共有した。授業では、問題点を整理し、自分と社会の関わりを考える時間を設けた。

(3) 経済成長をもたらす女性の機会

『不屈の少女マララ』のDVD視聴、日本の社会構造の変化と女性の機会、世界各国の状況と比較した日本国内の女性の立場などについて考察した。グローバル化する世界、経済成長と社会の変化、法の下での平等と教育の機会均等、労働市場への参加など、女性の権利についての課題や問題解決のためにどのようなことができるのか、主体的に考えたことを、各生徒がテーマを決め小論文にまとめ、発表した。また、シリアからの留学生ミリアムさん（東京外国語大学博士課程2年）による特別授業を行った。（資料①）

(4) 2018年度北米社会科教師招聘プログラム（経済広報センター）

「学校訪問：渋谷教育学園渋谷高等学校1年の社会科授業に参加」

北米の社会科教師10名が本校の社会科の授業に参加しました。授業は「2050年の世界」について、クラスごとにテーマを決めて英語で議論を行った。北米の先生方は一般生も含めてテーマに対して英語を活用し参加する姿勢について、生徒の意欲や問題意識の高さに大変驚かされていた。

本校生徒も先生方との交流を通じ、自分たちの取り組みの意義を実感した。（資料②）

資料①

ミリアムさんのSGH特別授業！

SGHプログラムの「2050年の世界」の一環で、東京外語大学大学院総合国際学研究科博士前期課程に在籍するシリアからの留学生ミリアムさんをお招きし、高校1年生の現代社会の時間内で「シリアの現状と女性の機会」に関する特別授業を行って頂きました。（5月28日・29日）。

1、ミリアムさんの経歴と研究分野

ダマスカス大学で日本語とメディア学を専攻

東京外語大学での専門は平和構築・紛争予防で、研究対象は「メディアと紛争の関係」

2、SGHプログラムの特別授業の内容

アラビア語の挨拶に続いて、日本人にとってのシリアのイメージ、四季もある自然、アラビア語入門、1万年以上続くダマスカスの歴史、日常の生活や文化など、生徒への問いかけや熱心な説明が続き、密度の濃い時間を過ごすことができました。テレビや新聞報道から、シリアはアサド政権と内戦、ISのテロと難民などの負のイメージが大きく変わる内容に生徒は驚き、視野の広がる授業となりました。SGHプログラムの一つのテーマである「女性の機会」について、シリア社会の現状を掘り下げながら、ジェンダーは社会と時代によって異なる男女の役割りということも学びました。

質疑応答の時間では日本に学びに来た理由、日本で一番驚いたことなど、ミリアムさんの人間味あふれる体験談を聞くこともできました。昼の直接質問する集まりでは政治状況や見通しなど、授業内容とは違う視点からシリアの今を知ることができました。

3、特別授業の準備として

- ・シリアの地理・歴史・文化的な基本的事柄と、シリア情勢に関するプリントを事前に読み理解を深めることができる。
- ・「2050年の世界 第三章 経済成長がもたらす女性の機会」について理解することができる。
- ・「女性の機会」をテーマにした小論文課題を考えるヒントにして、自分の考えを深められる。

4、SGHの授業の目的

『2050年の世界』の第三章「経済成長がもたらす女性の機会」、ミリアムさんの特別授業、『不屈の少女マララ』のDVD視聴、日本の社会構造の変化と女性の機会、世界各国の状況と比較した

日本国内の女性の立場などについて考察し自分の意見を論理的に主張できる。

グローバル化する世界、経済成長と社会の変化、法の下での平等と教育の機会均等、労働市場への参加など、女性の権利についての課題や問題解決のためにどのようなことができるのか、主体的に考えたことを小論文にまとめ発信できました。

【20期生 ミリアムさんの特別授業の様子】



タイトル: 先進国にも根深い「女性に対する偏見」

マラケシュの育つパキスタンのような発展途上国の多くで、女性に対する差別が深刻な問題となっている。果して先進国はどうなのだろうか。確かに発展途上国と比べて、男女平等の道はもとほり正しいものではあるが、進んでいるはずの国でも男性社会が続けられている。私たちが意識するのは、女性に対する理想や偏見が、私を根本的に縛りつけ、社会で活躍できる機会を少なくしてしまっている、という点だ。

女性に対する「理想像」は、昔からとてほり正しい。女性には、静かで、優美で、おしとやかであるべきという考え方は、昔には常であったものの、現代社会にも根深く残っている。「女性はこうあるべきなの」という考え方は、私たちがの行動や振る舞い方に大きな影響を与えている。「女子力」という言葉も、この考え方から来ている。「自分はこうに振る舞わなければならない」という縛りつけになっている。確かに男性に対する「理想像」というものもあるが、女性に及ぼす、体つきや見た目ばかりで批判されることが多い。これが一番の問題点なのだ。女性には「足は長く、細い方がいい」や「太っているのはよくない」「でも細くても長持ちが悪い」と、社会の作りあげてきた「厳しすぎる理想像」に悩まされている。これは特にアメリカなどの若者層の中で深刻化している問題で、日本ではあまり表に現れていないが、うつ病や拒食症、anxietyにつながっている。そもそもこのような考え方が、多くの女性には自分に対する自信をなくしてしまい、自ら行動を起させない状況にある。そして体に対する偏見が「セリハラ」にもつながる。

私はこの問題について、SNSを通じて知り、世界中の人々が、この問題について意識するようになってきているのと思う。「Body image」「self-worth」「anorexia」などはよく見かける言葉である。しかし、これらの言葉は日本語で聞いたりとはかきなく、この問題について書こうと思ったりと、これに気がついた。日本では西洋と文化が違うから、この問題はあまりとりあげられていないのかもしれないが、これはそれで問題ないと思う。この論点を日本語で上手に表現するのも難しいと感じている。日本は先進国である以上、こういった問題をもっと公の場に持ってくるのが第一課題だ。

タイトル: 立ち上がれ! 女性!

なぜ、女性は社会進出できないのか? こういふ話題で実際にお母さんと論じてみた。お母さんの職場では、基本的に性別で差別されることは無いことになっている。しかし、たまにセクハラとかもあつたりする。また、顧客の中には高圧的な相手でして男性がいいという人も多いらしい。なので、女性では客と相手できないなどそんな問題がある。自分はこの問題に疑問を呈したい。向こうの客も仕事して来ている以上、職場の性差別として成り立つだろう。(しかも理由としては「男性の方が信頼できるから」だ、という)。学校でさんざん女子の事を知っている自分としては理解できるから、だが、この一言には、男女に対する固定概念的なものの思い、きり含まれている。ここから導き出せる女性の社会進出を阻む(一)の概念として男と女のイーゼン、特に職場上のイーゼンが極端に強く残っているということだろう。さうに議論を続け、今度はどうしてそれを訴えないのかと聞くと、先になつてしまふからという。確かに、男と女を育てる母としては、仕事を先にするのは辛い。だが、こういう状況下で訴えられないというのも問題だと思ふ。どうしてか? この問題に限らず、職場の女性差別というのは世界的な目標SDGの5番目「ジェンダー平等を目指す」というものに大きく反している。しかも日本はこれに批准している。また日本は、女性が男性と同等の職業経験を産業界から既に脱しているはずだ。つまり、このような問題を訴えて、自分が不利になるような状況にさせられる理由などはない。だが、立ち上がらないのは何故か。立ち上がった時のリスクヘッジが十分でないから。多くの女性は子供を持っている。なので、リスクヘッジがないことは我慢おという選択になつてざるを得ない。要は政府や自治体が、しっかり女性の社会進出を進めようとするしかりサポート政策をとり行うべきだ。そうすれば全国に眠る810万人の女性も活躍できる。それに加えて、女性の方もネ、トを促したりして、女性も活躍すべきという概念を老若男女全てにしんとうさせるべきだ。固定概念に振り回れるのが得意な日本人の特性を活かすのだ。そうすれば、日本の永遠のテーマ「世界一俺になるか」見えてくるだろう。

資料②

2018年度北米社会科教師招聘プログラム（経済広報センター） 「学校訪問：渋谷教育学園渋谷高等学校1年の社会科授業に参加」

北米の社会科教師10名が本校の社会科の授業に参加しました。授業は「2050年の世界」について、クラスごとにテーマを決めて英語で議論を行いました。北米の先生方は一般生も含めてテーマに対して英語を活用し参加する姿勢について、生徒の意欲や問題意識の高さに大変驚かされていました。本校生徒も先生方との交流を通じ、自分たちの取り組みの意義を感じたはずで

【北米の社会科教員来校の際の特別授業の内容】

日時：2018/6/29（金） 午前中 3限A,B,C組 4限D,E組

北米の先生方にもチームの話し合いに入っただき、議論に対しての意見を聞く
5~6人のグループで互いの立場を明らかにして、未来予測を議論する

A組 テーマ：「2050年 AIの発展は人間社会をどう変えているか」

「新しいビジネスモデルができる。それを考える」「人口減少による労働力不足を解消する救世主になる」「必要不可欠な存在となり、生活の質が劇的に良くなるはず」「人間の能力を上回るテクノロジーには発展しないはず」「現在の人間の仕事を奪うことになるだろう」「人類の脅威となり得る技術。規制のルールを作るべき」

B組 テーマ：「2050年 AIの発展は人間社会をどう変えているか」

- ・「AIは戦争をどう変えるか」「AIは人間を超えないあくまで道具なのか」「AIの発展で生じる人間に不都合なことは何か」「AIは人格を持つか、持つのなら人権を認めるか」
- ・5~6人のグループで話し合い（全部で7グループ）、3グループが発表、発表しないグループは必ず質問を出す。

C組 テーマ：「2050年 持続可能な発展に最重要なことは何か」

- ・エネルギー問題に焦点を絞って議論
- ・クラスを6チームに分ける。それぞれのグループがロシア、フランス、ケニア、シンガポール、アラブ首長国連邦、ベネズエラの6ヶ国の代表として主張を述べる。それぞれ先進国、資源をもつ途上国、資源をもたない途上国などの役割を割り振る。グループ内で自分たちに割り振られた国（地域）の立場で主張。

D組 テーマ：「2050年 AIの発展は人間社会をどう変えているか」

「新しいビジネスモデルができ、人口減少による労働力不足を解消する救世主になる」
「人間の能力を上回るテクノロジーには発展しない。現在の人間の仕事を奪うことはない」
「人類の脅威となり得る技術。規制のルールとは」から考える

E組 テーマ：「2050年 国際秩序の中心となるのはどの国家（地域）か」

- ・北朝鮮、アメリカ、中国、日本、インド、ロシア、ASEAN、EUの8チームに分け議論
- ・当日は各チームでなぜその国（地域）が国際社会でどのような立場をとるのか主張しあう

- 主なテーマは、米国と中国の覇権争い、グローバル社会の国際協調と安全保障、経済政策

【20期生 北米社会科教師の学校訪問・特別授業の様子】



英語科の取り組み：The World in 2050

The Year in 2050 2050年の世界

4月～7月

学習の狙い

社会科で獲得したスキーマを英語での発信力につなげることを目的とする。社会科が『21世紀はどんな世界になるのか』についての授業を進めるのに並行して、関連するトピックの英文を読む。さらに、そのトピックについて自分の意見を述べ、発表やディベート、作文にまとめる活動を行う。

「現代社会」授業において扱っている4つの話題「A. Sustainable Development Goals」「B.2050年の職業」「C. 人工知能(→科学技術)と人間社会」を扱い、

(1) これらの問題について、英文で関連語彙・知識を習得する。

- (2) A ①世界が抱える諸問題とSDGsについて知る。MDGsとの比較も。
②いくつかの開発目標について調べ、発表。
- B ①2050年に必要になりそうな職業を予想
②関連する英文記事を読み、自分の考えをライティング
- C ① 複雑な倫理的問題が生じ得ることを認識する。
② 特に教育の場面にAIが導入されるメリット／デメリットを考察

実施項目

A. Sustainable Development Goals

4月

1_1 A village of One Hundred

世界が抱える諸問題について理解する。

1_2 SDGs Quiz

SDGsについて知り、17のGoalを分担してグループで調べ、発表

B. The Future of Jobs

5月

2_1 Future jobs

Kent UniversityのWebsiteにある記事を読み、Education, Medicine, Robotics, Energy and Environmentという各分野において、2050年にどのような職業が必要になるかを考えた。グループで意見交換も行った。

2_2 Essay Writing

2_1の内容をもとに、2050年に存続する・消滅する職業を考え、120語程度のエッセイを書いた。

C. 人工知能と人間社会

6月～7月上旬

3_1 15 Pros and 5 Cons of Artificial Intelligence in the Classroom

AIが教育現場にもたらす影響について、肯定的意見と否定的意見の双方を読んだ。読んだ内容を3_2のSummary & Refuteにつなげる。

3_2 Summary & Refute : We should use AI in the classroom.

この題でSummary & Refuteの活動。ディベートの下準備として、SignpostとReasonがスムーズに言えるよう練習。

生徒作品 (2_2 Essay Writing)

| | |
|-------|--------------|
| Essay | 高1 English A |
| | NAME _____ |

Write an essay on one of the followings:

A - The textbook says "Unemployment rate will increase if we continue our current system of traditional education." Do you agree with this? Why?

Or

B - Pick one job which you have chosen in your group discussion and explain why you thought it will remain.

I agree that unemployment rate will increase if we continue our current system of education. There are two reasons. One reason is to introduce state-of-the-art technology in the job. I think some of the jobs, such as teacher, accountants and store salespeople, will depend on the AI because AI can do these jobs more effectively than human does. It will be related that the labor costs keep low. Another reason is to develop AI system. If the AI system develops, it will be able to surpass the human ability. Now a days, some people work in dangerous place such as construction and mountain. I think AI will work for these place. These reasons make me think that unemployment rate will increase.

ends

II. 広島プロジェクト (Hiroshima Project)

戦争・紛争や平和についての価値観の文化間比較を通して「人間の安全保障」について多角的に理解を深めると共に、英語を用いて「広島」を発信する方法を実践的に学び海外校での発表の機会を設ける。今年度は、メッセージボードを活用し、1対1の議論の機会を設けるなど、全員が意見を述べる機会を設けた。また、連携校である。St. Stephen's Episcopal School (以下 SSES) と連携し、現地での研修で学んだことをもとに、アメリカの高校生に広島を紹介する冊子をチームごとに英語で作成した。完成した作品をウェブサイトに掲載し SSES の生徒たちの意見や評価を得た。また、ヒロシマが教育の場でどのようにとらえられているかを国ごとに調べ、それぞれの違いについてデータや資料をもとに意見を英語でまとめた。この取り組みで高い評価を得たチームは実際に SSES を訪問し、直接プレゼンテーションを行い交流した。また帰国後、校内でフィードバックの機会を設けた。(対象：高校1年生 通年)

| | | |
|----------|---|----------------------------|
| 国語科の取り組み | ： | 比較文化論としての核 |
| 公民科の取り組み | ： | ヒロシマから考える |
| 情報科の取り組み | ： | 広島を発信する |
| 英語科の取り組み | ： | Learning “Hiroshima” |
| フロリダ研修 | ： | Hiroshima Brochure Project |

国語科 (現代文) の取り組み：比較文化論としての核

1. 単元名 『黒い雨』とハリウッド映画 ～比較文化論としての核～

2. 本校のSGH構想との関わり

SGH研究開発目的にある「自ら課題を発見」する力や「好奇心」、「思考力」といったものはもちろんのこと、特に「多様性に対処する際の軸となる日本的な思考の枠組みの習得」を目指し、研究課題の中でも Project Hiroshima に関わる授業開発を行った。

Project Hiroshima の研究開発目的にある「多様な文化・価値観との比較を通して『安全保障』についての多角的な理解を深める」について、もともと高校1年生の夏休みの読書課題として設定していた『黒い雨』(井伏鱒二)を軸とし、核兵器使用に関する描写を含むハリウッド映画と比較することで、核兵器についての被害者側の意識と加害者側の意識とが文化的な表現にどのような差異として表れているのかを考察する授業を構想した。

3. 教材と教材観

・『黒い雨』(井伏鱒二 1966 新潮文庫)

『黒い雨』は、広島の被曝体験をその悲劇が風化されつつある日常生活から掘り起こした作品である。本作はその内容上、「反戦・非核」という文脈の中で語られることが多いものではあるが、本授業においては、あくまで核兵器を取り扱った文学的表現を学ぶ一資料として扱う。

・映像資料 (映画5作品)

あえて娯楽性の高い作品も入れることで『黒い雨』との違いを意識しやすくすると共に、異なるジャンル・制作年度の作品を並べ、アメリカ映画の中にも違いが見つけられるよう配慮した。

①『渚にて』(1959)、②『未知への飛行』(1963)

冷戦期に制作されているため、核戦争の勃発が現実的な問題として捉えられており、核兵器を使用することに対する緊張感が伝わってくる。爆発の威力の強大さに加え、放射線被害という事後の影響への言及がある。

③『トゥルーライズ』(1994)

テロ集団に奪われた核兵器が悪用されるのを防ぐため、核兵器を輸送車ごと海に落とし爆発させるシーンがある。爆発の際に「It's show time!」というセリフがあったり、陸地からさほど離れていない距離での爆発に対し、閃光を見なければ害がないとも取れる発言がなされたりする。また爆発シーンをバックに主人公のキスシーンが描かれるという演出もなされている。

④『ブローケン・アロー』(1995)

地下での核爆発が描かれるが、放射線による影響は地下での爆発であれば問題がないというように受け取れる。放射線よりも爆発の衝撃波による影響の方が前面に描き出されている。

⑤『ダークナイト・ライジング』(2012)

爆発間近の核爆弾を飛行機で海上へ運び、爆発させるという描写がある。陸地からの距離は定かではないが、陸上で爆発しなかったから全く問題がないとも受けとれる描写がなされている。

4. 学習の目標

・思考・対話能力の強化

- (1) 様々な作品を分析的、批評的な態度で対象化し、そこに主体的に問題を見出し、自分なりの意見としてまとめることができる。
- (2) 自分の意見を他者にわかりやすく伝えることができる。
- (3) 自分とは異なる他者の考えを排除することなく受け入れて吟味し、自分の意見を相対化することができる。

・学習内容の理解

- (1) 広島原爆について多角的な視点から考察を深め、多様性に対処する際の軸となる日本ならではの観点を獲得する。
- (2) 文化的表現が、その文化に属する人々の意識と密接に結び付いたものであることを理解する。
- (3) 実際に体験することと表象を介して知ることとの懸隔を実感し、異なる時間・空間を生きる他者と分かりあうための条件について考えを深める。

5. 学習指導の計画 (全8時間)

事前 夏期休業中の課題で『黒い雨』を通読し、印象に残った場面をその理由と共にまとめた。

第1時 『黒い雨』の印象に残った場面・そこから考えたことを2分間のスピーチにまとめ、3～4人のグループ内で互いに発表し合う。

第2時 班ごとに優れた発表を行った1名を代表として選出し、その代表者がクラス全体に向けてスピーチを行う。

第3時 『はだしのゲン』などの漫画作品などの参考資料に触れ、日本における核表象への理解を深める。

第4・5時 核兵器に関する表現を含むアメリカ映画を鑑賞し、各自で気づいたことをまとめ考察する。

第6時 考察をグループ内で共有するとともに、キノコ雲のエンブレムを校舎の壁にあしらった米国の高校を伝える記事といった参考資料に触れ、日米の核兵器に関する文化的な表現の違いについて考察する。

第7時 映画『インデペンデンスデイ』の映像とシナリオを用いたグループワーク。

第8時 授業を通して、自分が理解したこと・感じたこと・考えたことを文章にまとめる。

6. 全体所見・生徒の反応

まず、学習前には、原子爆弾によって広島や長崎の人々がこうむった被害について、主題的に学んだこと、考えたことのない生徒が数多くいた。その生徒たちは、文章や漫画による具体的な表現を通じて核兵器の被害を目の当たりにし、衝撃を受けたようだった。

アメリカと日本では原爆投下に関する認識が異なっているということを理解していた生徒は、帰国生を中心に多くいた。しかし、彼らにとっても、映画という身近な娯楽作品を比較文化論的な視点から実際に分析する作業は新鮮であったようである。使用した側と使用された側との間の核兵器の認識という比較に加え、冷戦中と冷戦後とでアメリカ国内での核兵器の描かれ方が変化しているという通時的な比較にも目を向け、表現と社会的意識との関連性について理解が深まっていた。

本単元では広島での研修よりも前に、自分の考えをまとめる場を設けることを原則とした。研修後に小論文を書く機会があり、事前と事後の意識や考えの変化を明確にするためである。また、事前に考えを整理することで、現地での学びの深化が期待できる。現地での研修では、被爆体験を理解することの難しさ、その理解を次世代へ伝えていくことの難しさと重要性とを深く痛感していた。異なる歴史をもつ者同士が分かりあうために必要な努力と知性について、理解を深めたようである。

高一現代文『黒い雨』ワークシート 組 番 氏名

▼井伏鱒二『黒い雨』を読み、最も心に残った場面を抜き出してください。

【例】○ページ(新潮文庫版のページ数を基本とする)

「□□」に△△が××だった。(※本文の抜き出し)

▼心に残った理由と、そこからあなたが考えたことを書いてください。

【理由】

【考えたこと】

▼次のアンケートに答えて下さい。

(1)あなたは、これまで核兵器が登場する作品や、核兵器の存在が影響している作品(映画・ドラマ・アニメ・漫画など)を見たことがありますか？あったら作品名を教えてください。

(2) (1)で答えた作品を見たときに感じたことや考えたことがあったら教えてください。

『黒い雨』発表 感想記入用紙

★発表者：

★発表者：

★発表者：

★発表者：

★発表者：

★発表者：

★発表者：

★発表者：

★発表者：

★発表者：

★発表者：

●感想・意見・反省など

高一現代文『黒い雨』

1年 組 番 氏名：

●アメリカ映画における核兵器の表現

以下に挙げた映画の各場面を鑑賞し、核兵器そのものや核の使用に対する表現上の特徴について気づいたことや考えたことを空欄に記入しましょう。その際に、以前に授業で扱った『黒い雨』や補助資料を参考にして日本とアメリカにおける表現の違いに注目すること。

浜にて(1959)
ON THE BEACH
監督:スタンリー・クレイマー



あらすじ:第三次世界大戦が勃発し、世界全土は核攻撃によって放射能汚染が広がりは北半球はすでに全滅。僅かに残った南半球の一部地域に人々が暮らすだけになっていた。そんなある日、本國に帰還出来なくなったアメリカ原子力潜水艦がメルボルンに入港する。そこで艦長クワーズは美しい女性モイラに出会い、しばしの休日をを楽しむが、その地にも死の灰は降豪に落ちていた……。



トゥルーライズ(1994)
TRUE LIES
監督:ジェームズ・キャメロン



あらすじ:秘密機関オメガ・セクターの諜報員リリー・タスカーの悩みは、妻ヘレンが浮気しているかもしれないという事。職務乱用で妻の調査を行うハリーだが、ヘレンと共に、核武装したテロリストに捕らえられてしまう。



未知への飛行(1964)
FAIL-SAFE
監督:シドニー・ルメット



あらすじ:アメリカの軍事コンピュータが、誤ってソ連に対する核攻撃指令を発してしまふ。命令を受けた爆撃機は直ちにモスクワに向けて発進、傳達可能がイントーファイナル・セインツを超えてしまふ。ソ連側の温撃部隊も、爆撃機を撃墜することができず、ついに全ての手段は失われる……。



ブローケン・アロー(1996)
BROKEN ARROW
監督:ジョン・ウー



あらすじ:二基の核弾頭を搭載したステルス戦闘機の訓練飛行中、少佐ヴィクター(トウヴォルタ)によって機外へ放り出されるヘルム(レイター)。全ては核を強奪するためのヴィクターの企みであった。砂漠に落下したヘルムは公署監視員のテリー(マンス)の協力を得て、ヴィクターと核の跡を追う……。



ダークナイト・ライジング(2012)
THE DARK KNIGHT RISES
監督:クリストファー・ノーラン



あらすじ:ジョーカーがゴッサム・シティを襲撃するものの、ダークナイトが死闘を繰り広げ姿を撃破してから8年後、再びゴッサム・シティの破壊をもくむベイン(トム・ハーディ)が現われ……。



あらすじと写真はyahoo!映画 movies.yahoo.co.jp より

★広島研修の経験が踏まえつつ、核兵器に関する日本とアメリカにおける表現の違いについて考察してきたこれまでの授業で理解したこと(を)をまとめ、感じたことや考えたことを書きましょう。(〇〇すべし)というように明確な「答え」が出ていなくても、いま抱いている「問い」をそのまます書き記しておきましょう。

『黒い雨』や『はだしのゲン』、『夕風の街』やアメリカの映画を題材に、核兵器をめぐる表現の違いについて考察したこれまでの授業を振り返り、理解したことをまとめ、感じたことや考えたことを書きなさい。(〇〇すべき)というように明確な答えが出ていなくても、いま抱えている「問い」をそのまま書き記して構いません。

約一ヶ月前に終了したドラマ「この世界の片隅に」ではあるシーンについて一部の人たちの間で話題になりました。そのシーンは物語の終盤にある原爆投下後を描いていました。なぜ話題になったかという点、ドラマが放送される前から「実写でものシーンを再現するのか」という議論があったからです。アニメや漫画では、どんなに上手に描いてもリアルではありません。しかし実写ともなれば相当生々しいシーンになってしまいます。そんな中で製作者はあのシーンを実写で放送しました。日本人の反応は「このシーンをやってくれてありがとう」「原爆の恐ろしさが伝わった」などの肯定的なものでした。「黒い雨」や「はだしのゲン」、『夕風の街』も全て幸せが消え去ったというような内容が書かれています。日本人は次の世代に核兵器の恐ろしさを伝え誤ちを繰り返させないために作品を作っていることが分かります。唯一、被爆した国として伝えられることを伝えていくことが大事な役割だと考えます。

対してアメリカの核兵器が登場する映画では、恐怖の内幕にはなっているものの、それによって死者がでることはほとんどなく、被爆した人の描写はありません。基本的には悪役が攻撃の手段として使い、正義がそれをどうやって防ぐのかをエンターテインメントとして表現していることが多いと感じました。ではアメリカ人は核兵器に対する意識が低いのか、というとそれは違うと思います。確かにアメリカの学校では日本のように核について細かく勉強しませんが、実際に広島に行ってみると原爆ドーム周辺には外国人観光客がたくたくいました。核に対して意識をむけている人は増えているはずです。

ミサイル問題などが話題になっている今こそ、原爆の恐ろしさについて日本人がもう一度考え直すことが重要になっていきます。私は核を抑止力として持つことに賛成ですが、非現実的な核廃絶が出来るのならそれが一番平和のための最善方法だと思います。

『黒い雨』や『はだしのゲン』、『夕風の街』やアメリカの映画を題材に、核兵器をめぐる表現の違いについて考察したこれまでの授業を振り返り、理解したことをまとめ、感じたことや考えたことを書きなさい。(〇〇すべき) というように明確な「答え」が出ていなくても、いま抱いている「問い」をそのまま書き記して構いません。

映画などのメディアは、観る者、そして社会に大きな影響を与えようと思う。これは、最近ヒトラーが「グロク・パンサー」が人種差別反対運動を後押ししたことばかりから見ると、これは悪も良きもとらえることができる。第二次世界大戦の時ヒトラーが映画を使って自分のイメージを良くして、自分から悪者になり、映画の持つ力は悪用することもできる。だから、その表現の仕方にも、使い方を気を付けてほしい。

これは、今回授業で見てきた核の表現でも言えるだろう。もちろん、映画やメディアが社会を形作る一方、その時の時代背景、国の社会風潮によって映画も形作られている。これは『黒い雨』や『はだしのゲン』は日本の作品は核を落とされた側として核の被害が生々しく描写されているところから明らかである。それと比べて、落とした側のアメリカの作品では、『ハリー・トレイズ』『ターミネーター』『インジグ』など、アメリカの映画のついで演出は、まはりの核の描写がなされている。これは、アメリカ人の核の被害についての無知がひどいと伝えている。そして、このように核を軽く扱った映画がアメリカで多くあると、それを観る者は核を軽いものとも意識してしまい、この社会風潮が続いてしまっているのもともとも思う。

これをふまえて、これからの社会で必要なものは、核の実情を伝えること、メディアなどと思う。これはアメリカでも、日本でもそうだ。広島女学院で行ったときに生徒の一人が言っていたのは、平和記念公園などで観客各人に説明をするときに興味をもて聞かせる人も、これは全く興味をそらすにして聞かせる人も、多いという話だ。そして核問題について興味がないというのなら興味を持ってもらえるか、という話には、まだ、たいていは結論はやはり、映画や本などのメディアを使おう、ということだ。歴史上の事実として原爆も学ぶことは大事だが、それだけでは興味は湧かない。そこで、この世界の片隅に、このように、絵のイメージなども通して、核に興味のなかに人も気軽に学べるような教材も学べる。問題に、この会話も生まれる。そして、核問題についてどう思うか、よりも、あの松坂桃李が、このように見たら、のが、会話は、始めやすい。平和なくして、戦争や原爆の意識が、つよめ始めている私たち若い世代を教育するに、これは必要はないかと思う。映画や本、これらは、うまく使えば、社会を良い方向に動かすことができるのではないだろうか。

公民科（現代社会）の取り組み：ヒロシマから考える

1. 事前学習

これまでの4年間の取り組みを継続しつつ、新たな視点を入れながら最終年度の「ヒロシマから考える」平和学習を進行した。英語や国語とも並行しながら現代社会の授業を展開することで、多角的な視点を加える効果もあり、生徒にとって意義が大きいプログラムになった。

1学期の『2050年の世界』において、アメリカ合衆国トランプ大統領の誕生、ポピュリズムやアメリカファーストの政策、反知性主義などについての議論も重ねた。また、日本の安全保障政策（集団的自衛権）の転換や憲法改正議論など、自分たちの日常と結び付けて考える機会となるよう時事問題も取り込んだ。そして、北朝鮮の核とミサイル開発の問題と米朝会談の動きを追った。その一方、国連でのI CANのノーベル平和賞受賞、核兵器禁止条約の採択、英語表記された「ヒバクシャ」の存在が世界に紹介されるなど、人類社会の前進が見られたことにも注目をさせることに留意した。生徒たちにとって現在の国際情勢はヒロシマから考えるための生きた教材であり、議論が活発に行われるよう授業を工夫し、広島でのフィールドワークを通じて生徒各人がヒロシマからどう考えるのかを期待しながら授業を進めていった。

第二次世界大戦と日本の十五年戦争について「戦争の加害と被害」という視点から考える授業から始めた。ABC兵器の非人道性、安全保障と核の抑止という観点から考えを深めていった。原爆関連のDVDはNHKの『原爆死』、「オバマ大統領～広島への地へ歴史的訪問舞台裏～」を視聴した。「核兵器の使用を禁止している一方で、核を保有しているのはなぜか」といった問題を提起した。ここであえて「安全保障の理想と現実」という2つの視点や立場から議論を交わした。また今年度は世界情勢の大きく変化したため、例年行っていたSGHプログラムを大幅に修正することとなった。

2. 30年度SGHプログラムの取り組み…生徒が考える「ヒロシマから考える事前学習」

(1) 高校1年1学期に行った授業との関連づけ

『2050年の世界』の中で、国際政治や秩序についてどのような変化が起こるのか取り上げた。19世紀のイギリス、20世紀のアメリカ合衆国という覇権国家による国際秩序と、21世紀に入りグローバル化とともに多極化する世界、テロとの戦いといった不安定要因、トランプ政権の外交戦略（北朝鮮の核とミサイルに対する制裁など）を取り上げた。Gゼロ時代の国際秩序が混沌とする世界情勢に関心が集まった。

(2) 中3公民および、1学期現代社会でのSGHとアクティブ・ラーニングの取り組み

中学3年では「日本はなぜ戦争へ向かったのか」に関するロールプレイ授業、政党作りと模擬国会、模擬裁判など主体的に参加する授業を体験してきた。高校1年では「女性の機会」「AIとの未来」「少子化と高齢化」といった課題を取り上げ、様々な視点から議論を重ね深めてきた。中間テストは、女性の機会に関する小論文を課した。

(3) 事前の「ヒロシマから考える」ための学習内容と、生徒が主体的に学ぶ授業プログラムの報告

戦争に対する理解、国際法上禁止される兵器、戦後の核開発と軍縮、現在の状況を整理した。これは、前年までの反省として、被害者視点に偏った研修になっている点を修正し、多面的に学べるようにした。

- ① 議論難民を出したくない。お客さん（部外者、関心がない）になる生徒が出ないことを目指し、全員が意見を言える授業にするよう配慮した。
- ② 熱い議論ができるようなグループ分けを行いたい。お互いの立場がかみ合わない方がよく、お互いに正当性を主張することができるようにする。いくつかの案の中から、原爆投下直後の広島市民の立場、原爆を投下したトルーマン大統領（軍部）の立場、国連安全保障理事会常任理事国5か国の立場の3グループに分かれた。1時間でグループの主張を調べ話し合いまとめさせた。
- ③ 1クラス約40人なので、生徒に希望を聞きA・Bの2グループにそれぞれ4つの立場に分かれた（1班が4～6人）。議論では自分の立場をメッセージ・ボード（画用紙）に書き発表し、その主張内容について3グループそれぞれが1対1で議論をした。

(4) 実際の授業を通じて

この議論から各立場によって「核兵器を廃絶すべき」、「核の抑止力は必要」、「積極的に保持し使用すべき」という意見に分かれ、日本政府としてはどの立場に立つべきかを考えることにもつながった。クラスによって、またグループによってもアプローチが異なり、議論の方向性も異なることがあった。しかし、8つのグループが、「主張」と「議論」と「まとめ」という3段階を経ることで、多角的な視点を持つことができたと感じている。

現段階では日本を取り巻く東アジア情勢から、アメリカとの同盟関係を中心とした核抑止論を支持する生徒が多かった。

(5) 研修のまとめ

広島研修は平和学習のフィールドワークという意味をもっていた。自分の目で見て、語り部さんのお話を聞いて、自分が感じとったことから考える体験をした。研修後の授業では45分間で「ヒロシマから考える」小論文のテストを行った。英語や現代文の授業でも学んだことを生かし、それぞれの生徒がテーマを決めて書いた。この論文集「20期生 ヒロシマから考える」に一部を掲載した。

(6) ヒロシマから考える」授業の振り返り…生徒たちへのアンケート結果

①当初の授業の目的は達成について…クラスの反応・振り返りシートより

- ・現在の米朝関係からアメリカが抑止力よりも核の使用を否定しない状況を踏まえ、オバマ大統領の広島でのスピーチや核兵器禁止条約を取り上げて対比した。また、「核廃絶」は日本で暮らす高校生には「抑止論」が圧倒的多数を占め、現状を維持することを優先している意識の高さが際立った。
- ・議論難民はほとんどいなかった。活発に参加しチームによっては個々に議論していた。意欲的なチームの主張が議論により刺激され議論が深まっていった。

②課題の発見と提案

- ・流動的な世界情勢の中で、どの視点から見るのかによって考えが変わる。広島でのフィールドワークで、考えのきっかけや、自分なりの答えを見つける傾向が高いと感じた。ロールプレイのための事前調べにより多くの時間を取る必要があると感じた。
- ・トランプ政権誕生は世界と歴史を受け身になってみる傾向が高まってきている。世界情勢は激変しており議論の枠組みがわずか1年毎に違っている現状だけに、最新の情勢をみて教材を精選し授業を組み立てる必要がある。

③話し合いを終えてのまとめ(改善策)

- ・「核廃絶(広島市民)」、「核は使用するべき(トルーマンズ)」、「核は抑止力(核保有国)」という3つの立場ではなく、日本の安全保障の問題をシュミレーションし政策決定する取り組みを導入しクラスの意見をまとめる方法を検討する。

3. 広島研修(10月10日~12日)

(1) 広島研修の目標

- ①広島の過去と現在を知り、戦争と平和について考える。
- ②原爆体験を後世に伝えることに努めている広島の方々の思いを理解し、大切にす。
- ③自発性と自律性を大いに発揮し、各人が常に問題の発見と解決に努める。
- ④事前調査、現地での一歩踏み込んだ研究から得た知識や考えを海外へ発信する。

(2) フィールドワークの行程

- ①平和資料館とボランティアのガイドの案内の下、碑めぐりをおこなった。
- ②原爆死没者慰霊碑前に集合し、大地讃頌を合唱。その後、原爆の子の像に千羽鶴を手向けた。
- ③宿舎にて語り部さんのお話を聞く
- ④SGH校との交流…広島女学院を生徒が訪問
 - ・グループ・ディスカッション…プレゼンテーションの内容や平和教育のあり方について議論した。

(3) その他の主な平和学習関連の研修先

- ①大津島フィールドワーク…人間魚雷「回天」を秘密裏に製造していた島を訪れ見学
- ②江田島術科学校および資料館、呉の大和ミュージアム等の見学
- ③広島湾の似島でのフィールドワーク

タイトル: 出来事の外縁

広島と長崎に原爆が落とされて70余年、現状の課題はそれをいかに伝えていくかということにある。伝えていく軸は2本、より世界に広めていく横軸と、後世に伝えていく縦軸である。縦軸的に、つまり時間軸的にみれば、原爆投下という原点はどんどん遠ざかてゆく。ここで問題となるのが、出来事の形骸化である。

人々が出来事を伝えるときの最大のツールは言語である。言語は出来事の説明には優れている。しかし、それはあくまで人間の理性の部分でしか働かない。原爆の「当事者」たちは、実際、焼ける皮膚の感覚やえもいわれぬ恐怖など、言語化不可能な領域をもっていたはずである。理性では決着のつかない本能的な感覚があったはずなのだ。しかし、実際、皮膚感覚を伴う言語化不可能な領域をもった真の意味での当事者は爆心地近くで即死してしまった。このことから現在の原爆伝承を難しくしている。今の日本には、辛うじて最悪の皮膚感覚を避けた「周辺」の当事者しかいない。彼らと原爆の記憶を分有すると、やはり本能に訴えかけてくるものは少ない。言語化不可能な、いわゆる「出来事の外縁」は記述から消え、ただ原爆投下の事実や死者数だけが言語として残ってしまった。すなわち原爆投下の事実の伝承が陳腐になり、風化してしまっているのだ。

必要なのは「出来事の外縁」を回復する手段だ。真の意味での当事者がいない中、どこに外縁を見出せばよいのか。たとえば、モノの表面である。当時その場において人間と同じように被害にあい、今ではモノキュメントとなったモノー大きなモノでは原爆ドームなどの建物、小さなモノでは当時の市民の日用品などーそれらの表面には当時からの記憶が地層のように現れている。原爆に関しての多くの写真も、そのときどきのモノの表面に着眼してそれを切りとったものだといえる。言語ではなく、視覚や触覚によってその表面を捉えることで始めて、人間は当時の皮膚感覚を分有できるのだ。

結論として原爆を伝える方法は以下のようにすべきだ。政治的解釈や倫理的信条教義を留保して、史実を記述したテキストよりも出来事の外縁が現れるモノキュメントの表面に触れて当時の皮膚感覚を分有していく。

現代社会 2017『ヒロシマから考える』教員と社会科系の進行メモ

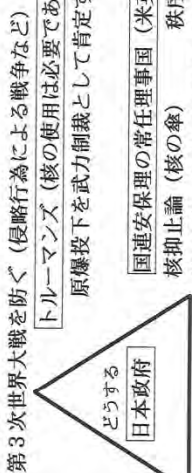
1. 1時間目：ローレルの役割を決める (40人クラスで1チーム5人前後)
 - ①ガイダンスの前に各クラスでくじを引きチーム分けをします…1チーム4人前後×9チーム=36人前後・原則男女複数名で (この時点でどのローレル担当になるかは未定です)
 - ②ガイダンスでは9チームに分かれ、どのローレル担当が良いのかを話し合います…「原爆投下時の広島市民」「トルーマンズ」「安保理常任理事国」×3セット
 - ③グループの希望を聞き割り当てをします (重複はリーダー・ジャンケン) …3ローレルグループ×3セット (A・B・C) = 9チーム (次回はチームでの話し合いになります)

原爆投下時の広島市民 (日本の戦争に同意)、トルーマンズ (核の使用は必要である)、国連安保理の常任理事国 (米英仏中露の核保有国)

※グループは希望で作る…その際に「あえて自分の考えとは別の立場から考えてみよう」と促す
 2. 2時間目：グループを作り話し合う (ボジションペーパーは、英語や現文、現代社会の授業で用いられた教材、歴史的事実などです…それまでの授業内容でも、立場によって捉え方が違ってきます)
 - ①授業の進め方、ルール説明…グループ内での話し合い、各チームの主張・スローガンを「所定のボード (画用紙を配布)」にまとめます (ボスカを提供します)
 - ②話し合う材料は、英語や現文、現代社会の授業で用いられた教材、歴史的事実、必要であればスマホの利用を認めます (ICT室はなし)
 - ③自分たちの強い信念に基づく主張、自分たちなりに筋の通った論理 (ロジック)、感情面でも熱くなれるメッセージ、多くの人が納得し説得できる意見…それを短い言葉にまとめます
 3. 3・4時間目：(45分×2) …まず、9グループの主張をまとめたプリントの配布など仕込み5分
 - ①本日の展開についての説明5分 (生徒) ⇒まず、9グループの主張をまとめたボードを掲げ発表する (1チーム2分×9 = 18分) …司会とタイムキーパーも生徒で賛同の拍手、プーイング、いい意味での突っ込み (上品な野次)
 - ②3グループに分かれてチーム対決の討論・議論へ…①の発表をもとに、8分×3回=約24分のローテーション討論を行います (互いの意見を主張し、食い違う点を明らかにし、妥協点探ります) ⇒1回「広島市民 VS トルーマンズ VS 常任理事国」
 - ③再度チームの主張や議論の振り返りをする (10分) ⇒9グループの最後の訴え (1チーム2分×9 = 18分) ⇒残り時間で全体議論へ (振り返りは次の授業)
- この討論で相手を説得するため、自分たちの意見を反映させるよう心掛け、合意点を探る (合意点を探る (必ずしも一致しなくてもよい))
- 45分経過⇒この後、チームでもう一度話し合いの時間を20分とする (他チームとの交渉もありだが個人が密使として動く) …再度チームの主張・スローガンをプラカードにまとめるともう一度、「スローガンをプラカードにまとめ (修正したもの)」発表⇒ほぼ説得スピーチ (1チーム2分30秒×8 = 20分) で終了
- まとめの10分⇒リセットして個人としての考えをまとめていく (最も説得力があったチームを選び、自分の考えも発信) ⇒最終的には現代の青年が、核兵器への関心を高めることを目指す
4. 最後の授業…近未来の日本の選択を考える
5. テモのような形でスローガンを発表…共通の問い「未来の子どもたちに伝えるべきことは?」「人類に核兵器は必要か?」⇒主張し反論を受ける⇒再度話し合いもう一度スローガンをつくる「われわれは、_____からだ」
6. 振り返り

現代の若者として、どのような意識の変化が起きたのか振り返る。付箋を用い、上記の三角形のどこに自分の考えが合うのか横道紙に貼る (クラス毎に違いが出るだろう)

議論のポイントと妥協ラインを設定するか (現実論では解決できない) ⇒かみ合わない意見が出た場合の修正点、議論がどこでかみ合うか⇒それぞれ立場には「正義」「正当性」がある ⇒広島研修後に「ヒロシマから考える」小論文テスト (中間テスト) を現代社会の授業時間に行う…ここがこのプロジェクトのゴールとなる



みんなが話し続けて、みんなで結論を出す (議論と妥協)

1 回目の授業：ガイダンス (プリントの配布、先生からの話が 15～20 分) ⇒生徒司会：今回の説明とロールプレイの役割を決める

I：ガイダンスの前に各クラスでくじを引きチーム分けをします…1 チーム 5 人前後×8 チーム=40 人前後・原則男女複数名で (この時点でどのロールプレイ担当になるかは未定)

II：ガイダンスでは 8 チームに分かれ、どのロールプレイ担当が良いのかを話し合います…「原爆投下時の広島市民」「トルーマンズ」「安保理常任理事国」×3 セット

III：グループの希望を聞き割り当てをします (重複はリーダー・ジャンケン) …3 つのロールプレイグループ×3 セット (A・B・C) = 9 チーム (第 2 回はチームでの話し合い)
 原爆投下時の広島市民 (戦争中の日本国民)、トルーマンズ (核の使用は必要である)、国連安保理の常任理事国 (米英仏中露の核保有国)

2 回目の授業：チームで話し合い

IV：授業の進め方、ルール説明…グループ内での話し合い、各チームの主張・スローガンを「所定のボード (画用紙を配布)」にまとめる (ポスカを提供)

V：話し合う材料は、英語や現文、現代社会の授業で用いられた教材、歴史的事実、必要であればスマホの利用を認める

VI：自分たちの強い信念に基づく主張、自分たちなりに筋の通った論理 (ロジック)、感情面でも熱くなれるメッセージ、多くの人が納得し説得できる意見…それを短い言葉にまとめる

3・4 回目の授業：授業を 2 コマ使い 90 分間議論!

VII：本日の展開についての説明 5 分 (生徒) ⇒まず、9 グループの主張をまとめたボードを掲げ発表する (1 チーム約 2 分×9 = 18 分) …司会がタイムキーパー (賛同の拍手、ブーイングあり)

VIII：3 セットに分かれてチーム対決の討論・議論へ…VII の発表をもとに、8 分×3 回=約 24 分のローテーション討論を行う (互いの意見を主張し、食い違う点を明らかにし、妥協点を探る)

⇒1 回 「A-1 広島市民 VS A-2 トルーマンズ VS A-3 常任理事国」セット 「B-1 VS B-2 VS B-3」セット 「C-1 VS C-2 VS C-3」

⇒2 回 「A-1 広島市民 VS B-2 トルーマンズ VS C-3 常任理事国」セット 「B-1 VS C-2 VS A-3」セット 「C-1 VS A-2 VS B-3」

⇒3 回 「A-1 広島市民 VS C-2 トルーマンズ VS B-3 常任理事国」セット 「B-1 VS A-2 VS C-3」セット 「C-1 VS B-2 VS A-3」

IX：再度チームの主張・ディベートの振り返りを話し合う (10 分) ⇒9 グループの総括 (ボードを掲げ 1 チーム 2 分×9 = 18 分) ⇒残り時間で全体議論へ (振り返りは次の授業)

最後の授業：近未来の日本の選択

トルーマンズ (核の使用は必要) ファシズム国家の戦争を終わらせる

議論の末に日本のあるべき道を考える (憲法・外交・安全保障・どんな国を目指すのか)

近未来の日本政府 (何年頃と設定するか) 10 年 20 年 30 年…

核廃絶

原爆投下時の広島市民

核抑止論 (核の傘)・第三次世界大戦を防ぐ

国連安保理常任理事国 (米英仏中露)

情報科の取り組み：広島を発信する

1. 本科目の目標

情報の授業では、現在の情報社会に対応していくために、情報を適切に収集・処理・表現するための情報活用の実践力が必要となるため、これらの基礎的な知識と技能をコンピュータや情報通信ネットワークなどの活用を通して身につけていくという狙いがある。さらに社会生活の中で情報技術が果たしている役割や及ぼしている影響を理解し、情報モラルの必要性や情報に対する責任についても考えていくことを念頭に置いている。

2. SHG プログラムとしての取り組み

情報科では教科横断型授業開発 SGH プログラム、5年目の集大成としての取り組みにおいて、Project Hiroshima（核兵器、平和、歴史、文化などの観点から広島について広く深く学ぶ）に加わり、公民科、英語科、国語科との教科連携を図り、本科目の授業において「広島研修 事前学習のまとめ」ホームページを2学期に完成させた。

本校では高校一年次の10月に校外研修行事として広島を訪れている。この事前学習として調べる項目をクラス生徒で分担しホームページとしてまとめることを通じて、これまでに培ってきた情報発信力や情報モラルの知識を応用させ情報活用の実践力を発揮する機会を与えることができた。なお、情報モラル教育については、各教科・行事・校外研修などそれぞれの場面において中学1年次より発達段階に応じた指導を継続している。

3. 授業の進め方

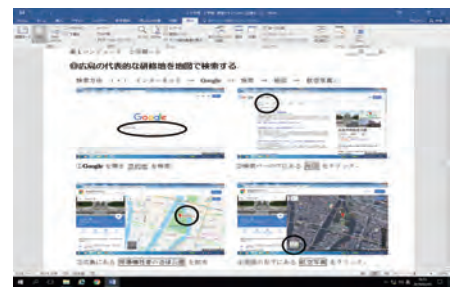
本科目は実習が多いため、情報科と数学科の教員でチームティーチングを行っている。ホームページを作成するにあたり、基本的な知識や用語については授業プリントにまとめて授業を進める。検索エンジンやブラウザ、便利な検索術、サーバーやインターネットの仕組みなどを理解させる。情報源がインターネットからの情報に限らないように、本校図書館と連携してレファレンスツールと参考図書（辞書・事典サイト「ジャパンナレッジ Lib」、朝日新聞データベース「朝日けんさくくん」、読売新聞データベース「スクールヨミダス」を含む）を授業で紹介している。同時に、制作物をまとめる上では著作権についての考え方も重要で、情報モラルという観点から、ルールの説明や参考文献のまとめ方なども理解を深めさせ実践していくことが大切である。

■レファレンスツールの一例

| | | |
|---|--|---|
|  |  |  |
| JapanKnowledge Lib | 朝日けんさくくん | スクールヨミダス |

ホームページの作成においては、HTML 言語を理解させて、ソースの基本となる代表的な「タグ」を用いながら、今後の作成に応用が利くように学習を進行している。ファイルの種類や拡張子の違いについて、文化の発展をささげる著作権の概念、ホームページでの表の作り方と画像の貼り方などを授業で説明して実践させることを繰り返し、最終的には各々のページにリンクさせて「事前学習のまとめ」のページを制作した。

■授業プリントの一例



■20期生 広島研修 学習のまとめ

広島地域周辺に関するキーワードを各自が選定し、インターネット、文献、現地調査などから調べHTML言語を用いてホームページとしてまとめた。調べる項目は「人間の安全保障」「アクセス」「産地」「みどころ・おすすめ情報」「歴史」などを中心に、広島研修の事前学習としてふさわしい内容を取り上げて興味関心を高めることができた。



20期生 広島研修 学習のまとめ



原爆についての教育 in Hiroshima



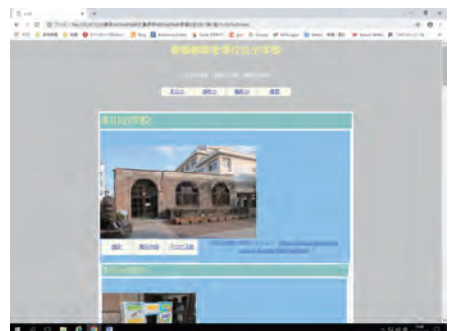
厳島神社



戦後から残る建物



宮島めし



原爆被害を受けた小学校



江田島 ~海軍の昔と今~



広島電鉄



大津島

4. 今年度の取り組みを振り返って

——探求型学習を、いかにして「行動できるリーダーの育成」につなげるか—— 本テーマにおいて情報科では知識・発信・行動を目的とした Project Hiroshima の連携授業を展開した。ホームページ作成を理解しつつ、事前に調べた内容や研修先で得た情報を組み込んでまとめ学習を遂行した。共通テーマである平和学習はもとより班別で現地研修を実施し、人間の安全保障を中核としたSGHプログラムの集大成としての学びを実践することができた。

Learning Hiroshima , 'Hiroshima Brochure Project'

9月～11月下旬

設計意図／背景

(1) 「加害者としての日本」／複数視点 の継承

原爆投下・核抑止力といった問題を考察するに際して、被害者としての日本は踏まえつつ、より客観的・多面的・立体的な視点を得るため、次要素を拡充。

① 「加害者としての日本」の認識

- ・原爆投下と対になって語られる「真珠湾攻撃」
- ・アジアの一国である日本が、なぜ過去の戦争責任を問われるのかを考える際に知っておくべき、「アジアでの日本軍の行為」がどのように受け止められているか

② 米国における複数の視点／第3国からの視点

(2) 各国教育用素材の使用

各国の教育で実際に使用されている素材を使用し、実際の生の記述のされ方を少しでも感じ取ってもらう

実施項目

◆夏季休暇宿題

Reading: *Sadako and the Thousand Paper Cranes*

◆2学期前半

1_1 How the Hiroshima Bombing Is Taught around the World

posts on Reddit (via Washington Post) (サイト: Washington Post記事からリンクされている掲示板※記者等による記事ではなく、一般個人の経験の投稿)
日本・米国から離れ、第3国において(ヨーロッパ・アフリカ・南米・アジア等10カ国)、原爆投下がどのように教えられているか。

1_2 Five Myths about the Atomic Bomb Washington Post (adapted) (サイト: 米国新聞社)

原爆投下を肯定する理由として存在する5つの通説

1_3 Debate: Dropping the atomic bomb was the best way to end WW2

これまで各自が身につけてきた知識に加え、1-1,2で学んだ日本以外の視点も踏まえてディベートを実施。

◆2学期後半

1_5 Alia's Mission

湾岸戦争時にイラクの図書館の蔵書を焼失から守った女性図書館長の実話。戦争は人命だけでなく文化も傷つけることを学んだ。

1_6 Japan 1945 Joe O'Donellの写真集前文とあと書き

「焼き場に立つ少年」の写真で有名なJoe O'Donell氏が写真集の前書き、後書きとして書いた文章。若きO'Donell氏が開戦時と原爆投下後のヒロシマ・ナガサキを見ていかに気持ちに変化したか。日本人、アメリカ人を問わず戦後相手国に対し行動を起こした人の存在を学んだ。

・1_2の直後に、広島研修旅行(2泊3日)で現地訪問

・上記教材と並行して、9月はじめより、1_7のリサーチ開始。

1_7 HIROSHIMA BROCHURE PROJECT

広島について、現在過去を問わず、米国高校生向けに紹介する英語パンフレット(ブロッシャー)を制作

| | |
|---------|---|
| 9月 | 4～5人班で、パンフレット(=ブローチャー)のテーマを決める。 |
| 9-11月上旬 | テーマが設定できた班から内容のアイデア出しを行い、パンフレットを作成していく。 東京外国語大学の留学生が、1～2班ごとににつき1名ずつメンターとして付き、英語にて a)アイデア出し b)テーマ設定 c)デザイン d)英文添削やプレゼン指導を行う。担当教員は、メンターと密に連携して生徒の指導にあたる。 |
| 10月中旬 | 広島研修。各自、班ごとに決めたテーマに基づいて、インタビューや現地調査を行う。 |
| 11月上旬 | パンフレット完成。SSESの生徒と作品をシェアするために、ウェブサイトにパンフレットをアップロード。 |
| 11月中旬 | プレゼンテーション・セッション。パンフレットの良さがうまく伝わるように、各自プレゼンテーションを用意。評価には、東京外国語大学の留学生と担当教員があたる。 |
| 12月上旬 | パンフレットをSSESの教員と東京外国語大学のメンターに評価してもらい、それを課題の提出率やプレゼンの評価と総合して、上位12チームを選考。校内選考の結果をSSESに送り、その中からトップ2を選んでもらう。 |
| 12月中旬 | SSESがトップ2を決定。学年集会にて表彰式。9名の生徒が選ばれる。(巻末資料参照) |
| 2月初旬 | SGH フロリダ研修実施(詳細は「SGH フロリダ研修」の項を参照。 |

<生徒の感想>

- ・Brochureの作成は大変だったけれど、自分たちで内容を全体的にまとめることで、興味や理解が深まりました。メンターさんとのセッションは、とても良いアドバイスをたくさん頂きました。
- ・メンターさんの意見を積極的に求めてより良いものを作れるように努力することができた。
- ・BrochureはFloridaの高校生がどんなデザインを好むか、考えるのが難しかった。
- ・メンターさんも人によって生まれ育った国が違い、意見が異なり、それを知ることができて良かった。
- ・とても面白かったです。結果的に時間が足りず、改善したかった点もありましたが、なんとかそれなりのものはでき、12チームに選ばれたのでとても達成感があった。
- ・アメリカの高校生は何を思うか、私たちとの考え方の相違点は何か。それを意識してBrochureを作りました。プレゼンの練習は大変だったけれど、模造紙とか矢印の磁石を使ってオリジナリティを極められたかなと思います。楽しかった。
- ・メンターさんとの会話は簡単ではなかったけれど、実際の自分の英語を話す良い機会だった。Brochureは少し時間が足りなかったけど、グループの人と協力しながら私たちなりのベストを尽くせたと思う。原爆や広島に関しての単語力は上がった。

S1EA Term2 Lesson1-1

How the Hiroshima Bombing Is Taught Around the World

Posts on Reddit (via Washington Post)

Aug 6, 2015 By Herman Wong

<https://www.washingtonpost.com/news/worldnews/worldviews/wp/2015/08/06/how-the-hiroshima-bombing-is-taught-ariybd-the-world/> (accessed on September 4, 2017)

NOTE:

Down below are only eight among more than 2,500 posts, taken arbitrarily. It is strongly advised that you not regard these comments as the representation of the mainstream opinion in each country.

Example Korea

I attend a school in Seoul. I remember 2 parts — first, to end a long-drawn-out invasion of Japan and any territories in order to secure a surrender. And secondly, to show the world that the US had the technology and was willing to use it as the US considered a postwar political situation.

1 Singapore

I only did history up to high school, and ww2 history mostly covered the Japanese invasion and subsequent horrific crimes they committed in our country. The war ended when the Americans dropped the bombs, after which the Japanese surrendered unconditionally and returned us to the British (we were a crown colony back then). The main questions raised were not why the bombs were dropped, but why they were dropped so late, and only after so many died and suffered. Pearl Harbor was covered a little, so we had an idea why America joined the war, and the sentiment I got was that if not for the bombs we might still be a Japanese colony.

My grandparents, who were alive during the war, would have been perfectly happy if a dozen more had been dropped. (以下略)

1. Hiroshima's History

About 10,000 years ago, most of Hiroshima was submerged in the sea. When the mountain sediments came falling down, it accumulated in the sea and Katsunari Mizuno who ruled Hiroshima, instructed landfill to make new land.



How did Hiroshima develop so quickly?

Katsunari encouraged the cultivation of cotton flowers in the new land and the production of textiles flourished. Also, because Hiroshima faced the Setouchi sea and therefore was suitable for water transportation, shipbuilding became popular.



Cotton Flowers

Using their water transportation to trade cotton flowers, Hiroshima strengthened their relations with foreign countries.

The small city was able to incorporate western culture and developed rapidly.

The People's Love for Hiroshima

Beautiful islands in Hiroshima such as Miyajima were believed to be a place where gods live. Because of this, it was prohibited to cut down the trees or pollute the land of these islands. People in Hiroshima made shrines to cherish the land and were proud of their city.



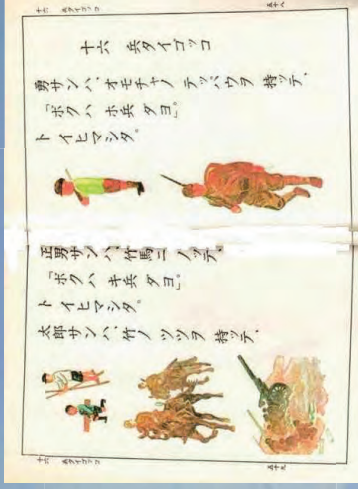
However few years after this, the join of WWII militarizes Japan and ideas such as loving their land, becomes long forgotten.

References
まちのかたち 広島市ホームページ 2018.11.6
<http://www.city.hiroshima.lg.jp/www/contents/1266736459105/>
広島の歴史 広島市ホームページ 2018.11.7
<http://www.city.hiroshima.lg.jp/www/contents/111373388687/index.html>
西本俊典『広島、1945』(南女社、2012)
NHKのタイムマシン NHK 2018.11.4 <https://www.nhk.or.jp/timemachine/hiroshima/>

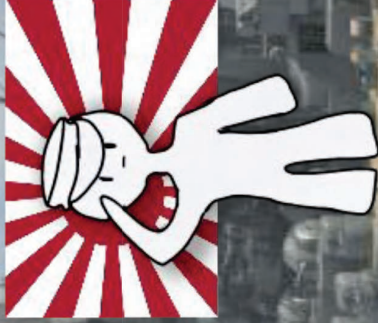
2. The Road to WWII

Militarized Japan

Japan held strong militaristic ideals before and during World War II. With the citizens riled up for war and its glory, Japan headed into the Japan-China war and World War II. In school they told children stories about the military and put them on their textbooks (as seen on the right), and even normal citizens trained with a bamboo spear.



Textbook during the WWII



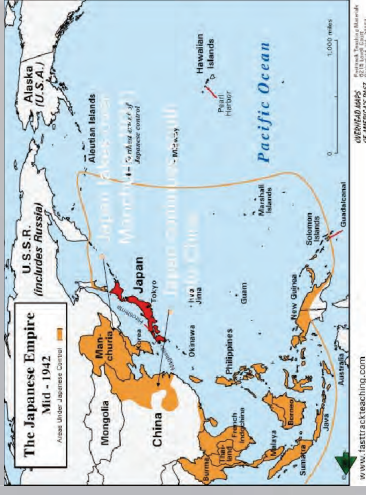
War and Statism

In statism, the country's best interests are prioritized over anything else. Under this belief, it was believed to be an honor to die for one's own country, and manned suicide torpedoes were invented. A pilot of "Kaiten", the first Japanese suicide attack craft, left in a will for his family, "If you hear news about my death, please be proud of me."

Japan as an attacker

Although Japan received horrible damage from the A-bomb, one thing we must never forget is that Japan was also an attacker. Japan invaded East Asia, Southeast Asia and Oceania, and attacked America and other

Allied countries. There caused massacre; the military used chemical weapons that were forbidden by the Geneva Act. In addition, Japan occupied Southeast Asia such as the Philippines, and is responsible for committing many war crimes such as killed many civilian under the rule of Japan.



The Pearl Harbor Attack

December 7, 1941, the Japanese launched a surprise attack on the U.S. Naval Base at Pearl Harbor in Hawaii.

This was a key event that brought the U.S. to join war. The attack of Pearl Harbor proves that Japan was an attacker to America and took away the many lives of innocent people just how the A-bomb did.

References

- 回天記念館/パンフレット 2018.11.5
<https://www.city.shunan.lg.jp/site/kaiten/16942.html>
- 大久野島 観光スポット 竹原市公式観光サイト ひろしま竹原観光サイト 2018.11.6
<https://www.takeharakankou.jp/spot/4304>
- Fasttrack to America's Past Teachers Key 2018.11.8
http://www.fasttrackteaching.com/fiap7/Teacher_Key_Pages/Section_7_Key_Pages/Key_S7_194_195.html

3. The Atomic Bomb

August 6th, 1945 8:15 a.m. death fell from the sky as a flash of light and a wall of fire destroyed Hiroshima. Over 140,000 people, 40% of Hiroshima's population was killed by one atomic bomb. These people were innocent citizens who had an ordinary life, just like you and me.



A watch stopped at 8:15, when the bomb was dropped

In seconds, the city of Hiroshima had disappeared, buried under cries of pain and piles of corpses. Not only did people die of burns or being crushed to death, many of them died because of the radiation from the A-bomb.



Bottles melted from the heat of the explosion



The radiation caused people to vomit blood and hair to fall out from one's scalp. People were scared than ever of these strange symptoms and died in fear.

Moreover, the painful wounds of a survivor discriminated them from society, which left a deep scar in the heart of the survivor. Many weeped day and night that their family, dreams, hopes, everything was over.

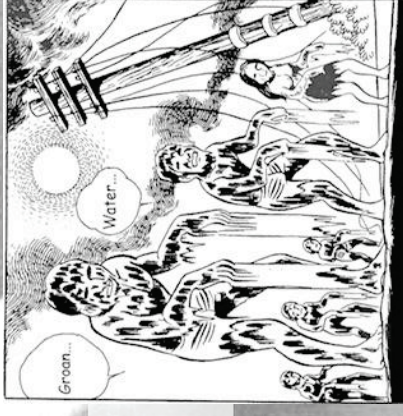
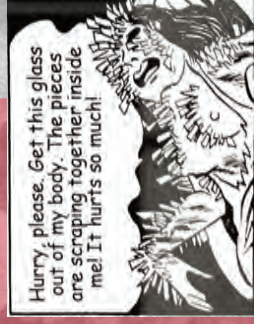
Voice of a survivor

Masao Maruyama was one of the victims of the A-bomb. His words touched our hearts as he described what he saw on August 6th.

“Suddenly a flash of bright light came into view, and a blast slapped me onto the ground.

As I slowly opened my eyes, I saw black burnt corpses piled onto each other in the streets, and people drenched in blood staggering across the ruins of Hiroshima.

The sun shone brightly on the limp skin hanging down from their bodies, and the cries of help seemed like the high pitched scream of cicadas .”



Barefoot Gen

Barefoot Gen is a comic series by Kenji Nakazawa, who is a Hiroshima A-bomb survivor. This comic shows how Japan changed before and after the war, and depicts the events of the atomic bombing.



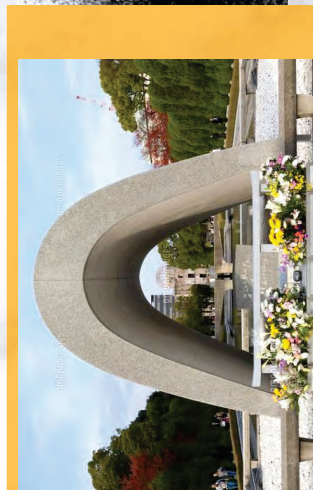
Reference
Nakazawa, Kenji.
BAREFOOT
GEN VOLUME 2.
San Francisco,
Last Gasp, 2005.

4. Recovery

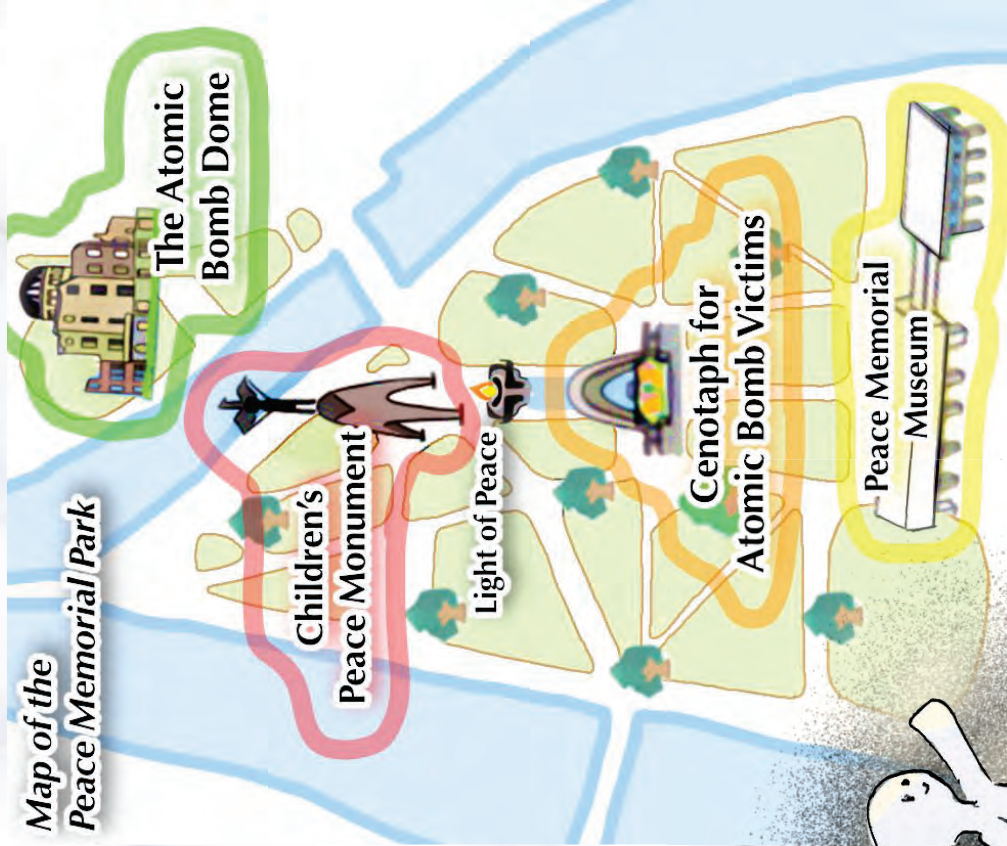
In 1952 the construction of Peace Memorial Park was decided. The areas close to where the A-bomb was dropped was repaired into a park to never forget the tragedy in Hiroshima and move a step towards a peaceful world.



This monument was built for Sadako Sasaki and the thousands of innocent children who died due to the atomic bombing. Sadako was a young girl who died from leukemia ten years later after the bomb dropped. Throughout her long illness, she folded paper cranes which symbolized the wish of peace. Even today, paper cranes arrive at this monument from all over the world.



More than 290,000 names of those who lost their lives to the bomb are inscribed in the central stone vault.



Along with society's recovery, slowly healed the hearts of people in Hiroshima and gave them the courage to raise a voice for a world without nuclear weapons.

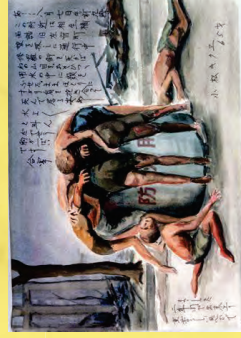


The dome reminds us of the horrible tragedy that mankind caused, while it continues to symbolize the voices for world peace.



Textbook after the war

Students used textbooks smeared in black ink. The ink covered up anything that was related to war to change their way of a militarism education.



A picture that a victim drew

The peace memorial museum was made to tell the world about the reality of the atomic bomb and advocate world peace.

5. Hiroshima Today

Despite the bomb, Hiroshima is now a beautiful and developed city.



President Obama's Visit

On May 27th, 2016, President Barack Obama became the first sitting U.S. president to visit Hiroshima. This was a historic moment for both countries because of their difficult history, but more importantly, it spread the awareness of peace in our global society.



Peace Education

At schools in Hiroshima, students are given special education on the atomic bombing in Hiroshima and Nagasaki. The material focuses on the damage it caused, as well as on the concept of “peace” in our global society.

Hiroshima's Hopes Towards Peace

When we interviewed the people of Hiroshima, we were met with many opinions. Some believed that complete riddance of nuclear weapons was the only way to achieving true peace. Others thought that was unrealistic, and instead hoped that mutual possession of these weapons between countries would deter the use of them.

However, everyone we met had one belief in common—that nuclear bombs should never be used ever again. “We tell this message because we are the only ones to have ever experienced it. Nobody deserves to go through the same pain and suffering as we did,” said a survivor of the bombing.

We hope that after reading this brochure, you'll hold more interest in Hiroshima. Of course, it is most famous for being atomic-bombed 73 years ago. However, the tragedy has not been forgotten. Even today, there are people working to ensure that the same mistake is never made twice.

ABC-11

Team: Peacia

Aiming for a peaceful world — reflecting upon a tragedy —

1930

London Naval Conference was concluded

1936

Revocation of London Naval Conference

1937

Yamato was produced

1941

Dec 8th

Japan attacked Pearl Harbor
Outbreak of the WWII

1941

Dec 17th

Putting Yamato in commission

Battleship Yamato



Battleship Yamato was the biggest and strongest battleship that Japan owned during WWII. Yamato was produced at shipyard of Japan in 1937, and it started being used in 1941. In the Battle of Midway, although Japan suffered heavy casualties, Yamato greatly contributed to the battle. This ship took part in many naval battles, but was finally sunk in a battle that resulted in the loss of Yamato, nine other ships and 4,000 lives. Now, Battleship Yamato is at the bottom of the sea around the Kagoshima prefecture. Its relics are preserved as valuable historical materials.

The Japanese Navy felt huge responsibility in doing their jobs; many crew members were taught to continue their work even in situations in which crew members had to risk their lives.

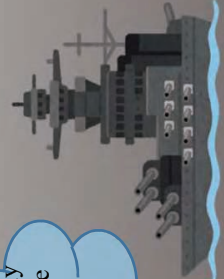


Table of contents

- P.1 Battleship Yamato ... The biggest battleship in the world
- P.2 Suicide Attack ... Attack which Japan forced to soldiers
- P.3 Kaiten & Kamikaze ... Some kinds of suicide attack
- P.4 Atomic bomb ... Dangerous weapon and tragedy
- P.5 Towards the future ... Our opinion

Yamato had state of the art technology; the accuracy of measuring the distance to the target was one of the highest in the world for that time. This technology had a great influence on the precision industry after the war.

It had 9-18 inch guns—very big and powerful.

It also had 6 aircraft.



Yamato's screw has three wings. The postwar casting industry was influenced by the making of these screws.

It could travel at a speed of about 45 kilometers an hour and had a range of over 10,000 kilometers. It was 250 meters long, 39 meters wide and carried 2,500 crew members.

VS



1942
Jun

Battle of Midway

Kaiten

The Kaiten, the human torpedo, was invented in 1945, the last year of WWII. It was named in the hope that the Kaiten would help turn the tables against America. Kaiten could carry large quantities of explosives, and it had more power than that of two medium sized buses. It mainly attacked enemy battleships.



O-ka

The O-ka was a small aircraft weapon equipped with a bomb at its nose. It was hung by the mother machine, and released near the target. The crew would then navigate the ship and hurl itself at the target. From our allies, it was called "BAKA BOMB" (also called "BAKA") which meant "fool bomb" in Japanese.



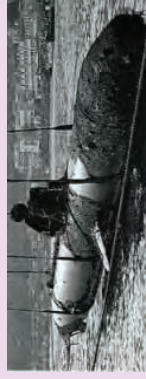
1944

Battle of Leyte Gulf

Towards the end of the war, as the situation for the Japanese quickly turned south, the Japanese army started to increase the usage of inhuman weapons like the Kaiten. Many of these weapons relied on individuals giving up their lives to complete the missions. However, because of the ideology that sacrificing your life for the country was an honor, many young men voluntarily

Kairyu

The Kairyu was the world's first winged submarine. Despite the production of about 230 of these submarines by the end of the war, this weapon was never actually used in battle. The difference between the Kaiten and the Kairyu was that the Kaiten was a one-seater, but the Kairyu was a two-seater. The Kairyu was very swift, and could move up and down like a helicopter underwater.



1944
Aug

Kaiten was born



Suicide Attack

joined in on these suicidal missions. Back then, countries like England, Germany, and Italy were also using similar weapons. However, unlike in Japan, these countries prioritized the survival of the soldiers participating in these missions. During the war, the predicted hit probability of these suicide attacks was only 11%. Nevertheless, the Japanese government continued these suicide missions. The precious lives of countless soldiers were lost through these missions.

Kamikaze

The Kamikaze was an aircraft designed to hit enemy battleships straight on and explode upon impact. There were no wheels attached to the aircraft, and there was only enough to reach the target. On top of this, because there were no ejector button or parachutes, the soldier maneuvering the aircraft had no choice but to die with the plane. Due to a gasoline shortage, the troops weren't even allowed sufficient training for their suicide missions.



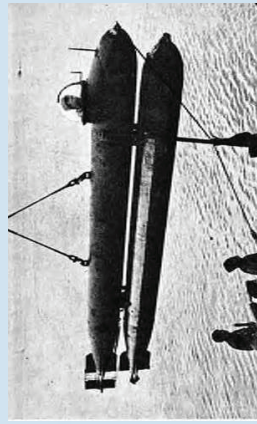
Shinyo

The Shinyo was a small boat that carried around 250 kilograms of explosives. Since the ship was only around 5 meters long and was made out of plywood boards, it was easy to make even when supplies were scarce. Many of these ships were damaged beyond repair during training, and many times the Shinyo couldn't even reach the enemy ship before exploding. Because of this, many soldiers' lives were lost without even fighting. The Americans called this boat the "suicide boat" for its 100% mortality rate.



Kaiten

The Kaiten, used during WWII, was a special attack weapon. The cruising distance was much longer than torpedoes from any other country, and it had amazing power. The cockpit was installed in the central part of the torpedo. The inside of Kaiten was completely dark, and extremely high skill was required to control the torpedo. It was said that six eyes and six hands were required for perfect operation of the machine. However, the power of these weapons was not very high, and there were many cases in which the torpedo would explode before it reached its target. Therefore, the hit fell far below its expectation.



Kaiten was pulled down to the sea with a crane.

1944
Oct

Kamikaze Squadron Sortie For the first time

Otsu Island was famous for the training facility of the human torpedo "Kaiten". Currently there are shooting grounds and substations, and the training facility has been turned into a museum.



Otsu Island used to have a Kaiten Training Base, where young people were trained to maneuver the kaiten. It is the only place in Japan where the base remains like it was during the war.



1945
Mar 10th

Great Tokyo Air Raids



Will of special attack corps

This is a part of the will of one of the Kaiten special attack corps.

"Mother, I will be killed for my country in three hours. But mother, please think about it. What do you think will happen if I do not go as a commando today? War is approaching the mainland. I will go because my mother who I love more than anyone else in the world, will die if I don't go. That's why, mum. Please don't cry because I was killed today. But as the gentle person you are, I know you won't be able to withstand my leaving. Mother, I am not afraid of any enemies. What I am most afraid of is the fact that you're going to mourn for my death."



Zero Fighter

The Zero Fighter was a combat plane which the Japanese Air Force used the most in WWII. In comparison with many other fighter planes during that time, the Zero Fighter were very high levelled. In particular, the cruising distance and the athletic performance were very impressive. Also, because the wing loading of the main wing was significantly lower than that of other countries, and the turning performance was high. In addition, the ascent performance was also good and it was very effective for aerial combat. However, the defense performance was terrible, due to the fact that the Zero fighters were specialized for attacking, and because weight reduction was promoted. Also, it was not able to go down rapidly since it was too fragile. In addition, the structure was complicated, so it was difficult to manufacture.

Kamikaze

Japan's loss at the Battle of Midway resulted in a huge disadvantage in WWII. Training the pilots took as long as 300 hours.

However, there wasn't enough time or gasoline, so the government made soldiers crash into American aircraft carrier with the Zero fighter, known as one of the strongest planes in the world.

Many Japanese people thought that participating in suicide missions were highly honorable. People who rejected offers to join in these missions were called cowards, and made fun of.

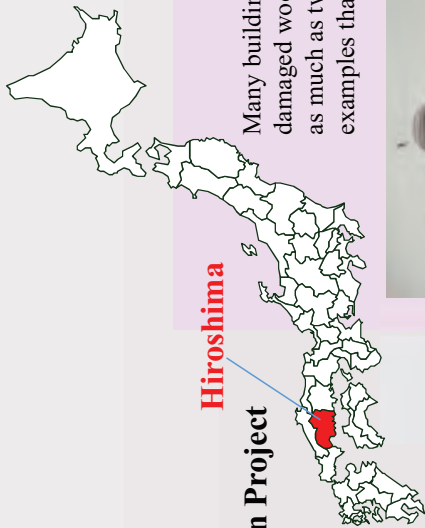


People sending off the Zero Fighters.

1945
Apr 7th

the battleship Yamato sank

Atomic bomb



1945
Jul

Success of Manhattan Project

Hiroshima

Bomb blast

Many buildings were burned or collapsed by the A-bomb. The blast damaged wooden houses and other structures. The bomb damaged buildings as much as two-kilometers away from the hypocenter. Also, there are some examples that glass windows cracked as far away as 27 kilometers.



Dropped
A-bomb

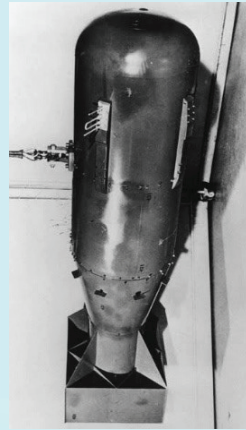


This is “Genbaku Dome” which was destroyed by A-bomb. “Genbaku” means A-bomb.



Manhattan project

After the discovery of the uranium nuclear fission in Germany in 1938, research on nuclear fission began in the United States. When the Second World War began, there were rumors going around that the Germans were well on their way to finishing an atomic bomb. Upon hearing this, the United States started to panic, and atomic bomb testing began abruptly.



“Little boy” is the codename of the atomic bomb that the American army dropped in Hiroshima City during WWII.

1945
Aug 6th

Dropping the Atomic bomb in Hiroshima

Heat ray

The first thing citizens suffered was the heat ray emitted from the A-bomb. Skin on people who were close to the explosion melted, and many people dived in river to get away from the heat. Many people died, and the surface of the river was covered with dead bodies.



The mushroom cloud

resulting from the explosion rose 18 kilometers within ten minutes.



Radiation

Radiation poisoning was another reason why many people died. People who survived explosion were exposed to high levels of radiation, affecting their health in many ways. After two or three years, many people died from leukemia and cancer. Also, many patients suffered from reduction in lymph cells, nausea, and hair loss. This was called the Atomic bomb disease. People who were living in Hiroshima at the time were avoided by many people, for the fear that the disease might spread. Many books that talked about Hiroshima and the disease were wrote during this time.

Forty-three seconds later, 1,800 feet over Hiroshima, the atomic bomb named Little Boy exploded with a white-hot light. It was like a million flashbulbs going off at once...

FLASH



“Hadashi no Gen”, the most famous comic that wrote about A-bomb. It is translated in many languages.

1945
Aug 9th

Dropping the Atomic bomb in Nagasaki

1945
Aug 15th

The end of the war

Statue

140,000 people died in Hiroshima, and thousands of others got damaged mentally and physically. Many statues were built to console dead people and people who survived. Although this is not known that much, 12 American soldiers died in explosion. There is statue for these soldiers as well, located in the Hiroshima Peace Memorial Park. These statues are very important, because they warn people about the devastating results of wars, and tell the importance of peace to those who have not experienced war.



One of statue says “Please sleep peacefully. We won’t repeat this wrongdoing.”

Towards the future

We as a group believe that it is very important for all of us to learn not only about one side of the war, but to look at many perspectives. Think about the position of your opponent, and what they were feeling and thinking during the war. Eradicating the concept war may be difficult, but it is the role of our generation to convey the misery of war, so that future generations don't make the same mistakes that we made. We think that educating many people about the war is the first step towards a peaceful and safe future for the world.



Actions for peace

The united nation is taking many actions towards peace. Peace keeping operations(PKO),are one of those. PKO is an important activity for peace, and they are now working in Africa and Middle East. Their work used to be mostly centered around monitoring situations within warring countries. However, recently they're supporting the Judicial reform or election and other things. Through these actions, they are indirectly contributing to worldwide peace. In Japan, elderly people are telling what happened during war to people who didn't experience the war. It's mostly about bombing to the cities, especially Hiroshima and Nagasaki. By telling these stories to the future generation, they are aiming to enlighten everyone about the threat of war and importance of peace.

Sadako Sasaki

Sadako Sasaki, born in 1943, was exposed to radiation at the age of 2. She liked exercise when she was in elementary school and lived healthily, much like normal students her age. However, just before graduating from elementary school, she developed the atomic bomb disease. While she was at the hospital, she folded paper cranes. She enrolled in junior high school but died in 1955 without going to school even once. After that, a bronze statue of her was made by her classmate; this is the Children's Peace Monument. In the stone slate placed under the statue, are the words "This is our cry, this is our prayer, to peace the world into the world". A golden crane hangs inside the tower. Even now, many folding cranes are hung by children from all around the country around the Children's Peace Monument.



Children's Peace Monument

Senbazuru is a string of a thousand paper cranes. It is usually sent to a person who is ill or injured as a prayer for recovery. The crane is a symbol of happiness and long life in Japan.



Senbazuru is a string of a thousand paper cranes. It is usually sent to a person who is ill or injured as a prayer for recovery. The crane is symbol of happiness and long life in Japanese.



References

- 熊谷充晃「ゼロ戦、「圧倒的強さ」ゆえに生じた悲劇」Business Journal. 7 November 2018. <https://biz-journal.jp/amp/2015/08/post_11258_2.html>
- 周南市「周南市回天記念館」4 November 2018. <<https://www.city.shunan.lg.jp/site/kaiten/4080.html>>
- The Sankai news「人間爆弾「桜花」最後の証言」3 November 2018. <<https://www.sankei.com/smp/premium/news/180815/prm1808150002-s1.html>>
- Asahi Shinbun company「原爆ドーム、世界遺産登録20年」3 November 2018. <http://www.asahi.com/special/nuclear_peace/gallery/dome20th/023.html>
- NHK「戦跡 薄れる記憶、2017、8、6放送」19 October 2018. <<https://www.nhk.or.jp/d-navi/link/senseki/>>
- 国際連合日本政府代表部「平和と安全」9 November 2018. <<https://www.un.emb-japan.go.jp>>

フロリダ研修

1. 日程: 2019年1月31日～2月7日
2. 担当: 石原佳枝 (渋谷教育学園渋谷高校)、Mr. Patrick Whelan (Saint Stephen's Episcopal School)
3. 経緯: ※今回が5回目の派遣であった。

高校1年一般英語科を対象としたSGHカリキュラムの一環。

生徒は9月より11月までHiroshima Brochure Projectに取り組み、広島を海外に発信するパンフレット(英語)を作成した。全37班の中から、パンフレットの完成度・英語での発表・東京外国語大学留学生とのやり取りを総合的に評価し、まず12班を選抜した。その中から、米国フロリダ州にある連携校のSaint Stephen's Episcopal School (以下SSES)が上位2班を選び、SSESにて研修を行った。

4. 事前学習: 計8回(冬休み～研修前まで。昼休み・放課後を使用): 研修趣旨・概要説明、発表準備

5. 研修内容

| | |
|----------|--|
| 1/31 (木) | 11:30 成田空港出発 ※途中、ダラス州ダラス・フォートワース空港で乗り継ぎ 15:10 フロリダ州タンパ空港到着 15:30 学校の送迎ワゴン車でSSESのあるブレイデントン市に向けて出発 16:30 SSES教室で、ホストファミリーと対面、帰宅 ※以降、家族ごとに自由時間 |
| 2/1 (金) | 7:50 ホストファミリーと登校 8:00 学校案内(ガイドとして代表のSSES生徒会役員生徒が同行) 8:50 ①「AP世界史」授業(各国の第2次世界大戦に関する描写と日本との比較、核のない世界は実現できるか 発表・議論) ※AP: 習熟度授業の上位クラス 9:40 ②1年生の体育参加、その後幼稚園生と交流 11:00 ③「AP世界史」授業(①と同内容の発表) 11:50 昼食 12:25 ④South Florida Museumへ出発 マナティーなどフロリダの海洋生物について学習 14:20 学校に向けて出発 15:00 ホストファミリーと下校 ※以降、家族ごとに自由時間 |
| 2/2 (土) | 終日 ホストファミリーと過ごす |
| 2/3 (日) | 終日 ホストファミリーと過ごす |
| 2/4 (月) | 7:50 ホストファミリーと登校 8:00 ⑤「世界史」授業(①と同内容の発表) 8:55 ⑥Team Success(チャータースクール)に向けて出発 校内見学と生徒交流 11:15 学校に向けて出発 11:45 ⑦「世界史」授業(①と同内容の発表) 12:35 SSESの生徒と昼食 13:20 ⑧Mr. Whelanとの意見交換(global educationに関するセッション) 14:20 ⑨チャペルにて高校生の集会で平和に関するスピーチ 15:00 ホストファミリーと下校 ※以降、家族ごとに自由時間 |
| 2/5 (火) | 7:50 ホストファミリーと登校 8:00 ⑩小学生向け日本文化紹介のプレゼンテーション(6年生) 9:35 中学校のチャペルの授業に参加 10:20 ⑪3年生の音楽の授業に参加 11:00 ⑫移民の人とのトークセッション |

| | |
|--------|---|
| | 12:00 ⑬Marine Science センターにて昼食後、自然をテーマに学習 |
| | 13:00 カヤック体験の準備 ※派遣生徒+引率教員のみで日本語を混ぜて様子の確認 |
| | 13:20 ⑭学校に流れる川でカヤック（2人乗りボート）に乗り、自然観察 |
| | 14:30 学園全体の校長（Dr. Pullen）と挨拶／Mr. Whelan と研修振り返り |
| | 16:00 SSES を出発 |
| | 17:00 レストラン（Linger Lodge：ワニ食）に集合 → 食事～タンパ空港に移動 |
| | 20:30 前泊ホテル（Tampa Airport Marriott）に到着、Mr. Whelan と挨拶 |
| 2/6（水） | 7:44 タンパ空港出発 ※途中、ダラス・フォートワース空港で乗り継ぎ |
| 2/7（木） | 15:30 成田空港到着 |

6. 参加授業・巡見先詳細

◆本校側で準備・発表を行った内容

主要内容として①（③⑤⑦も同様）、⑨、⑩の3つがあり、派遣生徒9名が各セッション2～6名に分かれ、それぞれの担当として準備。

①③⑤⑦高校世界史授業

1学期後半からの Hiroshima Brochure Project で、本年度は、日本側の視点のみに留まらず、トルーマン大統領の立場などの米国の視点、日米以外の国でヒロシマがどのように教えられているか、と多角的な視点から広島長崎原爆投下について捉えた。さらに、現代文の授業で扱った、日米映画における原爆の表象（及びそれに反映されている原爆への認識）の差異という点も、派遣生徒たちには特に印象深い内容だったということであった。以上より、以下のような授業展開を行った。

【プレゼンテーション：各国の第2次世界大戦に関する描写と日本との比較】

30分程度の発表を行った。担当生徒たちは「第2次世界大戦に対する記述のされ方」という点に着目し、各国がどのような方向から描写をしているのか、日本国内で高校生がアクセスできる範囲での文献にあたり、それを発表とした。アメリカはもちろん、インドネシア、中国、シンガポール、ロシア、韓国などの教科書での記述に着目した。その際、アジアのバックグラウンドを持つ SSES 生にも配慮し、日本が他国に対して行ってきた部分もできる限り客観的に示しつつ、他教科や広島での研修を含む自分たちの学習を通し、やはり核だけは使ってはならないという立場を示した。その後、核に関して SSES 生に考えてもらう機会として、「世界で核の使用をなくすことは可能か」というテーマを提示し、6～7人程度のグループごとにディスカッション、発表という流れで授業を展開した。世界史授業担当生徒のみならず、その他の日本の生徒も全員各グループに散らばり、ディスカッションの流れを聞き議論がスムーズに進むようにグループをまとめていた。核使用に関しては、SSES 生は「理想だけれども実現は不可能」という意見が多かったが、「それでも絶対に使用してはならない」という意見もあり、自分たちの意見を強く主張しあう SSES 生同士の議論を目の当たりにし、地球社会の問題に対して「他人事」ではなく「自分事」として真剣に意見をぶつけ合う姿が日本の生徒にとっては印象的だったようである。さいごに、「現在核が使用されたらどうなるか」という英語の短い動画（生徒たちが見つけてきたもの）をクラス全体で鑑賞した。

発表後は短い時間であったが、日米の生徒同士がフリーに会話し、互いに感想を述べあった。このように差異を認識して、相互に意見を交換することの大切さを、参加した全員が認識したようであった。また、改めて英語で発信をすることの難しさ、

⑧ チャペルでの全体集会（スピーチ）

このスピーチは、1学期後半から様々な教科の授業で学んできた内容のいわば集大成といった内容であった。広島研修で原爆ドームを目の前にして感じた想いに始まり、72年前にそこで起きた惨状、そしてその体験を語る

ことができる被爆者の方の高齢化により、生の声を聴くことができない危機が迫っていることを語った。さらに、日本の状況を伝えるだけでなく、日本が過去に他国に対して行ってきた部分にも焦点を当て、加害／犠牲どちらの面から見ても、戦争という過去の過ちを二度と繰り返してはならないという強いメッセージを伝えた。さいごに、2016年に広島を訪れたオバマ前大統領のスピーチを引用し、自分たちの世代がともに平和を作り上げていく責任があることを強調してスピーチは幕を閉じた。

派遣生徒が心を込めて伝えたメッセージを聴衆が温かく受け入れ、聞き入っていたことがよく分かった。スピーチが終わった時の力強い拍手は、派遣生徒たちの真摯な思いが伝わった事をよく示していた。

⑨ 小学6年学年集会（日本の文化紹介／習字・トントン相撲）

小学校6年生40人ほどのクラスに向け、パワーポイントで日本に関する文化紹介を行ったあと、習字のブース、トントン相撲のブースをそれぞれいくつか用意し、自由に体験してもらった。2種類交代制で、トントン相撲ブースでは和紙の折り紙で力士を折るところから始まり、習字ブースでは、平和の「和」を最初に練習し、最後にカタカナで名前を書いた半紙をプレゼントという流れであった。児童たちは日本への関心が高いようで文化紹介にもよく反応してくれ、大いに楽しんでおり、あっという間に終了時間となってしまった。その後、6年生の児童たちからアメリカのお菓子、飲み物をふるまってもらい、伝統的なアメリカの室内遊びを教室で教えてもらうという流れであった。派遣生徒たちもタイトなスケジュールながら、リラックスして楽しそうに過ごしていた。

◆先方が準備してくださった内容

②1年生の体育参加、その後幼稚園生と交流

アメリカならではの広いグラウンドにてサッカーを一緒にしたり、その後教室や庭で絵本を読んだりゲームをしたりという交流の時間となった。1年生、幼稚園生たちは日本からの学生たちにすぐに打ち解け、楽しいひと時を過ごした。

④South Florida Museum 見学

水族館にいるマナティーを見学し、マナティーの生態や生息環境を保護する取り組みなどについてお話を伺った。同時に、小さな蟹やヤドカリなど、フロリダの海にいる生き物に触ることのできるタッチタンクも見学した。

⑥Team Success（チャータースクール）

貧困家庭の子供に教育と食事を与える、幼稚園から中学校までの一貫校チャータースクールを訪問した。栄養の整った朝食を学校でとるなど、正しい生活習慣の習得、資金を含めた生活面での補助を一義的目標にしているが、それに留まらず、学力面での高い達成目標を掲げ、一般の公立学校に勝るとも劣らない学業格付けを得ている（全国統一テストより）。恵まれたSSESや本校とはまた違う移民（ヒスパニック系）が殆どを占める学校空間は、生徒に教育観に全く新しい視座を与えたようである。学校のそばにあるトロピカーナの果樹園から漂う香りに学校全体がつつまれており、そこに勤めている保護者を持つ子どもたちが大半を占めていた。生徒は校内見学の最後に1年生の美術の授業で交流を行い、実際の子どもたちと話すことで、教育が持つ可能性と現状の課題とを深く考えるきっかけとなったようである。

⑧Mr. Whelan への質疑、意見交換

今回、派遣生徒が世界史授業で取り扱ったテーマだけでなく、日米関係に関することやWhelan先生自身の日本とのつながり、このプロジェクトを続けてきた意義などについて、率直に伺うことができた。

⑩3年生の音楽の授業に参加

SSESでは、小学校の音楽の授業として太鼓でリズム感覚を獲得することを重要視しており、小学3年生と一緒に太鼓をたたき授業に参加をさせていただいた。言葉がっつう

⑫移民の人とのトークセッション

親世代がメキシコからアメリカに移民として移り住んできたバックグラウンドを持つ **Lucero Guzman** さんをお招きして、移民を取り巻く現状に関してのセッションを行った。生徒たちは最初は緊張していたものの、後半になると日本の移民問題とも関連させた切り口で質問をするなど、トピックに対して真摯に向き合い、英語で自然に意思疎通をすることができていた。

⑬ **Marine Science Center** にてフロリダの自然に関する学習

主に、午後のカヤック体験に関連して、川の水質やマングローブに関する学習をした。川の水の塩度を測定する装置で数値を確認する体験もさせていただいた。

⑭ 学校に流れる川でカヤック（2人乗りボート）に乗り、自然観察

構内の川を下りながら、マングローブ・ペリカンなど、フロリダならではの自然についてご説明していただいた。

7. 引率者所見

派遣生徒9名は心からフロリダに來られて心から良かったと感じており、事前準備を含め、この研修に参加したことで確実に一人一人の中で何かが変わった。フロリダを発つ前日に、**Mr. Whelan** より、何が一番印象的だったかという問いを投げかけられ、全員がためらうことなく、多様性や教育の重要性について英語で伝えようとしていた姿が印象的であった。各教科の学習内容が相互につながり、英語という手段を通してその想いを伝えることができた体験は、まさに **SGH** の趣旨を体現したものと言えよう。

8. 事後活動

- ・ 3月末 学校の通信にて感想文紹介
- ・ 4月初旬（予定） 始業式にて全校生徒に研修報告（プレゼンテーション）／学年通信にて感想文紹介
- ・ 9月中旬（予定） 学園祭にて研修報告（ポスター）

III. Wars and Conflicts

高校1年間を通じて行ってきた平和学習のまとめとして、現代社会が抱える問題から生じる Wars and Conflicts を以下の6つのアプローチにより解決策を探り、発表し、国際社会での問題や国連の役割について学び、国際情勢に関する理解と知識を深めた。学期をまたいで実施することで、生徒が自身の成長を実感できるよう工夫している。

(対象：高校1年生 1・3学期)

英語科の取り組み：Wars and Conflicts

Wars and Conflicts

1月上旬～2月中旬

Wars and Conflicts に関するグループ別リサーチ及びプレゼンテーション

本年度は、Wars and Conflicts というテーマを扱うに際して、遠い歴史や国境線の彼方の話ではなく、自分の生きるこの時代に実際に存在し、自分に関わる課題としてそれを捉えてもらうために、以下のように枠組みを設定。

(冷戦終焉後の／グローバル化の進展した、文化・民族・宗教・イデオロギーなどの対立が顕著になる)現在の世界に存在している war(s)/conflict(s)について、その対処に必要なことを主体的に提言し、英語で発表する。

(1) 指導目標

- (ア) 自分のグループのピックについて英語で表現できるようにする。
- (イ) 様々な見地から情報を集め、意見を聞くことにより Wars and Conflicts について自分なりの気づき、考えをもつ大切さを知ってもらう。また、Conflicts は戦争・紛争地域だけではなく、わたしたちの身近なところにも存在することに気づかせる。今後の国際理解教育、平和学習に基づくグローバル課題への興味関心につなげていけるようにする。

(2) 実施方法

▶高校1年間を通じて行ってきた平和学習のまとめとして、現代社会が抱える諸問題から生じる Wars and Conflicts を以下のアプローチにより解決策を探る。

A: 国語的アプローチ(新聞・雑誌・文学作品)→「戦争文学」「フェイクニュース」

B: 美術・音楽的アプローチ(映像・絵画・歌)→「戦争における歌の役割」「啓蒙キャンペーン動画」

C: 数学・理科的アプローチ(科学技術・統計・確率)→「戦争におけるドローンの使用の是非」

D: 家庭科・保健体育的アプローチ(保健・衛生・健康・食)→「難民キャンプの食住環境の改善」

E: 歴史的アプローチ(歴史的変遷、過去と現在の比較)→「IS台頭の歴史的背景」

F: 社会科学的アプローチ(経済・教育・法・国際機関・政策)→「国連は本当に必要か」「多文化理解教育」

- ▶アプローチは、チームごとの希望をもとに話し合いで決定した。
- ▶日本国内のことでも世界的な問題を扱ってもよい。
- ▶対処に必要なことを具体的に提言する。
- ▶2学期に行った Hiroshima Brochure Project と同様に少人数(4人～5人)に分け、上記のアプローチから1つを担当する。グループごとにリサーチを行い、課題を見つけ、自分たちなりの解決策について意見をまとめる。
- ▶6分間のプレゼンテーション(1人1分以上話す)とメンターによるQAセッションを実施。
- ▶HBPの時と同様に東京外国語大学大学院留学生が、フィードバックセッションに延べ20名参加した。

(3) 指導実施計画

- ・1 時限目:Project に関するガイダンス、 テーマ決定 Group Work① テーマのブレインストーミング
- ・2 時限目:Group Work②・ 各自リサーチ
- ・3 時限目:Group Work③ Group Work with mentors from TUFS students・
- ・4 時限目:Group Work④・プレゼン準備
- ・5 時限目:Group Work with mentors from TUFS students⑤ プレゼン準備
- ・6 時限目:Presentation Day 1
- ・7 時限目:Presentation Day 2

感想:

メンターの方も人それぞれバックグラウンドが異なり、一つのことにに関して意見も違う。そのため、様々な考え方を知ることができた。

最初は全く戦争や、紛争について知らなかったけど、このプロジェクトを通じて世界に目が向けられて良かった。高校生一人ひとりの力は弱いけど、未来を担う私たちが今ある課題について話し合うことで、世界がちょっとでも良くなったらいいな、と思いました。

SGH のプログラムの一環として、東京外国語大学と連携できることはこの上のない幸運である。特に我々が教材として取り上げる内容に特化した学びを行っている留学生や大学院生が大変多く、何より協力的である。高校1年生一般生の英語の授業では習熟度別は実施していない。したがって、生徒間の英語力の差は否めないし、独力でアウトプットを行うことに抵抗感を感じたり、自信のない生徒もいる。しかし、そういった生徒の中にも様々な分野で独自の強みを持っている生徒が多く、語学的なセンスのある生徒と、それぞれの強みを活かしながら協力し合いプロジェクトに取り組むことができる。

Wars and Conflicts Essay

- ・制限時間20分以内に各自 Wars and Conflicts という題で辞書などを使わずにエッセイを書く。
- ・4月当初に同じ題で書いたエッセイと比較し、1年間の成長を確認する。

①高校1年最初の授業で書いた作文

2018 April

Wars and Conflicts

I think that there is not people who wants to fight in war in the world. But, now there are a lot of war. Why people become war? Because, people can not see the other people. All people don't want to change our thinking. So, people can not and do not agree the other opinion. How can we agree the other people? Please, finding good point the other one. Do not see bad point, and

②高校1年最後の授業で書いた作文(①と同一生徒)

2019 March

Wars and Conflicts②

me. We have to discuss about this topic more.

About 1 years ago when I wrote essay about wars and conflicts I had no idea. I didn't know anything about this topic. However, I have known many information now. For example, Syria war. This is due to Arab Spring. I thought and discussed about how we can solve this problem. Syria war is very important problem in the world. It is because this war is not concerned with only Syria, also joined any other large countries like the United States of America and Russia. We can not chose best solution, but I think that the third force which is not country like the United Nations must intervene. If we solve this war right now, perhaps it will become World War III. Many people in Syria think that we can use biological weapons or nuclear bombs. It become big problem not only Islamic area but also other countries. Of course, Japan is too. We can not change world soon. We do not have big power. We do not have best answer. However, we can talk with friends and teacher. So, we have to discuss about wars and conflicts more, and have to find good answer and solution.

IV. Social Justice and Service Learning Projects

国際社会における諸課題は、歴史的背景や文化的背景、立地条件、発展の経緯など複雑な要因がからみあって発生している。高校での学びにより、幅広い知識の習得していることを確認し、教科を横断した知識をつなぐことで学びを深めた。

また、社会が抱えている課題は、自分と関わりのある問題であることを認識するために、社会貢献活動を自ら計画して実施した。そこで得た学びを全体会で報告するとともに、英語によるエッセイを作成した。(対象：高校2年生 通年)

英語科の取り組み

I Social Justice

II Service Learning Projects

地歴科の取り組み

世界史

地理

家庭科の取り組み

理科の取り組み

英語科の取り組み

I. Social Justice

(1) Human Rights (1 学期前半 10 時間・後半 2 時間)

内容とねらい：グローバル化に伴う世界の状況を学び、世界が直面する様々な問題を人権という切り口から学ぶ。多くの問題にかかわる経済格差、貧困、子どもの人権について読解と Activity を通して理解を深め、家庭科や社会科の授業で学んだ人権について単なる知識で終わらせず、自分たちに関わる問題であることに気づかせる。

1. Economic Inequality: the Growing Gap

現代社会の大きな問題の一つである「格差」の問題をテキストベースで学んだ。途上国の子どもたちに教育が行き届かないことが格差の連鎖を断ち切れないこと、同時に、格差の問題は先進国にも存在していること、格差の解消のために国は何が出来るかについて読み取り、考えた。

2. Child Labor

2-1. Time used on an average weekday

4 人一組でグループを組み、発展途上国の子ども達の生活について知り、その原因を考える授業。まず生徒は、自分が 11 才だった時と現在において、一日の時間の使い方をワークシートのパイチャートに書き込む。その後、グループで 4 種類の児童労働のケースストーリー（それぞれ異なる発展途上国に住む児童の生活を紹介した英文）を分担して読み、それぞれの一日の生活をワークシートの別のパイチ

ャートに完成させる。その後、グループ内でお互いにワークシートを見せながら、各人が担当したケースストーリーについて 1 人 3-4 分程度で英語により説明を行う。他の生徒は、聞きながらメモを取り、お互いの情報をもとに自分が 11 才だった時のパイチャートと 4 人の児童のそれとを比べ、このような違いが生じる原因について議論した。

2-2. Child Labor: Dictation activity

Congo のレアメタルの採掘場で働く子どもたち取材した BBC ニュースを視聴した。劣悪な環境で働く子供たちの存在を知り、児童労働の問題の背景について考えた。また、実際のニュース番組の音声を聞き取り、ディクテーション活動を行った。

3. Coffee Chain Game

コーヒーについての 3 種類のアクティブラーニングを通してフェアトレードについて学ぶ授業。まず、コーヒーが生産されてから消費者に飲み物として届くまでの流通経路（サプライチェーン）を書いた紙を、正しい順番がわからないようにしてからグループに与えた。生徒は、英語で話し合い、正しい順番を考える中で、コーヒーが生産されるまでにたくさんの過程があることを理解した。次に、グループのメンバーを農家・輸入業者・加工業者・小売りなどの各セクターの役に割り当て、500 円に想定されたインスタントコーヒーのビン(500g)1 つにおいて、それぞれ 1 ビンあたりのどのくらいの利益が欲しいかを考えた。生徒は、自分の役の立場で希望する割り当て金額を決め、グループ内で交渉する。話し合いを経て、自分たちの取り分ができるだけ多く、しかし実際のトータルの価格は 500 円になるようにまとめていく。生徒は、最終的に決定した価格を黒板の表に書き、教員が実際の価格を発表。生徒はこの一連の活動から、不当搾取が行われる経緯や交渉における力関係について体験するとともに、交渉力や発想力などを鍛えた。

(2)水資源問題と安全保障（1 学期後半 9 時間）

内容とねらい：世界の水問題について学び、安全保障問題の解決策を考える。7 月末に本学園主催の高校生国際会議（Water is Life）を開催したこともあり、このタイミングに全員で水資源問題を考えた。

1. Where is water?

導入として、TED-Ed を視聴し、我々が現在抱えている水資源問題についての基礎知識と語彙を確認した。

2. We Can't Live Without Water

現存する水資源問題とその要因についてテキストベースで学んだ。Virtual Water の問題、気候変動による水不足、水資源確保を巡る紛争、貧困国の人権問題など、水資源問題には多様な側面があることを知り、その解決には何が必要かを考えた。

3. Zawa-Zawa Land is a Lovely Country!

テキストベースで得た知識を活用し、ロールプレイを通して解決策を考えるアクティビティ。水災害、上下水道の未整備、地下水の汚染、国際河川を巡る紛争など、数々の水問題を抱える架空国家ザワザワランドの高官になって、限られた国の予算を使って、どの問題を優先的に解決すべきかグループごとに英語で話し合った。この国は実存しないが、UN のデータ等をもとに、アクティビティ内の数値が決定

されているため、この国自体が世界の縮図となっている。話し合いの結果をクラスで共有。「多くの人
が被害にあっているから (=重要性)」、「Limited な予算の中で実行しやすそうだから (=実行性)」、「す
ぐに対処しなければいけないから (=緊急性)」といった理由が出た。

4. Japan's Contribution to the World Water Problems

HITACHI、TORAY、Mitsui Corporation Ltd. (日立、東レ、三井物産) の3つの企業が世界の水問題に対
してどのように貢献をしているか推測した後、その3企業について書かれた記事を、一人1企業を担当
して読んだ。他の班員に内容を伝えた後、全員が3企業の記事を読み、自分たちの推測が正しかったか
どうかを確認した。この活動を通し、多くの生徒たちが、日本企業が水問題の解決を通して地球社会に
貢献していることを知り、関心を寄せていた。

(3) エネルギー問題 (2学期前半8時間)

内容とねらい：高校2年生は理科や社会で選択科目が増え、各生徒は専門性が深まる学習をする。エネ
ルギーについては化学、物理、地学、地理、世界史などでそれぞれ違った角度で学習する。その様々な
知識を総合することこそが地球社会が抱える問題を解決する糸口となることを、交渉などのアクティビ
ティを通して気づかせる。

1. Energy for a Stable Climate

現存するエネルギー問題についてテキストベースで学び、nuclear energy や FBR の利点、欠点、世界
各国の捉えかたについても理解を深めた。さらに、日本がパリ協定でどのような約束をし、それが現状
どのような状況にあるかも読み取った。

2. TED Talk - Tshering Tobgay: This country isn't just carbon neutral -- it's carbon negative

Energy for a Stable Climate の文中に取り上げられていた Bhutan の記述について理解を深めるために
TED Talk を視聴した。Bhutan の環境政策について知るだけでなく、non-native speaker の英語を聞き
取る機会にもなった。

3. Renewable and non-renewable energy resources

4人一組のグループを作って活動した。まず、BBC がまとめたエネルギーのリストの解説文 (実際にど
のように利用されているか、長所と短所) を穴埋めクイズにしたものを使用して知識を深めた。その際、
日本の高校生にあまり馴染みのないと思われる Renewable Energy(Wind Energy, Biomass Energy,
Geothermal Energy, Hydroelectric Power)については英文記事を配布した。

4. World Energy Issues ~Present and Future~

International Energy Agency が発行している世界のエネルギー事情に関する資料 (地域ごとのエネ
ルギー消費量、エネルギー源ごとの消費割合、国ごとのエネルギー生産割合、国ごとの電気料金) を穴埋
めクイズにしたものを配布し、各国で使用されているエネルギーの特徴をつかんだ。次に、主要なエネ
ルギー源が異なる中国、アメリカ、ロシア、カナダ、ドイツ、ブラジル、フランス、イギリスの中から、
グループごとに担当国を選び、それぞれの国の経済状況や地理などをリサーチした。最後に、2050 年
の世界における理想的なエネルギー割合と各国で取り組むべき課題を話し合い、①理想を実現するた
めに自国は使用燃料の割合をどう変えるか。またその方法は? ②他の国にリクエストしたいことは何か?

の2点をクラス全体に対して英語で発表した。結果、お互いのリサーチはもちろん、自分とは選択科目が異なる生徒からも情報を得ることができ、思考の幅が広がった。この活動を通し、生徒たちは異なる分野の専門家が協力すると、より優れた発想が生まれることを学んだ。

5. Writing Activity on Energy Problem

自分が渋谷区の区長になった設定で、東京オリンピックまでの2年間に、区の二酸化炭素排出量を減らすためにどのような活動をしたかを考え、区民に対するメッセージという形式の英文でまとめた。(資料1)

(4)Happiness (2学期後半4時間)

内容とねらい:「人間の安全保障」をテーマに人の幸福について考えてきたが、そもそも幸福感とは何か?人はどんなときに幸福を感じるか?金銭面が満たされれば幸福感を得られるのか?などについて改めて考える機会とした。

1. Why money can't buy you happiness

BBCのニュース記事を読んだ。お金があることが必ずしも幸せにはつながらないこと、人が幸せに慣れていってしまうプロセス、目先の欲求を満たすために本当の幸福を得る選択ができなくなるような心理的メカニズムについて学んだ。記事中に出てくるアイスクリームの実験について、自分ならどのような選択をするかを考えるなど、楽しみながら学んだ。

2. How to Make Giving Feel Good

Harvard Business SchoolのMichael NortonとBritish Columbia大学のElizabeth Dunn、Lara Akninが行ったリサーチについての記事を読み、他者に与える行為が自己の幸福をより一層生み出すというprosocial spendingの考えを知った。5ドル札を渡され、これを自分のために使ってくださいと言われる被験者と、他人のために使ってくださいと言われる被験者ではどちらの方が幸福度が増すか?や、スターバックスのギフト券をもらったらどのように使うのが最も幸福度を高めるか?といった実験を知り、自分ならどうするか?を考え、楽しみながら人が本当の意味で幸福を感じるのはどのような時かを考えた。

(5)Islam (2 学期後半 7 時間)

内容とねらい：世界の4人に一人が信者であると同時に、昨今の世界情勢で話題に上がることの多いイスラム教に対して、時事問題と絡めて多角的に理解を深め、メディアの報道に流されて偏見を持つようなことがないようにする。

1. Introduction to Islam / Brainstorming & Quiz

イスラム教についてどのようなイメージを持っているかグループで話し合い、そのイメージがどこから出たものかについて考えた。それをまとめたものやイスラム教についての疑問点を、この授業の一部として行う講演の講師である東京ジャーミイ・トルコ文化センターの下山茂さんに送った。次にクイズやテキストからイスラム教に関する基本的な理解をした。

2. Role of Muslim Women/Gender Issues in Islam

イスラム社会における女性の立場について学んだ。イントロダクションとして、各生徒が持っているイメージを聞いた。head scarf、segregation in a mosque、polygamy など女性蔑視の習慣があると感じていた生徒が多くいたが、女性を男性から守るという考えや、お祈りに集中するという姿勢などからきたことを確認した。

3. What Happened on 9/11? / 911 当日の NY Times

911発生時にはまだ生まれていない生徒たちに、この事件の概要を説明した英文記事で基本知識を入れ、さらに当日のNew York Timesの記事ではどのような言葉を使ってこの惨事を報じているかに着目、当時のTimeやNewsweekの写真も見せた。

4. 外部講師を招いての講演会

前半は、東京ジャーミイ・トルコ文化センター広報・出版担当の下山茂さんによるレクチャーで、事前に送った生徒達のイスラム教に対するイメージと現実との違いについて説明し、疑問点についても回答して下さった。後半は、3人の信者の方にお祈りのデモンストレーションをしていただき、それぞれ小グループに分かれセッション、質疑応答を行った。今年はNY出身のアメリカ人の方、日本人女性の方もいらして多様な観点からお話を伺えた。事後、感想を書いた。(資料2)

5. Record number of anti-Muslim attacks reported in UK last year

Guardian の記事を読み、反ムスリムの攻撃がいかに頻繁に、かつ過激に行われているか、特に女性信者に対する攻撃の多さなどについて学んだ。また、記事の最後にある、「これらを止める最善の方法は教育である」という記述に触れ、自分たちが今このテーマについて学ぶ意義についても再確認した。

(6)Fake News (3 学期前半 9 時間)

内容とねらい：情報操作、Fake News の拡散により、人間ないし国家の安全が脅かされる問題は、現在既に世界規模で対処していかななくてはならない重要なトピックとなっている。この問題について現状を知り、そのような社会に生きる我々が持つべき心構えを考えた。

1. TED-Ed How false news can spread

“A lie can travel halfway around the world while the truth is putting on its shoes.”という Mark Twain の発言とされる言葉を導入に、false news が広まる仕組み、過去と現代のメディアの取材方法の違いなどについて知った。動画の視聴と Dictation 活動により、語彙と基礎知識をインプットした。

2. Believe It or Not: the Post-Truth Era

Fake news が拡散する要因、米大統領選や EU 離脱に関する国民投票などを例とした Fake News が民主主義に与える脅威、特に SNS の影響力が強い現代における問題点についてテキストベースで学んだ。

3. Research Activity and Essay Writing

同じニュースについて 2 つの異なるメディアでどのように報じ方が異なっているかをリサーチし、結果から考えたことをエッセイにまとめた (資料 3)。グループで 1 つの国際的に報道されているニュースを 1 つ選び、リサーチを行った。多く選ばれたニューストピックはレーダー照射、カルロスゴーン氏の逮捕、捕鯨などであった。

(7)Biodiversity (3 学期後半 7 時間)

内容とねらい：生物との連携授業で、地球社会における生物多様性の重要性と、環境に大いなる影響を及ぼす我々人類の責任について学ぶ。

1. What is Biodiversity? Biodiversity IQ Quiz

4 人一組のチームを作り、Biodiversity に関する英語のクイズに答えた。クイズは、Knowledge(10 分)、Listening(10 分)、Reading(20 分)の 3 セクション構成。この活動を通し、生物の授業の復習を行なうと同時に、生物多様性の基礎知識や、人類が引き起こしている地球史上最大の生物の絶滅である「第六の絶滅」について事前知識を得た。

2. When will the next mass extinction occur?

前回行ったクイズの内容を思い出ししながら、大量絶滅に関する 5 分間の TED を見て、その内容に関する質問に答えたり、ディクテーションを行なったりしながら理解を深めた。

3. The Sixth Extinction

人類が引き起こしている「第六の絶滅」について問題提起し、2014 年にピューリッツァー賞を受賞した Elizabeth Kolbert 著 *The Sixth Extinction: An Unnatural History* を教材に第六の絶滅について理解を深めた。特にエピローグにおける筆者の意見に焦点を置き、第六の絶滅によって人類の未来はどのようになるかを考えた。

4. 模擬 Cop24.1 会議の決議案採択

生物選択者が作成した決議案を読み、気候変動についての英語での発表を聞いた上で、生徒それぞれが担当国の政府を代表した大使となって決議案の採択に向けて投票を行った。一人一人に国が割り振られ、その国のリサーチを行い、国の取り組みと決議案から考えられるその国の未来と世界について考えた。

(資料1) Energy Writing

Writing Activity on Energy Problem

You are the head of Shibuya Ward. You are planning to conduct a two-year campaign to reduce carbon emissions until Tokyo Olympics. What would you like to do and why is it important? Write your plan and message to raise awareness of the residents of Shibuya Ward, so that the campaign will be successful.

Hello! I am the head of Shibuya Ward. These days, there are many problems of global warming. As you know, greenhouse gas causes it. So, we decide to plan a campaign to reduce carbon emissions until Tokyo Olympics.

The plan is called "Creating the highest forest in the world". This means that people create forests at the top of buildings. In Shibuya Ward, there are many high buildings. We think that their roofs can be used efficiently to contribute to reduce carbon emissions.

To succeed this project, I'd like to ask everyone who live or work at the building in Shibuya Ward to plant as much trees as possible at the top of it. I hope that everyone makes efforts and this project will be successful.

Thank you for your attention :)

(資料2) イスラム感想

S2 EA Term 2-2

Religion: Lecture and Workshop on Islam

November 28th, 2018

How did you feel or what did you think about Islam after the lecture/discussion? Did you find something new about Islam or Muslim people? Either in English or in Japanese, write down what you thought about or how you felt through the lecture/workshop today.

今日は様々なお話をして下さい、ありがとうございました。イスラム教やムスリムについては、ニュースで見るイスラのことだったり、世界史で習う歴史としてのイスラム教のことしか知識がなく、実際にムスリムの方に話を聞くのは初めてでした。偏見の目など持っていたつもりが、日本で日本の先生が教えた授業、日本で放映されるコースだけで得た知識がものすごく偏っていることに気がさせられました。ルールが多く、縛られた生活をしているというイメージは、より良くあろうとするための努力であると知り、イスラなどの物騒な集団が存在するというイメージは、自分が暮らしている日本でも大差ないことを知りました。私はアタライさんに話を聞いたのですが、日本で当然のことのように存在している「いじめ」やコースで見かける「家族殺害」は個人テロ、と聞き、深く納得しました。今私は神の存在の必要性について疑問を抱いている部分もありましたが、神がいるからこそその平和があるということを理解できて本当に良かったです。また、実際の礼拝を私たちに見せて下さるなど、貴重な体験をさせて下さり、ありがとうございました。

Religion: Lecture and Workshop on Islam

November 28th, 2018

How did you feel or what did you think about Islam after the lecture/discussion? Did you find something new about Islam or Muslim people? Either in English or in Japanese, write down what you thought about or how you felt through the lecture/workshop today.

普段わたしに触れる事のないイスラム教の文化について知識が出来ました。個人的には、礼拝の様子が
すばらしく印象的でした。お忙しい中、本当にありがとうございました。

私は、後半の質問の際、ズベールさんにお話をうかがいました。ハラルフードや5回の礼拝
礼拝で暗唱するコーランについてのお話はとても興味深かったです。そして、ズベールさんの職業である
ジャーナリストとしての体験談は非常に深く感銘を受けました。本やテレビなどのメディアの情報は
嘘が多く含まれている、というのは本当に私も思うと思います。そのため、自分の目で見て、耳で
聞いた事だけが正しい情報だと、他人に伝えるのが自分の仕事だとおっしゃっていたのは印象に
残っています。正しい知識を持ち、調べる事が、正しい情報を持ち入れる事につながります。
そのため、学習をするのだと。本当にそうだと思います。正しい知識を持ち、高い学力を身に
付ける事は、メディアの嘘にだまされない事にもつながると思います。という面でも今自分のしている勉強
は、意味のある物だと感じました。

また、「宗教」という言葉について、「宗」は「先祖のおしえ」「教」は「教えたこと」という意味があり、
「宗教」という言葉の意味は「先祖からおしえられたもの」だとおっしゃっていました。親は子に対し、不利益
になるものは教えない、だから「宗教」は変な物ではない、ということなのだと思います。日本人の多く
が「宗教」と聞いて良い顔をしないのは、どこどこが洗脳であること、確かにその思います。今回の
会で、イスラム教へのイメージが私の中で良い物に変わりました。イスラム教だけを言わず、宗教へ
の日本人の誤解が解けた方がいいと思います。

(資料3) Fake News Writing

Term 3 Unit 15 Believe It or Not: the Post-Truth Era

Class Name

Wrap-up essay

Tuna selling in a beginning every year is a famous event in Japan, but it has controversy in the world.

In Japan, media value the facts such as how much tunas sold, and who bought it. Also, this kind of news is regarded as positive news in Japan.

In contrast, foreign media explain the problems for that matter. First, they said that tuna selling is a part of the advertisement of companies, and they are disgusting because they boast of how much money they paid and that they won in the money game. More importantly, foreign media said that Japanese don't have idea to protect tunas, and insisted that they should raise 'tuna' by themselves and stop hunting the child fish.

Therefore, Japanese media and foreign ones have quite different perspective for that matter.

II. Service Learning Project

内容とねらい：上記(1)～(7)の学習と並行し、1年間かけて、授業で学んだグローバルイシューの解決につながる活動を各人で計画、実行する。地球規模の大きな問題の解決には個々で行っている活動や一人ひとりの発想を総合させることが重要となるので、そうした活動を通して得た考えを他者に発信することでこのプロジェクトは完了する。この経験を通して問題意識を高め、将来、各分野でリーダー的な立場になった時に解決したいという気持ちを育てる。校内・校外を問わず活動し、校内配布の**Super Global Leader's News** (資料4) や英文レポート (資料5)、学園祭や学年集会での発表 (資料6) という形で活動内容を他の生徒と共有した。

(資料4) Super Global Leader's News 2018 に掲載した記事

*

子ども食堂 ～子どもたちに楽しい食事を～

活動日：8月21日・9月19日 H.I R.O S.K S.K

主催団体名：新宿区ニコニコ子ども食堂 (<https://shinjuku2525.jimdo.com>)

【子ども食堂に行こうと思ったきっかけ】

私たちが子ども食堂に行こうと思ったきっかけは、家庭科の授業だ。「子どもの権利」について学び、少年兵や児童労働が世界で実際に行われているという事実に衝撃を受けた。また、日本でも無戸籍問題や、10人に1人が貧困であるなどの問題が存在することを初めて知り、同年代や年下の子どもが苦しんでいることに胸が痛くなった。彼らのためにできることをしたいと強く思い、子ども食堂のボランティアへの参加を決意した。

【参加し終わっての感想】

今回この子ども食堂でのボランティア活動を通して様々な事を学んだ。知り合い・初対面、老若男女問わずみんなで一緒に食事を頂くことの楽しさだ。この楽しさは、参加者全員の最高の笑顔など、実際にこの活動を通じてしか経験することの出来ないものだ。そして、この体験を通じて考えたことは、「自分が出来ること」を実行することの大切さについてだ。現状を二次資料により知り、感じたことをただ「感じたまま」の状態では終わらせてはいけない、そこから実際に現場に赴き、触れ合うことでどのような問題点があるのか、どうすればいいのかを発見し、考える。そして自分たちに実行できることから少しずつ実行していく。それこそが問題を解決するための第一歩だ。この学びをこれから知る沢山の問題にぶつかっても生かし、問題を解決するために自分たちが出来ることをしっかりと実行していきたい。

【世界こどもの日ユースフェスティバルでのプレゼンテーション】

私たちは、渋谷を代表して私たちの活動内容について、世界こどもの日ユースフェスティバルでの「SGH校発表会・SDGsのために高校生ができること」にてプレゼンテーションさせていただいた。

世界こどもの日ユースフェスティバルとは、子どもの権利条約が採択された11月20日、「世界こど

もの日」に合わせ、世界や日本にまだたくさんいる、悲しい状況にある子どもたちのためにも、目の前
にある沢山の課題や状況を変えていくためにユースと子どもたちが主体となって「私たちにできること」
を考え、学び、発信し、交流し、動き出す、参加型のフェスティバルだ。

当日は全部で6校が皆それぞれの活動を紹介した。同じSGH校なのにもかかわらず、学校ごとに活動
内容やコンセプトが違って聞いていてとても面白かった。同世代の自分たちとは違う意見をたくさん
聞くことができ、私たち自身の考えも深まったし、本当に私たちが今できること、やらなくてはいけ
ないことは何かを改めて考え直すいい機会だった。

(資料5) 英文レポート

Name M.I

Activity Volunteer for selling cotton merchandises made in Bognayili, Northern Ghana organized
by MY DREAM. org

Date August 18 and September 2, 2018

Place Omotesando(Shibuya, Tokyo)

1

Why I chose this activity/ Why is your project social justice?

We all have heard that NGOs, non-governmental and non-profit organizations that are organized
on local, national or international levels to address social or political issues, are the actors that bring direct
influence and encouragement to those who need help of independent development or social services.
However, the detailed activities or outcomes of those NGOs are actually not well known to the public and I,
myself had no knowledge about NGOs. Nor did I have the realization of the importance and influence of
NGOs.

The reason why I chose this volunteer is because I wanted to know what exactly the NGO corporations
did and what kind of results were procured. I have been learning social problems through Model United
Nations where students discuss international issues and find out what are the best solutions or actions to
solve them especially for developing countries, the ones who need financial support or human resources from
the developed countries. At the time when we discussed issues especially related to human rights,
environment or health, students often suggested the implementation of NGOs in developing countries
because NGOs are believed to bring social benefit urgently and effectively. While most of the students
frequently agreed with the importance of NGOs, the implementation of NGOs was often regarded as an
“impractical proposition” because students never knew the system, outcomes, and the scenes behind. I
thought just overlapping a word (solution) is irresponsible because it means that students, including me, don’t
actually care about the effectiveness of NGOs. As long as we try to seek solutions in this international world, it
is important to learn how corporations or organizations work and truly learn how it benefits the society.

Therefore, I had myself being involved in the activity of MY DREAM. Org which is an officially registered Ghanaian NGO, established for Bognayili, Northern Ghana in 2012. They have been helping Bognayili to establish an independent ecosystem rather than depending on funding from others to let people generate income through their own activities for long-term development and be able to run social-return activities in the areas of education, healthcare and sanitation. Being involved in this activity means that I can be a part to contribute for the development in Bognayili, which connects to “social justice.”

2

What I did

【The products and the mothers who make them in Bognayili】



In order to make a sustainable development in Bognayili, it is necessary to establish an independent economic activity, such as selling things and using the profit to manage the business. MY DREAM. Org Tokyo Office has been helping to make this system and they have been holding a project called the “good quality×good things project.” This is a project to return the profit, which was earned by selling Cotton merchandises made in Bognaili, to the local and practically use the money for infrastructure maintenance. Since 2014, mothers in Bognayili have handmade cotton merchandise from colorful African fabrics using charcoal irons and wheel sewing machines. This business is continuing to expand its sales year by year and has gained popularity for its epochal and sustainable economic system.

【Pictures of people buying the cotton merchandise】

On September 2nd, in Omotesando, Tokyo, I served as a seller who mainly sells bags, aprons. Once a year, MY DREAM. Org Tokyo Office holds this event in order to promote this program and actually gain profit to return it to Bognaili. A variety of people purchased the merchandises, not only who knew this activity, but also young people who were attracted by the fashionable design and the high-quality products.

Developing countries are often belittled just because they are considered of having lack of education or collapse of the social system. However that is entirely wrong, they have a huge possibility to grow and NGOs are the direct influencers to bring a possible development to those areas. Through this project, I was able to learn that there is a huge demand of the activities of MY DREAM. Org from the locals, and that the locals actually have the potential and motivation to reform the economic system in Bognayili. NGOs bring secure impact to the society without the suspicion and cynicism by the people of the local community, because people's voices are increasingly being listened through direct interaction with the NGOs. I was able to learn how important NGOs are, and was able to realize that in order to aim for sustainable development, it is important for developed countries to prioritize helping countries through NGOs rather than unilaterally giving technology or money. I was glad to be a member who contributed to make a better society in Bognayili.

(資料6) 1月19日学年集会での活動報告会の感想文より

報告会では、高齢者への配食サービス・西日本豪雨被災地における写真洗浄・子供食堂訪問・外国人観光客のサポートを行った4組が発表した。

- ・今日の発表者は、**Social Justice**という言葉を自分なりに解釈し、現在の社会に貢献するだけでなく今後の課題や将来の見通しまで立てていて、有意義な体験をしたことがわかった。また気づいた課題に対してそれぞれが責任を感じており、1回の体験で終わりではなく考えを発展させていた。全員に共通していたのは、自分から社会でいま起きていること、問題となっていることを知ろうとする姿勢だ。自分が困っていないから、自分に関係のないことだからという無関心は我々の一番の問題かもしれない。

(R.K)

- ・誰かが求めているということに応えるのは決しておせっかいや大きなお世話などではなく、親切なことなのだと思った。(H.T)
- ・机上で学ぶことだけでなく、ボランティアなどを通して自発的に問題解決する意欲や行動力が必要だと感じた。また、もっと社会問題を解決したいと思う人を増やすために自分たちの活動を共有することが大切だと思った。(R.S)
- ・授業で貧困、高齢化、震災などの文章を読んだときは、自分ひとりの力ではどうにもならないと思っていたが、ボランティアに参加することでそのような問題にかかわることができるのだなと感じた。

(M.H)

- ・正直最初はボランティアをするなんて面倒くさいと思っていた。しかし実際ボランティアをして、誰かの役に立つ喜びを感じ、それを共有して、そこから自分自身で考えることで社会問題が現実にあるということを認識できた。今後もボランティア活動を続けていきたい。(A.Y)
- ・ボランティアによって人とのつながりを知ったり、世界の問題への手助けが「高校生」でもできる。まったく知らない人について考えることの機会を得ることは大きいと思った。(M.N)

- ・今受けている授業は人の役に立つことに活かすことができる。授業を受ける意義を考え直してみたい。そして受験を突破するためだけに勉強するのではなく、将来どのように使っていけるのかを見つけていきたいと思う。(F.K)
- ・西日本豪雨の被災地域で写真洗浄ボランティアを行った発表を聞いて、「ダメージを受けていない私たちが何もしていないのだ」という言葉は心に刺さった。私たちは、テレビでしか見ない別世界の出来事として眺めているだけでは許されない年齢になったのだと思う。(K.S)
- ・ **Social Justice** の機会を用意してくれた学校に感謝したい。ボランティアというものはやってみないとその経験、利点というものは知ることができないと思う。自分はあまり積極的な参加ではなかったけれど、実際に参加してわかったのは、ボランティアは偽善とかではなく、社会をよりよくしていく手段だということだ。ボランティアをした人は新たな経験ができ、受ける人は助けってもらって感謝する。そして今回のように経験を共有することでさらに考えを深め合う。いいサイクルだと思った。(S.H)
- ・今回、いくつかの活動の発表を聞いて、自分たちは自らやろうと行動を起こせばいくらかでも人の役に立てるのだなと思った。普段、何も考えず生きていると高校生の私たちはコミュニティがどうしても学校や家族などの狭い範囲に限られてしまう。だが、このような機会に自分たちにもできるボランティアを探して参加してみると、今まで知らなかった世界が見えて、視野が広がって、かつ人の役に立てるのだなと実感した。(M.M)

Social Justice and Service learning の事例

1 年間に取り組んだ活動総数 97 件

| | | |
|------|--------------------------|------|
| 主なもの | 子供の人権にかかわる活動 | 25 件 |
| | (子ども食堂支援・放課後学習支援・保育園手伝い) | |
| | 福祉・医療にかかわる活動 | 14 件 |
| | (病院ボランティア・療育サポート) | |
| | 環境保護にかかわる活動 | 19 件 |
| | (城跡下草かり・富士山美化活動) | |
| | 震災復興にかかわる活動 | 3 件 |
| | (石巻復興支援・被災動物支援) | |
| | 海外にかかわる活動 | 14 件 |
| | (WIL ボランティア・外国人観光客支援・通訳) | |

地歴科（世界史・地理）の取り組み

1、世界史

現代世界における政治問題の背後には、経済的・文化的摩擦があり、それは歴史で読み取れるという考えに基づいて、通史の中で読み取っていくという授業を試みた。特に SGH のテーマである Social Justice の中で、関係性が深いものについては積極的に取り上げた。

（1）貧困・社会的階層の分化を含む経済的摩擦について

①「従属理論」と「世界システム論」を解説した。

― 大航海時代以降の「世界の一体化」に付随して、世界規模の分業体制が構築されたことについての理解を深めた。同時にグローバル社会の功罪について考察した。

②産業革命後の社会問題について取り上げた。

― 社会主義思想の成立のきっかけを指摘するのはもちろん、ラダイトについては、その背景にある技術的進歩による職種の転換について言及し、AI が引き起こすであろう未来の問題について考察した。

③大衆社会の問題点を、既習の現代社会・倫理の分野から指摘し、議論した。

― 中間層の成立とその政治行動について、現代のポピュリズムとの類似点を指摘した。

④自由貿易帝国主義と、それに対する保護貿易の観点から取り上げた。

― 現代における経済上の自由主義と保護主義の対立にも目を向けた。

（2）宗教・民族を含む文化的摩擦について

①諸文明の基層的部分である宗教を、教義と歴史的な展開において考察した。

― 欧州社会の皇帝権と教皇権の対立の経過、宗教改革から新旧両派がおこした宗教戦争、市民革命と教会との関係を丹念に追うことにより、「政教分離」の成立過程を理解させた。これらの知識は、イスラーム社会との比較においてより鮮明となるという見地から、イスラーム教の始原と前近代のイスラーム専制国家の宗教政策を講じた。

②多様な民族を包含した前近代帝国が、どのようなシステムを採用していたかについても考察した。

― 広域国家においては、永続的統治を維持するために、威圧政策だけでは不完全であり、宗教や民族についての寛容政策が必要であることを指摘した。多様な価値観を認めるということは、現代世界でも必須の態度であると思われる。

2、地理

世界各地の環境問題、民族問題、人口問題、貧困などの諸課題には、その地域の自然環境、産業、文化が複雑に関係している。高校2年次の地理では、以前より能動的に社会に関わる力の育成を念頭に置き、世界の自然環境（気候・地形）、産業（農牧業・鉱工業）、生活文化（都市・人口・民族など）を中心に学習活動を行ってきたが、その学習活動の中で、本校 SGH のテーマ「Social Justice」をふまえて、系統地理的に授業を展開した。

まず、各単元の前半で、世界各地の諸課題を理解するために必要となる基礎情報を学習した。例えば自然地理分野では、気候の成因や分布などであり、人文地理分野では、農牧業の発展、人口構造の変化、

民族の分布などである。そのうえで、各地の諸課題の現状と解決に向けた取り組みについて、視聴覚素材を活用しつつ、生徒から意見を引き出しながら授業を展開した。

具体的な授業例として、中央アジア・ウズベキスタンのアラル海周辺地域における、人と水のかかわりから生じた環境問題についての授業を挙げる。かつて湖沼として世界4位の面積を誇ったアラル海が急速に縮小した現状を提示し、「なぜアラル海が縮小したのか」、「アラル海が縮小した結果、現地住民の生活にどのような影響が生じたのか」について、生徒に考察させた（写真1）。乾燥地域であるという自然条件と、旧ソ連時代の農業生産力増大を目的とした綿花栽培のための灌漑整備という社会条件が複雑に関係して、大規模な環境問題が生じていることが実感できる学習活動であったと感じている。

写真1 地理授業のようす



家庭科の取り組み

家庭科では「共に生き、共に支える社会の実現」について、保育領域の「子どもの権利と福祉」を通して考える授業を行いました。

まず、乳幼児期の養育環境が心身の発達や人格形成に大きく影響を与えることを学習した上で、英語科と連携して子ども達が受けている様々な人権侵害の実情を知らせました。『児童の権利に関する条約』と共に「無戸籍児」「子ども貧困」「子ども兵」「児童労働」「児童婚」や「世界の子どもの現状」（ユニセフ発行）などの資料を配布し、そこから各々が興味を持ったものについて調べ、それをもとにグループでディスカッションしました。その後グループ毎に周囲に発信したいことを1つ選びクラスで発表し、最後に一人ひとりが感想をまとめました。

ねらい：現在、世界（日本も含めて）で人権侵害を受けている子どもたちの様々な問題は、その国の宗教や習慣とも深く関わっているので、単純に善悪を決めるのではなく、その国や民族の価値観を認めた上で、何が問題でそのことから何を考え、何を発信（行動）しようと思うかをグループワークで深め、更に個々に考えさせたい。

- 流れ：
- ① 子ども達が健全に育つための環境を学ぶ。（4時間）
 - ② 子ども達が持っている権利を知る。子ども達を取り巻く環境の問題点を探り、

そこから何を考え、何を発信できるかを考える。(5時間)

—2の流れと内容—

- 1時間目：クラス 「まずは知ろう！」
- ・子ども達が健全に育つための環境を確認。全員に共通の資料を配布し、人権侵害だと思われることの中で特に興味を持ったことを次時まで課題として調べる。
- 2時間目：グループ 「興味のあることについて、知識を深めよう」
- ・グループに分かれて調べたことを発表しあう。
- 3時間目：グループ 「みんなで話し合ってみよう」
- ・グループの中でテーマを決めて話し合う。
- 4時間目：グループ
- ・クラス全体に発表する内容を5分程度にまとめる。
 - ・発表準備。
- 5時間目：クラス 「クラスに発表して共有しよう」
- ・各班の発表。(質疑応答)
 - ・感想をまとめる。

《5時間目：感想のプリントより》

・今回、調べることで今のわたしからは全く想像できないことをたくさん知れた。自分と同じくらいの子が結婚・出産していることに驚いて調べることにしたけど、実際に宗教や伝統で当たり前になっている国があることが衝撃だったし、怖いと感じた。子どもなのに勉強する自由はもちろん、遊ぶ自由も持てないのは、今の社会で生きていく上で、国と国の格差を拓げてしまうのではないかと思う。私が調べた児童婚は今までの習慣も強く影響していて、女の子の健康にどのような被害をもたらすのかの認知の低さもあるように思ったが、宗教で許可されている地域で、そこまで宗教にこだわりのない私たち日本人が口出しするのは難しいのかもしれないと感じた。私の班のメンバーは自分たちに出来ることは少ないと言っていて驚いたけど納得したし、これが、今もこういう問題が消えない原因の1つだとも思った。私たちは他国のことに介入することは出来ないのだろうか。

・僕たちのグループでは「児童婚・女子差別」をテーマに発表しました。発展途上国の身体面、精神面で傷つけられた子ども達の存在をたくさん知ることができ、とてもよい勉強になったと思いました。その一方で、その問題が今まだ解決されていないという理由も、改善するための方法が見つからないということがあります。習慣だから、宗教でも教えでそれは正しいとされているからと言われてしまうと、自分の生きてきた環境による自分の意見では何もものを言うことができません。つまり、自分達の力で直接的に解決させるということは不可能なのです。では、どのように解決するか。僕は、自分の信じている考え方、思想などをしっかり関わっていくであろう人々に伝えていくことが一番の解決策ではないかと思います。全て自分達の思想が正しい訳ではなく、全ての考え方が正しくあって良い。この考えさえあれば、価値観を押し付けるようなものにはならず、折衷案を見つけ、間接的にでも相手の考え方に影響を及ぼすことができます。そして、これを長い期間行っていくことによって、これらの問題は解するのではないかと思いました。

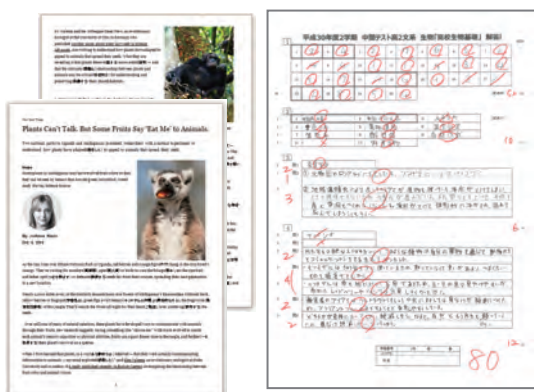
理科（生物）の取り組み

まず「生物基礎」の教育課程に沿って「種・遺伝子・生態系」3側面から生物多様性について深く学んだ。

生物多様性や気候変動に関わる英文記事を読み物として提供し、その内容に関し、一部を定期テストに出題した。

特に DNA の構造と機能の学習に絡め、人類は passenger pigeon の絶滅を契機に、米国が野生動物の保護政策を進めるようになったこと、地球史における種の大量絶滅が大規模な気候変動に起因してきたこと、今世紀になっても地球温暖化により多くの野生生物が絶滅の危機に瀕していること、などを学んだ。

学習指導要領の定める学習範囲(年間授業数の2/3)をすべて終了したあとは、残り1/3時間数をESDに割いた。まずSDGsの17目標と、OECDのEducation 2030を学び、引き続き、「当事者として未来の課題を考える」ことを目標にして昨年度を踏襲した模擬国連型のアクティビティーを行った。

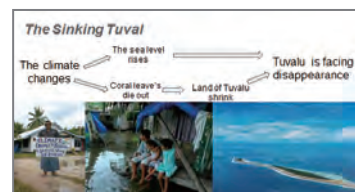
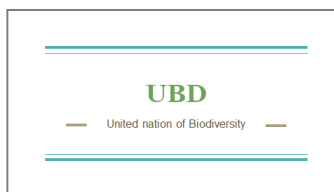


今年度は、履修者の人数が52名と多かった為、昨年よりもモデル国家、所属委員会を増やした。各生徒をUSA, Brazil, Tuvalu, India, Japan, Australia, South Africa, Qatar, Deuchをモデルとする8つの仮想国家の6つの国連委員会 Biodiversity, National Security, Human Right, Engineer & Technology, Human Health, Food & Agriculture の代表を務める大臣に任命し、「気候変動」問題をさらに掘り下げて考えた。

まず、8か国の代表で組織する6委員会ごとにそれぞれのカテゴリーに及ぼす気候変動の影響を、手分けをして調べ、“Global Climate Summit 2018”にて発表し、気候変動が人間生活の様々な分野に深刻なダメージを与えているという事実を共有した。



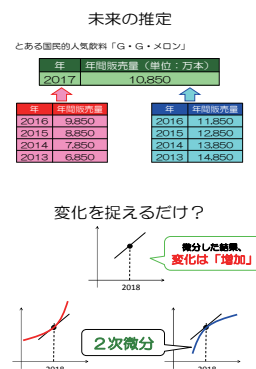
その後、Jared Diamond のマヤ文明絶滅に関わる考察 “Why do societies collapse?” のTED talk を視聴した後、



「文明崩壊をもたらす歴史・地理的要因」「未来予測のための数学的手法」について、それぞれ地理科・数学科教諭により説明を受けた。



産業革命後、化石燃料に依存してきた150年間に起こった地球の変化を正確に捉え未来を正確に予測することができれば、最悪のシナリオ「地球の崩壊」は回避が可能であり、それに向けて、次世代リーダーが国境を越えて協力してほしいとのメッセージを送ったつもりである。



低炭素社会実現のための国際的な手法、Carbon offset, Carbon pricing, Carbon emission trading, について、各自が調べた後、UNFCCC を中心とした京都議定書からパリ協定、昨年の COP23 に至るまでの気候変動対策の足跡を振り返り、その成果と今後の課題、UNFCCC の会議での対話手法 Talanoa dialogue を学んだ。また、模擬国連に参加経験のある生徒から、決議案の作成にあたっての留意すべき点、用いる用語などを説明してもらった。

その後、地球温暖化が仮想 9 か国及ぼす具合的な被害を国情に沿って調べ、決議案に盛り込むべき内容について議論し、模擬 COP24.1 にて発表した。発表は日本語で行ったが、「国際会議」という設定なので、発表要旨、決議案は英文で作成した。

その後、AN クラス、帰国クラスの生徒が、各国の意向をくみながら、9 か国が協同提案者となる決議案の DRAFT を作り、その後の校正を経て、決議案を作った。

英語 reading(テーマ:Biodiversity)英語授業にて、生徒 202 名を締約 197(+5)か国の議決権を持つ代表に指名し、文系生物履修生 53 名が(国連議長団として)、気候変動の影響や決議案の内容説明を英語授業内で行った。全生徒が 1 週間、当事国の国情を調べた上で決議案の採決を行い、過半数を大きく超える賛成を得た。

国語科、英語科の教員による社説 Editorial の書き方の説明を受けた後、「2050 年に新聞の論説委員になった」という設定で、「社説」を書いた。英語クラスでのプレゼンテーション、社説の執筆により「市民を啓発する」疑似体験をした。当初予定したプログラムを終えた。なお、決議結果は、代表生徒が次世代リーダーに向けてのメッセージを添え、学年集会にて報告した。今年度のカリキュラム開発研究においては、英語科のみならず、地理科・数学科・国語科との連携も図ることができた。ただし、「答えのない問題」に、すべての履修生徒が目的意識を持って取り組めるよう指導できたかという点、まだまだ工夫の余地があることを実感した。(野尻・細野)



Summary of the Pitlam Addressing

First of all, Pitlam had promised to decrease the emission rates of CO₂ by 26-28% by 2030, and the progress has been great so far, but it is also true that Pitlam has indeed suffered many consequences of Global Warming and Climate Change. The coal mining industry has harmed the health of many citizens living near coal mines and coal driven power stations. Coal has been reported as being producing immense amounts of CO₂ which causes global warming, as well as producing PM_{2.5}, ash, and SO₂ and NO_x. Although many of the power stations process and cleanse the fumes, the pollution is still evident and the pollution levels are rising every year in Pitlam despite the decrease of CO₂ emissions. The particles below PM_{2.5} are harming the people's health, creeping into their lungs. Furthermore, the coal mining business has critically endangered many people's lives by depleting the underground water sources near some of the coal mines.

Another problem is the effect Global Warming and Climate Change has had on the environment and weather. They have caused abnormal weather patterns including increased droughts inland and changing rainfall patterns. They have caused the decrease of the habitats of creatures and in turn the extinction of many species. As our country has many marsupials, which are very rare and unique creatures to Pitlam, it is extremely important that we protect these unique creatures and their habitats. The increase in sea temperature is also causing coral bleaching.

These natural disasters not only affect the creatures living in these regions. They affect the human too. The abnormal weather patterns also include wildfires. Wildfires have increased in number as well as scale. This has not only put citizens' lives at risk, but also increased the number of out-of-state firesmen deployed in regions of wildfire outbreaks.

It is also said that these problems concerning climate change and global warming may cause higher risks of conflict over resources such as water which is very precious in Pitlam. Former Commander of the Australian Defense Army Chris Barrie says that out of the seven continents, Pitlam is the most susceptible to harm caused by climate change. This not only includes the direct harm caused by climate change, but would also affect the immigrant problems surrounding Pitlam and would affect the military strategies concerning the region.

I want to address the people here today, the representatives of the countries that are going to be responsible for the course of the journey our Mother Earth will undergo in the next ten, twenty years or even more. On behalf of Pitlam, on behalf of all the citizens of Pitlam that are suffering from the consequences of Global Warming and the destruction of the Earth, I implore all of you to take hands in a global effort to save our Earth before it becomes too late. This beautiful planet is home to not only humans, but also countless creatures, many of them critically endangered of going extinct even as I type. Although of course, you would have to consider your people too, I ask you all to consider this a challenge, and I ask you all to promise to make the best of your efforts to help save the Earth.

We would like to propose individual solutions for the individual problems.

1. We would like to utilize the wide piece of land not used in order to place solar panels on a large scale and generate electricity. We will do this to decrease dependence on fossil fuels.
2. We will increase national parks and protected areas for the wildlife. This will help the wildlife conservation effort.
3. We will increase the fixed price of carbon emissions yearly. This is also meant as a way to decrease dependence on fossil fuels.
4. We will create national qualifications and increase job opportunities to protect the coral reefs and marine life. This is to protect the marine wildlife.
5. We will provide the people affected by the coal mining business and coal power plants more chances to have talks with the owners of the businesses and plants. This will give them more say and power to argue for their rights and reach solutions with the perpetrators.
6. We will fund national projects to change seawater into freshwater. Pitlam needs a steady supply of freshwater even in the case where climate change depletes the freshwater resources.
7. We will fund the clean coal technology projects. This will significantly better the situations concerning the coal business.

COP24.1/DR.1

Save Mother Earth Project
COP24.1

8,11 Feb 2019
Original: English

Agenda Item: International Action Against Climate Change
Sponsor: Abra, Diana, Njapa, Norton Dynasty of America, Pitlam, Sambario, Super Africa, Tuluva, Whoareyou

The General Assembly,

Recalling the Paris Agreement of 12 December 2015, in which all nations shared a common cause to undertake ambitious efforts to combat climate change and adapt to its effects, すべてが気候変動と戦いその影響に適應するために意欲的な努力をするという共通の目的を共有した、2015年12月12日のパリ協定を想起し、

Deeply concerned that regardless the adaptations made after Paris Agreement, the increasing amount and variety of the problems caused by climate change and global warming are seriously damaging the environment, パリ協定の後になされた適応にもかかわらず、気候変動と地球温暖化によって引き起こされる問題の量と種類の増加は深刻なダメージを与えていることを深く懸念し、

Noting the increase in energy consumption caused by industrialization, modernization of agriculture, and a rise in income, 工業化、農業の近代化、所得の増加によって引き起こされるエネルギー消費増加に注目し、

Concerned with the extremely low awareness of the threats global warming causes among citizens and companies which was revealed in a public opinion poll, 世論調査で明らかにされた、地球温暖化が市民や企業にもたらす脅威の認識が非常に低いことを懸念し、

Convinced of the importance of battling each of the problems individually one at a time, and of the importance of battling the problems as a global effort, それぞれの問題を一つずつ個別に解決することの重要性、そして世界的な取り組みとして問題に向き合うことの重要性を確信し、

1. Emphasizes the need for a global effort to minimize carbon emissions and prolong the effects of climate change;
2. Urges the provision of technological assistance, including top-class biomass technology, from developed countries to developing countries in need of resources to reduce carbon dioxide;
3. Affirms the need for efforts to protect the unique wildlife and environment as well as the health and lifestyle of the people affected by climate change;
4. Encourages other countries to contribute to global assistance to the point where both economic development and protection of the environment can be achieved;
5. Encourages the use of renewable energy such as solar and wind power;
6. Strongly advises the execution of legislations to improve air pollution and the support of companies introducing new facilities, in order to decrease carbon dioxide emissions;
7. Reiterates the importance of international cooperation:
 - a. the assistance of nearby countries with food resources as a temporary solution to food scarcity,
 - b. the acceptance of refugees evicted from their original countries as a result of climate change;
8. Introduces environmental education in the curriculum of general education and establish a government-led research team for national climate effects.

COP56: The Gravity of Food Loss and the Importance of Taking Action

Writer: Chihiro Arima

As the year 2050 comes to a close and COP56 wraps up, we yet again end on a bittersweet tone, drinking a toast to the survival of the human race while the world progresses with its deterioration. Although humankind has historically showed its capability to unify itself in once in the face of fatal predicaments, it still has a substantially long road to go before achieving restoration and improvement of the current environmental circumstances.

With the never-stopping advancement of technology and its constant development to compensate for the increasingly detrimental scarcity of food, the current society tends to be too focused on the short-term measures to truly look at the root of the entire issue – environmental preservation. The world's food scarcity is predicted to double in 2100, evidenced by an extensive case of studies by veteran scientists who have been devoting their lives to optimize food security for the past decades. These new studies have thus led to a fervent panic to produce more artificial kinds of food to supplement the amplifying loss, and to discover new ways to create food at all.

However, these are all only short term goals that can only provide support to the food loss for a limited period of time. This fundamental question is what we need to ask ourselves -- how can we contribute to saving the planet's ecosystem and providing our descendants a livable future?

Not only is it crucial for the future of this planet, but because the actions that we take now will undeniably influence our own lives, we must reflect on our actions and take action toprioritize the preservation of our natural environments. Food is an incontestable pillar in our society, shaping the quality of our lives. Ultimately, it is up to us to save it from destruction.

果たして人類は何に挑戦しているのか

「2020年から続く地球温暖化問題に対する諸対策活動は、人類史に一定の成果を残した。」2050年となったいま、世界の認識はこれだ。

この認識に概ね誤りはないだろう。事実30年間にわたる世界各国の努力の結果、中東やアフリカ地域における宗教的対立及び紛争はほぼ鎮められた。また、各国のもつ政治的主義に捉われない自由な形の議論を目指すという動きも早期に軌道に乗った。

まさに世界規模での人間社会における安息が訪れたのだ。

しかし地球温暖化問題の解決は元来人間の生活の向上のみを目指すものではなかったはずだ。たとえば、2026年にSDGsが撤回を余儀なくされた。これはTwitterやInstagramなどのSNS上で世界各地から「あまりに目標が人間本位過ぎる」と批判されたためではなかったか。

我々には救うべき生き物たちが数多くいる。それにもかかわらず人間のためのみ動き続けるのは、自然をかえりみずに開発ばかり繰り返していた先環境意識時代と同じである。

ひいては2045年に世界で協力して一つの人工衛星「PANGAEA」をつくる要綱が、アメリカのホワイトハウスで決定された。PANGAEAは新たに人類が移住できる星を探すそうである。これはもはや地球環境に見切りをつけていることと同義ではなかろうか。宇宙への逃亡よりも先に目を向け、足を運び、頭を働かせるべきことがあるはずだ。

「Social Justice」2018年度 活動内容一覧

| | | |
|----|--|-----------------------|
| 1 | Water is Life 2018 | 7月24日～28日 |
| 2 | つくば市国際交流会 通訳／翻訳ボランティア | 今後 |
| 3 | 献血ボランティア | 期末テスト後 7月中 |
| 4 | ゴミ拾いボランティア | 7月16日 |
| 5 | 子ども食堂 | 未定 |
| 6 | 助っ人日本人 ～浅草で外国人観光客をおもてなし！～ | 夏休み |
| 7 | 翻訳ボランティア | 5月2日～ |
| 8 | 藩山城跡下草刈りボランティア | 毎月第3日曜 7月 |
| 9 | 子ども食堂大久保地域センター | 11月19日 |
| 10 | 保育園ボランティア | 未定 |
| 11 | 子ども食堂ネットワーク | 未定 |
| 12 | NOP法人キャリアアシスタント | 未定 |
| 13 | 献血ボランティア | 夏休み |
| 14 | 公益財団法人オイスカ OISCA 植林 | 未定 |
| 15 | 夢をかなえてリコーダー【32とコラボ】 | 未定 |
| 16 | バスケットボールボランティア ハンス・オン・東京 | 月2～3回 木曜と休日 |
| 17 | JLB街頭ボランティアガイド | 9月22日 |
| 18 | 大森東邦大学病院でのボランティア活動 | 8月20日～24日 |
| 19 | 外国人観光客にもっと日本の観光を楽しんでもらおう | 夏休み |
| 20 | 高校生福祉文化賞セッションテスト | 7月31日 〆切 |
| 21 | TOMODACH Honda グローバル・リーダーシップ・プログラム | 6月16日17日 8月15日～28日 隔米 |
| 22 | We are the band club | 夏休み |
| 23 | 被災地ボランティアツアー（東日本大震災ボランティア） | 夏休み |
| 24 | 外国人の子供に勉強を教える | 11月7日 |
| 25 | パンフエス野老 | 7月8日 |
| 26 | 療育・手作りパン教室 | 8月5日 |
| 27 | Social Justice とは何なのか？ | 7月頃 |
| 28 | 保護犬の譲渡会ボランティア | 未定 |
| 29 | 花火大会後のゴミ拾い | 夏休み |
| 30 | 野鳥も寛ぐ最高な環境で自然を感じながらパークグリーン | 7月25日 |
| 31 | 荒川クレーンエイド | 8月28日 |
| 32 | 酒養ボランティア【15とコラボ】 | 未定 |
| 33 | 学習支援ボランティア | 夏休み |
| 34 | 幼稚園の手伝い | 7月中・夏休み |
| 35 | Social Justice Radio | 6月19日 予定 |
| 36 | 富士山ゴミ拾い | 夏休み |
| 37 | 石巻復興さまざまな新聞配布ボランティア おらほの家・サロン活動の手伝い | 未定 |
| 38 | 動物シェルターで被災動物のボランティア | 7月30日 |
| 39 | 育児体験ボランティア | 夏休み |
| 40 | 海岸のごみの処理 | 夏休み |
| 41 | 障がい児のためのサーフィンスクール ～海から陸へノーマライゼーションの社会づくり～ Ocean's Love | 7月21日 |
| 42 | 幼稚園ボランティア | 8月25日 |
| 43 | 日中一時障害児支援 | 夏休み |
| 44 | 保育園ボランティア | 夏休み |
| 45 | 北区赤羽マラソンボランティア | 8月11日 |
| 46 | エンデュランスのボランティア | 11月3日～4日 |
| 47 | 手紙を書く | 未定 |
| 48 | Earth Caravan 2018 | 9月15日16日 |
| 49 | 子育て支援 子供たち見守りボランティア | 未定 |
| 50 | 自然環境の保全のボランティア | 夏～秋 |

| | | |
|-----|--------------------------------|--------------|
| 51 | 幼稚園ボランティア | 未定 |
| 52 | 少子化による児童センターの変化 | 7月下旬 |
| 53 | NPO法人 荒川クレーンエイド2018 | 8月28日 |
| 54 | Jノ島のゴミ拾いプロジェクト「海さくら」 | 6月17日 |
| 55 | 季節の行事ボランティア（納涼大会） | 7月 |
| 56 | 清掃ボランティア | 11月10日 |
| 57 | 高齢者のお手伝い | 夏休み |
| 58 | チャリティー | 未定 |
| 59 | 医療系ボランティア | 7月 |
| 60 | 教育プロジェクト | 夏休み |
| 61 | 夏の模擬国連の会議の議題に沿った活動 ご案内ボランティア | 夏休み |
| 62 | 乙会プロジェクト | 不定期 |
| 63 | 子ども食堂のボランティア | 未定 |
| 64 | 海の見える命の森サポートボランティア | 夏休み |
| 65 | One day おもてなしボランティア | 8月下旬 |
| 66 | Water is Life 作問（謎解きオリエンテーリング） | 7月下旬 |
| 67 | 保育園でのボランティア活動 | 夏休み |
| 68 | 観光客の道案内（渋谷にて） | 月1～2 |
| 69 | CAREER ASSISTANT ～教育で貧困をなくす～ | 週1回 1～3ヶ月の活動 |
| 70 | 配食サービス | 7月14日 |
| 71 | ごみゼロナビゲーション | 夏休み |
| 72 | 老人ホームヘルパーボランティア | 夏休み |
| 73 | 母子家庭・父子家庭のお子さんに無料の塾を | 週1回 1～3ヶ月の活動 |
| 74 | ときわ幼稚園の手伝い | 7月 夏休み |
| 75 | 渋谷ゴミ捨てボランティア | 7月 夏休み |
| 76 | 西なぎさ祭：東京里海エイド | 8月18日 |
| 77 | 海岸清掃活動 | 夏休み |
| 78 | 模擬G7 または イイもの×イイこと≡MYDREAM | 8月2日 |
| 79 | 夏・体験ボランティア | 夏休み |
| 80 | 保育園・保育園でのボランティア | 夏休み |
| 81 | 三浦海岸サイクリング兼ゴミ拾い | 夏休み |
| 82 | 心身障害児施設の入所者の皆さんと一緒に過ごす | 夏休み |
| 83 | 秋津ちろりん村 じゃがいもの収穫 | 6月23日 |
| 84 | なつつの木 | 8月21日 |
| 85 | ごみひろい | 7月20日 |
| 86 | WILのキャスト | 7月24日25日 |
| 87 | ホームレス調査の手伝い | 8月5日 |
| 88 | 地元夏祭りの手伝い | 9月1日 |
| 89 | WIL実験動画製作 | 7月1日～7月27日 |
| 90 | 小学校の夏休み教室の補助 | 7月28日～7月30日 |
| 91 | 医療についてのディスカッション | 夏休み |
| 92 | お台場海浜公園大会運営ボランティア 老人ホームボランティア | 11月24日 12月中 |
| 93 | 小学生に簡易模擬国連を通して世界のことを考えてもらおう | 冬休み |
| 94 | 渋谷でゴミ拾い | 8月18日 |
| 95 | WILフアンシレーター | 7月24日～28日 |
| 96 | WILでの日本文化体験ボランティア | 7月27日 |
| 97 | | |
| 98 | | |
| 99 | | |
| 100 | | |

V. 修学旅行プロジェクト

本校では例年、高校2年次10月に当該学年の全生徒が、中華人民共和国(北京・西安)か九州地方のいずれかを選択して6日間の修学旅行(研修旅行)を行う。修学旅行プロジェクトでは、修学旅行の前後に、総合的な学習の時間(および課外)において、事前・事後の学習活動を行い、旅行を真に意義深いものとする。(対象 高校2年生 希望者 6月～10月)

修学旅行プロジェクト

【目的】

日本文化の源流をたどる本校の校外研修プログラムの集大成として、日本と大陸との過去から現在に至るつながりを理解し、さらに人的交流により今後の結びつきを強固なものにする。すべての班員が、それぞれの目的のリーダーであるという意識を持ち行動することの意義を認識する。

【事前活動】

| | |
|-----------|---|
| 5月-6月 | 中国・九州のどちらかを修学旅行先にするかを決定 |
| 9月-修学旅行まで | 西安・北京における訪問先をいくつかの案の中から決定。HRの時間を使って、訪問地に関する事前学習を行った。 また北京にて、北京大学、広渠門中学、北京第一中学、北京第五十中学のいずれかで現地生徒との交流を行うため、それぞれ質問事項を考えたり、英語で本校紹介をするために、プレゼンテーション資料作成や練習を行った。 |
| 修学旅行後 | 研修委員を中心に、HRなどを通じて振り返りを行った。 |

* 西安：陝西歴史博物館・大雁塔・下和村・清真寺から1つを選択。

北京：天壇公園・胡同・頤和園・抗日記念館・景山公園から2つを選択。

【交流報告】

A. 西安：下和村・小学校訪問（アクティビティを一緒に行う）

B. 北京大学との交流

【北京大学について】

北京市海淀九に所在する、言わずと知れた中国随一の国立大学。1898年創立。国家重要大学の一つであり、中国の近代化に大きな影響を与えてきた。理学部、情報科学、工学部、人文学部、社会科学部、医学部を有し、著名な卒業生は毛沢東、魯迅など多数である。今回は、北京大学の現役大学生が、本校のためにボランティアとして交流に参加してくれた。

【交流内容】

1. 北京大学到着後、北京大学の現役大学生と挨拶を交わし、本校生徒46名を10グループに編成して、広大な敷地内を散策しながら交流がスタートした。

2. 北京大学のキャンパスは、北に円明園、西に頤和園をかまえ、この歴史遺産を利用してキャンパスが造られている。皇室庭園はとても雄大であり、江南山水を模した庭園などがある。
3. グループに1名ずつボランティア学生についてもらい、キャンパスを見学した。
4. 見学を終えたグループが会議室に集合し、ボランティア学生を囲みながら英語と日本語で交流を行う。
5. 中国の文化や日本の文化の違いについて、北京大学で何を学んでいるのか、どのような大学生活なのか、将来の夢についてなど、SNS や身近な話題をも含めてそれぞれが関心のある事柄について話し合いが行われた。現役大学生が学んでいる日本語を披露されたりして和やかな雰囲気の間を共有した。
6. 交流の時間はあっという間に過ぎ、グループごとに名残を惜しみつつ、北京大学を後にした。とても丁寧に案内をしていただき、我々が乗車したバスに笑顔で手を振りながら、最後まで見送ってくれた北京大学生の姿が印象的であった。

C. 北京市広渠門中学との交流

【北京市広渠門中学について】

1954年に創立されたこの学校は、北京の東城区にあり、以前は北京女子中学校として知られていた。2014年1月現在、中学36校、高校24校、合計2100人の学生がいる。「学生の健全な人格を築き、学生の発展のための良い基盤を築く」「人の自立を尊重し、ヒューマニズム教育を奨励し、環境を重視し、道徳的な練習を重視する」という教育哲学を有する。

メインキャンパスは27,000平方メートルの面積を占めており、キャンパスには、150平方メートル以上の図書館、読書室、コンピュータラボ、デジタルプロジェクター、物理プロジェクター、電子スクリーン、テレビスタジオ、講義ホール、3D映画のスクリーニングルームがあり、また、全教室に、ラップトップとマルチメディア設備が備わっており、ブロードバンドは、キャンパスのほぼ全範囲をカバーしている。屋外は、遊び場、バスケットボールコート、ジム、カフェテリア、サッカー場、屋内スポーツ場、物理室、テニスコート、ロッククライミンググラウンドなどのスポーツ施設がある。

【交流内容】

1. 学校到着後、会議室で校長先生と対面。記念品の交換を行う。その後担当の教員の指示に従って、校内を見学しながら授業教室へ。教室に入ると参加生徒約40名がとても温かく迎えてくれた。
2. 10年生（日本の高校1年生に相当）の地理の授業に参加させていただいた。現地生徒のグループにまざって授業を受けた。
3. 2時間目は本校生徒による英語でのプレゼンテーション。日本語と中国語の意味の違いについてのクイズ、フルーツバスケットなどで楽しみながら交流した。
4. お互いに持ち寄ったギフトを交換し、全員で記念撮影をした。

5. 帰り際、中庭にある卓球台のところで急遽本校生徒も卓球ができることになった。ちょうどプレーしていた広渠門中学の生徒とも対戦するなど楽しい時間が過ごせた。

D. 北京第一中学との交流

【北京第一中学について】

北京第一中学は、1644年に創立された370年の歴史を持つ学校で、小学校、中学校、高等学校の12年学制で構成される。北京市教育委員会によって「百年の学校」と命名された。

「勤勉、調和、誠実、革新」という四つの校訓のもと、学生を成長させるための豊富な特別コースが用意されている。ベースカリキュラムとして、書道、ボランティア、天文学、模型飛行機、ドラマ、コーラス、茶道、ホッケーなどがある。

国際修学旅行は、ベースカリキュラムとして標準化され、日本・ドイツ・オーストラリア・カナダにおけるカリキュラムで高い評価を受けている。

【交流内容】

1. 学校に到着すると参加生徒・教員に温かく迎えられ、その後交流会場へと入場した。
2. 先方の学校よりご挨拶と学校紹介があった。
3. 本校生徒による日本文化の紹介を行った。パワーポイントを用いて本校生徒が英語でクイズを出題し、北京第一中学の生徒が答えるという形で行い、学校単位での交流を深めた。最後に、本校生徒で中国語を話せる生徒が挨拶をした。
4. グループに分かれて学校を見学／体育・書道・コンピューターの授業に北京第一中学の生徒と共に参加した。その際、お互いに持ち寄った贈り物交換なども行い、それぞれが関心ある事柄などについても英語を交えて話し合い、交流を深めた。
5. 授業終了後、全員での写真を撮影し、お互いに握手をしながら学校を後にした。

VI. Write for the Future Projects

グローバル・イシューや地球社会への課題に関して学ぶとともに、これまでに培った知識や経験をもとにテーマを設定し論文を作成する。また、校内・校外での発表する機会を設け、学校全体として取り組む意識を高める。(対象 高校全学年 通年)

英語科の取り組み

グローバル・イシューから考える

Write for the Future Project

論文作成

英語科の取り組み：グローバル・イシューから考える

米国の TV ニュースや新聞などから、地球社会が抱える課題や時事問題を取り上げ、深く読み込むとともに、それらに関する自分の考えを英語でまとめ、エッセイを作成した。

取り扱った主な課題

トランプ大統領

移民

自然災害

ネット課題

AI

Write for the future project

本校では、総合的な学習の時間などを使い、全生徒が高校 1 年からおよそ 2 年半をかけて論文の作成に取り組んでいる。生徒が各自でテーマを設定し、調査・研究を行い、学術論文にまとめる。

【目的・意義】

本校の教育目標の一つである「自調自考」、つまり自ら調べ自ら考える活動の集大成として、また探究学習活動を通じて、問題意識を持つ姿勢の醸成、問題発見・解決能力の飛躍につなげる。

この活動を行うことで、自分の興味・関心のある領域について深く学ぶことになり、その過程で、関連する他の領域についても相当量の学びを得る。それが、生徒一人ひとりの将来の進路を選択する際のきっかけや判断材料になることが期待される。

【活動の狙い】

- ・情報リテラシーの向上
- ・論理的思考力・表現力の向上

- ・学問的手法の習得
- ・達成感を得る

【執筆カレンダー】

高1

- 4月 インTRODダクシヨN
- 5月 キックオフイベント【研究テーマ探し】
- 6月 卒業生研究者講演会
- 8月 夏課題調査【研究テーマ探し】
- 9月 アドバイザー面談期間
- 10月 アドバイザー面談期間
- 11月 所属ゼミ決定
- 12月 第1回中間発表
- 2月 第2回中間発表
- 高2 優秀作品発表会参加
- 3月 調査・執筆

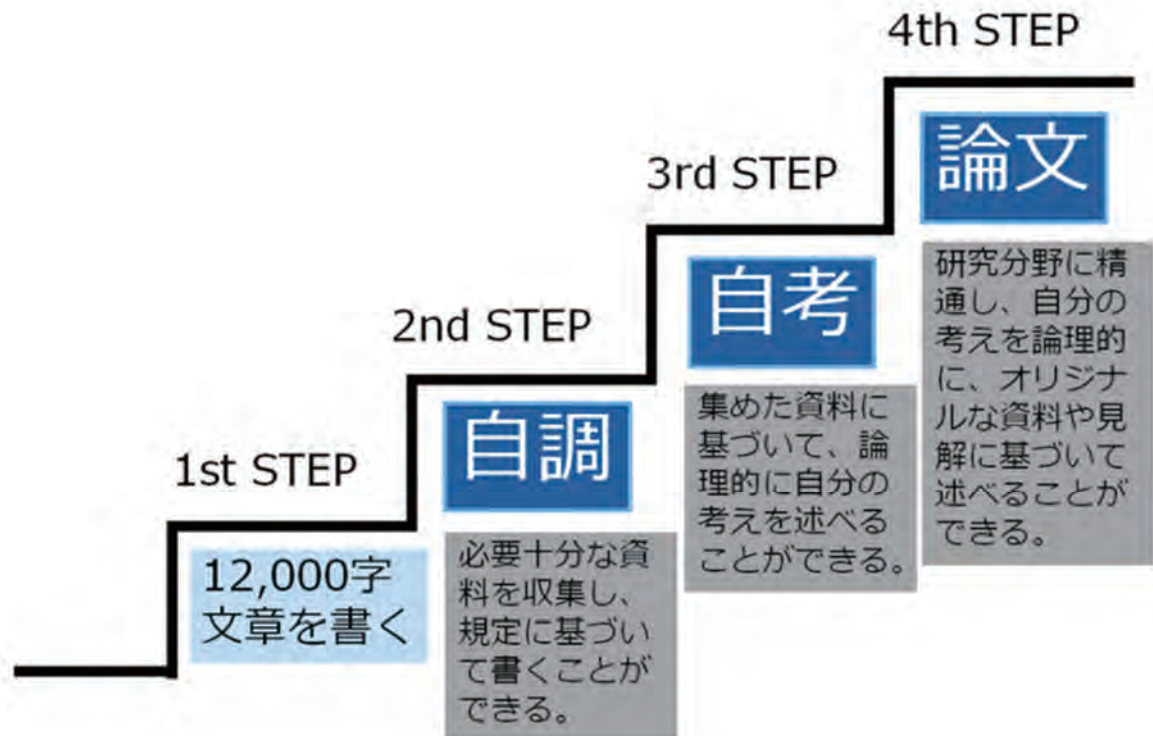
高2

- 4月 ライティングセンター開設
*卒業生による相談会
- 6月 最終中間発表
- 7月 論文提出（第一稿）
- 11月 論文提出（修正稿）
- 12月 ゼミ最終発表
- 2月 優秀作品発表会

高3

- 1学期 学園祭論文展示準備、論文要旨完成
- 9月 学園祭にて論文展示
- 3月 優秀論文集・要旨集発行

【自調自考論文の取り組み】



Write for the Future で生徒が取り上げた事例（資料）

平和・紛争に関するもの

「現代社会における平和学習として適切な授業はどのようなものか」

「レバノンの難民問題を解消するには」

社会課題に関するもの

「高校生にもできるホームレス支援とは」

「移動式託児所～子連れでも楽しめる渋谷にするには～」

「日本の児童虐待を減らすためには」

Write for the Future (自調自考論文) 要旨集より

アフリカ分割期におけるエチオピアの「生き残り」の要因とは

キーワード：歴史、エチオピア、植民地

第1章 はじめに

ヨーロッパ諸国による植民地化が進んだアフリカ分割期のピークにあって独立を維持したエチオピアの存在は当時のアフリカ諸国の中で特異な地位を占めており、本研究ではこの「生き残り」の要因を探ることを目指す。

第2章 先行研究の分析

2-1 エチオピアとヨーロッパの接触の歴史

19世紀末の皇帝メネリク2世はイタリアとの関係を強めるが、後に対立しアドワの戦いでこれを撃破した。その後メネリクは英仏伊をはじめ複数のヨーロッパ勢力の支援のもと国家の西欧化に努めたが、これには独立維持のために特定の国に依存しない対ヨーロッパ外交を進める意味合いがあった。

2-2 エチオピア帝国以外のアフリカ諸国の動向

エチオピアとは違い最終的には敗北して植民地化されてしまったが、サモリ帝国、ラビーフ帝国やスーダンのマフディー国家などはヨーロッパ勢力を相手に長期間の抵抗を行い、ヨーロッパ側を大いに苦しめた。

2-3 先行研究に関する考察と発見

アフリカで長期間の反植民地運動が行われる際、ヨーロッパ側は数回の敗北を経てアフリカ側を圧倒できる軍隊を投入したタイミングで抵抗運動を壊滅させ植民地に組み込むという同一のパターンを取っている。エチオピアはアフリカ分割期にアドワの戦い以降ヨーロッパ勢力の侵攻が起きなかったという点で特異であり、この理由を考えることが「生き残り」の研究上重要である。

2-4 本研究の位置付けと意義

これまではアドワの戦いでの完勝がエチオピアの独立を確実にしたという解釈が一般的であったが、アフリカ勢力がヨーロッパ勢力を撃破すること自体はアドワに限った話ではなく、アドワの戦いはエチオピアが独立を守ったという結果論により過大評価されている可能性がある。

重要なのはヨーロッパ勢力がアドワの戦い後もエチオピアでの権益に関心を寄せていたにもかかわらずそれ以上の侵攻をしなかったという点であり、その理由を検討することでこれまでの歴史研究・解釈の不足を補うことができるだろう。

第3章 方法と対象

エチオピアがアドワの戦いに次ぐ侵攻を受けなかった背景として、①ヨーロッパ諸国がお互いの事情や関係に配慮して侵攻を見送ったという外的要因、②エチオピア国内の事情がヨーロッパ諸国に対し侵攻を許さなかったという内的要因、の2つが考えられ、両方についてアドワの戦い後のエチオピアとヨーロッパ諸国の外交に言及した文献から検証した。

第4章 リサーチ・論証

4-1, 2 外的要因

1900年代初頭のエチオピアは英仏の勢力が拮抗しており、英仏の緩衝地帯とすることが定められたシャムと似た

状態である。英仏は友好ムードを高める中で緩衝地帯化という形でエチオピアでの対立を解消した可能性がある。

またイギリス主導で進められたエチオピア西部ガンベラでの貿易は自由貿易帝国主義に当てはめて理解することができ、06年の協定の結果英仏伊の三国はこのコンセプトに則ってエチオピアを事実上の共同植民地として扱おうとした可能性が考えられる。

前者については、1906年の協定の条文にエチオピアでの政治的・領域的現状の維持、内政不干渉、英仏伊三国の権益の住み分けが明記されていることから、エチオピアは緩衝地帯であったと判断した。後者については資料の不足から検証できなかった。

4-3, 4 内的要因

メネリクの貿易への関心から、エチオピア側が貿易による経済成長を志向し、ヨーロッパ側も植民地化を進めるリスクに鑑みてこれを受け入れたとする仮説を立てた。

文献からエチオピアでの国際貿易が決してヨーロッパによる搾取行為ではなかったことが分かったが、この貿易がエチオピア政府の主導であったかが断定できないため、この仮説の論証には至らなかった。

第5章 結論

本研究では第一に、アフリカの植民地化において2-3で示したパターンが存在することを明らかにし、アドワの戦いでの勝利をエチオピアの独立維持の直接の要因ととらえる従来の解釈には不足があることを指摘した。

そのうえでエチオピアの「生き残り」の要因をアドワの戦い後の外交関係に絞り込み、4章に示した結果を得た。外的、内的要因の双方の可能性を示唆できたことは収穫であり、この2つのパワーバランスを解明することが今後の研究上重要となるだろう。また今後の具体的な課題としてはエチオピアとヨーロッパ諸国の貿易に関する研究、データの比較検討やエチオピア側の一次資料の発見などが必要である。

文献・資料

- 岡倉登志 (1999) 『エチオピアの歴史—“シェバの女王の国”から“赤い帝国”崩壊まで』 明石書店
- 岡倉登志、川田順三、栗本英世など (2009) 『新版世界各国史 10 アフリカ史』 山川出版社
- John Markakis (2011) *Ethiopia The Last Two Frontiers*. Boydell & Brewer Ltd.
- Edward C. Keefer (1981) “Great Britain, France, and the Ethiopian Tripartite Treaty of 1906” *The North American Conference on British Studies* *Albion*, 13(4), 364-380. doi:10.2307/4048642
[https://www.jstor.org/stable/4048642?seq=1#page_scan_tab_contents] (2018年11月8日最終閲覧)

アフリカ分割期における エチオピアの「生き残り」の要因とは

<先行研究の分析> アフリカ諸国の反植民地運動

他国(地図中②~④)の抵抗運動

はじめのうちはヨーロッパ側を破っても、ヨーロッパ側は軍の再編成を行い再度出兵する。これを繰り返し、ヨーロッパ側の戦力がアフリカ側を上回った時点で滅亡。

Samari Tsew (1878-96)



- ①エチオピア帝国
- ②セモリ帝国
- ③スーダンのマフディー国
- ④ラビーフ帝国



エチオピアの抵抗運動

アドワの戦いでの勝利後、エチオピアと英仏伊の間でそれぞれ国境が定められた。どのヨーロッパ勢力も依然エチオピアでの権益に関心があったにもかかわらず、これ以降エチオピアへの武力侵攻は起きず、植民地化もされなかった。



Menelik II (1889-1913)

考察

・植民地化への抵抗運動を行った②~④のような国々がたどった「植民地化のパターン」からエチオピアは外れている。
・アフリカ側の勝利はエチオピアに限って起きたことではない。アドワの戦いはエチオピアが独立を守った直接の理由にはなりえないのではないか。
⇒「アドワでの勝利後ヨーロッパのどの国もエチオピアに侵攻しなかった」理由を検討する必要がある。

<仮説と論証> アドワの戦い後のエチオピアと英仏伊

- ①ヨーロッパ諸国がお互いの事情や関係に配慮して侵攻を見送ったという外的要因
 - ②エチオピア国内の事情がヨーロッパ諸国に対し侵攻を許さなかったという内的要因
- の2つの側面から仮説を立て、エチオピアと周辺ヨーロッパ勢力の選択について検証した。

外的要因

仮説① 緩衝地帯化

エチオピアの状況が1896年の英仏宣言で緩衝地帯化されたシャムに類似。
→英仏伊の“the Ethiopian Tripartite treaty of 1906”にエチオピアの現状維持、内政不干渉、三国の権益上の不可侵を明記。緩衝地帯と判断。

仮説② 非公式帝国化

自由貿易帝国主義による共有の非公式帝国だった？
→貿易の記録や交渉過程からヨーロッパ側の主導権を確認する必要があるが、資料不足でかわらず。

内的要因

仮説 エチオピアの軍事力

アフリカでは最大級のエチオピアの軍事力と過去のアフリカでの苦戦に鑑み、ヨーロッパ側は武力による植民地化を諦めた？

仮説③ エチオピアの貿易積極策

メネリク2世は貿易に強い関心を示し、ヨーロッパ側は植民地化をせずとも欲しい物品を手に入れられた？
→エチオピア西部のラス(豪族)がスーダン商人に対し象牙の専売を行っていた。イギリスの息がかかる貿易においてエチオピア側にも儲けがあったようだが、これが国家的な貿易であったかは定かでない。

結論

- ・エチオピアが「植民地化のパターン」から逸脱している
- ・アドワの戦いでの勝利は独立維持の直接の理由ではない

エチオピアの独立維持の要因はアドワ後の外交関係にある

- ①緩衝地帯化→確認
- ②非公式帝国化→貿易上の取決めの主導権を確認する必要
- ③エチオピアの貿易積極策→一次資料の入手、分析が必要

参考文献(抜粋)

- 岡倉登志 (1999) 『エチオピアの歴史—シェバの女王の国から“赤い帝国”崩壊まで』 明石書店
- 岡倉登志 (2001) 『アフリカの歴史 侵略と抵抗の軌跡』 明石書店
- Edward C. Keefer (1981) “Great Britain, France, and the Ethiopian Tripartite Treaty of 1906” *The North American Conference on British Studies*

VII. Water is Life 2018

1. Water is Life

Water is Life は、世界の高校生が参加する水に関する国際会議です。2014年に第1回が Raffles Institution（シンガポール）の主催で開催されて以降、2年ごとに開催されている。2016年に Maurick College（オランダ）で、2018年は、渋谷教育学園で開催校となった。

この会議では、ホスト校が、水に関するプログラムを作成し、世界各国の高校に参加を呼び掛ける形で進められる。参加する高校生は、自国の水問題に結び付け、科学的・政治学的・経済学的、または学術的視点から水に関する研究活動をチームで行い、論文を作成する。研究のテーマは、科学技術・生物多様性・教育・地域・管理行政（政策）の5つの中から設定する。論文は会議前に提出され、実際の会議では、その研究成果を持ち寄り、互いに発表し、他国の生徒たちと課題を共有する。

大会は、基調講演からはじまり、水に関する講演、生徒たちの研究発表、ポスターセッション、ワークショップと5日間にわたり、プログラムが組まれる。また、参加生徒は、学園の生徒宅にホームステイし、ホスト生徒とともに、登校する。また、会議の運営には、学園の生徒がボランティアとして参加する。

（次回 2020 年は、アメリカの St.Stephens 高校が主催校の予定）

Water is Life 2018 のロゴマーク（生徒デザイン）

【テーマ】

科学技術

(Engineering & Technology)

生物多様性

(Biodiversity)

地域社会

(Communities)

教育

(Education)

管理維持【行政を含む】

(Stewardship & Policy)



【後援・協賛・協力】（五十音順）

アフリカ協会、イオン、オルガノ、片山ナルコ、サピックス
サントリー、東京外国語大学、トヨタ自動車
三菱UFJ国際財団、読売新聞社ほか

文部科学省委託スーパーグローバルハイスクール（SGH）事業

2. 開催日時・場所

日 時： 2018年7月24日～28日
場 所： 渋谷教育学園渋谷中学高等学校
 渋谷教育学園幕張中学高等学校

3. プログラム

第一日 24日（火）

基調講演：松浦 晃一郎 氏（元 ユネスコ事務総長）

パネルディスカッション：

国内外教育関係者による WIL の意義についてのディスカッション

東京謎解きオリエンテーリング：

班ごとに分かれて、水に関する謎を解きながら、東京を巡る

第二日 25日（水）

Keynote Speech：明賀 春樹氏（オルガノ(株)会社取締役兼常務執行役）

生徒のよるプレゼンテーション：

事前の論文の評価の高い6チームを選考し、プレゼンを行う

サイトビジット I：

有明水再生センター見学 と 浅草訪問

第三日 26日（木）

Keynote Speech：沖 大幹 氏（東京大学生産技術研究所教授）

分科会 I：テーマごとに分かれてプレゼン発表

ポスターセッション：

チームごとに作成したポスターを展示し、発表する

第四日 27日（金）

ワークショップ：

谷津干潟見学／トヨタワークショップ／理科実践

トヨタによるワークショップ開催（トヨタ賞の授与）

分科会 II：6グループに分かれて、設定したテーマによる討議

日本文化体験

第五日 28日（土）

分科会 III・全体会：分科会 II の続き及び全体での共有

閉会式（表彰式）

Cultural Afternoon：参加国による自国文化紹介

4. 参加校

| | |
|---|--------------|
| Sir Karl Popper Schule Wiedner Gymnasium | Austria |
| Beijing National Day School | China |
| Collegio Claustro Moderno | Colombia |
| Vordingborg Gymnasium & HF | Denmark |
| Tokyo Gakugei University International Secondary School | Japan |
| River Valley High School | Singapore |
| Mahidol Wittayanusorn School | Thailand |
| Makuhari Senior High School | Japan |
| Shibuya Senior High School | Japan |
| d'Oultremontcollege | Netherlands |
| Kopernik Lyceum | Poland |
| Collegi Mare de Deu del Carmen | Spain |
| Mahidol Wittayanusorn School | Thailand |
| Saint Stephen's Episcopal School | USA |
| Sir Karl Popper Schule Wiedner Gymnasium | Austria |
| Collegio Claustro Moderno | Colombia |
| Center for Young Scientists (CYS) | Indonesia |
| Shibuya Senior High School | Japan |
| St. Odulphus Lyceum | Netherlands |
| Raffles Institution | Singapore |
| St Andrews College & Dlocesan School for Girls | South Africa |
| John Monash Science School | Australia |
| Oak Bay High School | Canada |
| Beijing National Day School | China |
| Eisbjerghus Internationale Efterskole | Denmark |
| Vordingborg Gymnasium & HF | Denmark |
| Dillmann-Gymnasium | Germany |
| International Christian University High School | Japan |
| Kumon Kokusai Senior High School | Japan |
| Makuhari Senior High School | Japan |
| Narita Kokusai High School | Japan |
| Narita Kokusai High School | Japan |
| Sakura High School | Japan |
| d'Oultremontcollege | Netherlands |
| Maurick College | Netherlands |
| Raffles Institution | Singapore |
| River Valley High School | Singapore |
| Collegi Mare de Deu del Carmen | Spain |
| Detroit Country Day School | USA |

| | |
|--|-------------|
| Centro Federal de Educacao Tecnologica de Minas Gerais | Brazil |
| Centro Federal de Educacao Tecnologica de Minas Gerais | Brazil |
| Lycee Saint Joseph | France |
| Maurick College | Netherlands |



基調講演



分科会



閉会式

5. 参加チーム・テーマー一覧

(2018.4. 23 現在)

| | School | Country | Team | Theme | Research Title |
|----|--|-----------|-----------------------------------|---------------------|--|
| 1 | John Monash Science School | Australia | John Monash Science School | Commu | Water Quality and The Yarra's Tributaries |
| 2 | Sir Karl Popper Schule Wiedner Gymnasium | Austria | Team Utricularia | Eng&Tec | Bioanalytical Tools in Advanced Water Treatment |
| 3 | Sir Karl Popper Schule Wiedner Gymnasium | Austria | Team the Sound of Water | Eng&Tec | Methods of the Analysis of Microplastics in Water |
| 4 | Centro Federal de Educacao Tecnologica de Minas Gerais | Brazil | CEFET 1 | Bio | |
| 5 | Centro Federal de Educacao Tecnologica de Minas Gerais | Brazil | CEFET 2 | Commu | |
| 6 | Oak Bay High School | Canada | Save Our Shores-Plastic Pollution | Edu | Identifying Recyclable and Non-Recyclable Plastic Polymers on Southern Vancouver Island Beaches |
| 7 | Beijing National Day School | China | BNDS Team 1 | Edu | Research on the Relationship Between Economic Growth and the Awareness on Water Protection—A Case Study of China and Japan |
| 8 | Beijing National Day School | China | BNDS Team 2 | Bio | Research on Major Causes of Eutrophication in Poyang Lake |
| 9 | Collegio Claustro Moderno | Colombia | Team 1 | Eng&Tec | Bioremediation Efficiency of Contaminated Water Using Microalgae |
| 10 | Collegio Claustro Moderno | Colombia | Team 2 | Eng&Tec | Bioremediation Efficiency of Contaminated Water Using Lemna minor |
| 11 | Eisbjerg International Efterskole | Denmark | Eisbjerghus | Commu | Water usage at Eisbjerghus |
| 12 | Vordingborg Gymnasium & HF | Denmark | The Saviors of Coastal Waters | Bio | Wetlands: a Multifunctional Solution |
| 13 | Vordingborg Gymnasium & HF | Denmark | The Sea Defenders | Eng&Tec | Biomagnification of Microplastic in Local Waters |
| 14 | Lycee Saint Joseph | France | Saint Joseph 1 | Bio | |
| 15 | Dillmann-Gymnasium | Germany | Dillmann-Gymnasium | Edu | Tap Versus Bottled Water: Water Preferences in Germany |
| 16 | Center for Young Scientists (CYS) | Indonesia | Madyapadma | Eng&Tec | Community Based Waste Water Management System (Sanimas) in Kampung Kodok Br. Tunggal Sari Desa Dauh Peken Tabanan |
| 17 | International Christian University High School | Japan | ICUHS | Edu | Japanese's Extravagant Consumption of Water and how education can ameliorate the situation |
| 18 | Kumon Kokusai Senior High School | Japan | KUMON | Commu | The Future of Japan's Water Supply |
| 19 | Makuhari Senior High School | Japan | ChangInba | Eng&Tec, Commu, Bio | ChangInba |
| 20 | Makuhari Senior High School | Japan | THAP Water | Commu | Pursuit of Authentic Water Efficiency by Investigating Regional Waterworks and Historical Backgrounds |

| | School | Country | Team | Theme | Research Title |
|----|---|--------------|-----------------------------------|------------------|--|
| 21 | Narita Kokusai High School | Japan | Narikoku Team A | Edu | The Waste of Water in Japan |
| 22 | Narita Kokusai High School | Japan | Narikoku Team B | Commu | Sessui or Saving water ~To Live with Water~ |
| 23 | Sakura High School | Japan | Team RISKIT | Stew&P | Preserving the Native Eco-System of Lake Inbanuma |
| 24 | Shibuya Senior High School | Japan | ShabuShabu | Edu | The Future of Tokyo Bay |
| 25 | Shibuya Senior High School | Japan | The Golden Carp | Eng&Tec | Use of Filters and UV Rays for a Dual-Filtering System During Disasters |
| 26 | Tokyo Gakugei University International Secondary School | Japan | TGUISS SWP | Eng&Tec | The Quality of Japanese Water |
| 27 | d'Oultremontcollege | Netherlands | Dutch Aqua Scientists | Commu | What is the Cause or the Causes of Flooding Around the Demer in Heusden? |
| 28 | d'Oultremontcollege | Netherlands | SER | Eng&Tec | The Rainwater Problem in the Netherlands |
| 29 | Maurick College | Netherlands | Maurick 1 | Bio, Edu, Stew&P | Influence of the Tide on the Drowned Land of Saeftinghe |
| 30 | Maurick College | Netherlands | Maurick 2 | Eng&Tec | |
| 31 | St. Odulphus Lyceum | Netherlands | Bram Doornbos en Toon van Reissen | Eng&Tec | Rainproof |
| 32 | Kopernik Lyceum | Poland | KOPERNIK | Eng&Tec | Rybnik Lake as an Unconventional Water Reservoir |
| 33 | Raffles Institution | Singapore | RI01 | Eng&Tec | A Simple Synthesis Method for Porous Copper To Improve Its Efficacy in Decontaminating Polluted Water |
| 34 | Raffles Institution | Singapore | RI02 | Commu | A Case Study Investigation into the Effectiveness of Waterbody Management: Lorong Halus Wetland |
| 35 | River Valley High School | Singapore | RVTeam1 | Commu | Rejuvenating@Pandan Learn, Appreciate & Bond through H2O Research on Active, Beautiful, Clean (ABC) Waters Programme |
| 36 | River Valley High School | Singapore | RVTeam2 | Eng&Tec | What is a Water Efficient Canteen? |
| 37 | St Andrews College & Diocesan School for Girls | South Africa | Crystal Clear | Eng&Tec | The Effects of Natural, Bio-absorbent Substances on Heavy Metal Removal |
| 38 | Collegi Mare de Deu del Carmen | Spain | Young Managers | Stew&P | Water Supply: The Study of Public, Private and Mixed Management Policies |
| 39 | Collegi Mare de Deu del Carmen | Spain | Young Scientist | Bio | Drinking in Life: The Importance of Water |
| 40 | Mahidol Wittayanusorn School | Thailand | MWITS Team 1 | Bio | The Efficiency of Mushroom and Fungii Isolated From Soil and Effluent For Decolorizing Red Reactive Dye |
| 41 | Mahidol Wittayanusorn School | Thailand | MWITS Team 2 | Eng&Tec | Development of Paper-based Sensor with Portable Device for Real Time Fieldwork Detection of Arsenic in Water Resources by Electrochemical Method |
| 42 | Detroit Country Day School | USA | Yellow Jackets | Stew&P | The Effectiveness of the Great Lakes Water Quality Agreement |
| 43 | Saint Stephen's Episcopal School | USA | Team Falcon | Commu | Effects of Bicarbonate Addition on Montipora capricornis Growth Rate and Photosynthesis |

【提出されたアブストラクト例】

Shibuya Senior High School (Japan) / The Golden Carp (Engineering & Technology)
“Use of Filters and UV Rays for a Dual-Filtering System during Disasters”

The 3.11 earthquake showed us the reality that Japan was unprepared for such a large-scale disaster. Especially in large cities, due to the large population, the demand for water during disasters is high; creating a situation in which there may not be enough water for all.

It is typically said that people can only survive without water for three days and therefore, our group concluded that we need to create a system which allows people to have access to safe water.

We intend to achieve this through a dual-filtering system that uses filters and ultraviolet (UV) rays to purify fresh water from local sources such as lakes and rainwater. The collected water first goes through a filter composed of pebbles, activated charcoal, and then gauze removes the remaining contaminants, converting the fresh water to hyaline water. Once this is processed, UV rays are used to sterilize the water which may be contaminated with dangerous bacteria. Since UV rays are absorbed by black, we will create the machine with a black plastic box and a glass lid designed to collect UVB (a type of UV ray) to sterilize. We hope this system helps create enough safe water for all.

Saint Stephen’s Episcopal School (USA) / Team Falcon (Communities)
“Effects of Bicarbonate Addition on *Montipora* Growth Rate and Calcification”

Dissolved inorganic carbon is used by hard corals to build calcium carbonate skeletons. The skeletal growth of corals involves two different processes. The first process occurs at night in which a Calcium carbonate crystal framework is laid down. The next day, the nucleation of the new crystals results in increased skeletal density. Due to increased CO₂ emissions in the atmosphere and the subsequent increase in carbonic acid in the ocean, there is less and less carbonate available to calcium carbonate skeleton building organisms, such as coral. Previous studies have shown that the addition of 2 mM bicarbonate to tanks of branching corals, such as *Porites porites*, has doubled the calcification rate of the coral skeleton. (Marubini et al., 1999) This experiment will determine what concentration of NaHCO₃ will maximize photosynthesis, growth rate, and calcification of *Montipora* corals.

VIII. 運営指導委員会の活動状況

学校教育に専門的知識を有する者、学識経験者、関係行政機関の職員等、第三者で組織され、運営に関し、専門的見地から指導、助言をいただくために、運営指導委員会を設けた。特にグローバルリーダーを育成する取り組みについて、国際社会で活躍された方々から、取り組みについての指導・助言をいただくこととなった。

運営指導委員

吉川弘之さま（科学技術振興機構 特別顧問）
 松浦晃一郎さま（パソナグループ 顧問）
 三木繁光さま（三菱東京UFJ銀行 特別顧問）
 佐々木正峰さま（文化財建造物保存技術協会 理事長）
 松本健さま（グルーバンクロフト基金 常務理事）

連携大学関係者

荒川洋平さま（東京外国語大学 教授）

(1) 第1回運営指導委員会

平成30年6月

4年目の活動報告と高校生水会議に関する報告を行った。

(2) 第2回運営指導委員会

平成30年9月

Water is Life 2018 の実施と成果に関する報告を行った。

(3) 第3回運営指導委員会

平成31年2月7日（木） 10時00分～14時00分

5年目の取り組みの成果の報告と研究授業への助言・指導をいただいた。

最終年度に合わせて、渋谷高校、幕張高校及び学園全体の取り組みの成果について報告し、今後の取り組みの継続に関しての報告も行った。

日程：

| 時 間 | 内 容 | 場 所 |
|-------------|------------------|----------|
| 9:30～ | 受付 | 会議室 |
| 10:00～10:15 | 校長挨拶 | 〃 |
| 10:15～10:40 | SGH 総括と今後（幕張副校長） | 〃 |
| 10:40～10:50 | SGH 総括と今後（渋谷副校長） | 〃 |
| 10:50～11:10 | 本日の授業説明（担当者） | 〃 |
| 11:20～11:45 | 英語エッセイ授業見学 | 3階 高1C教室 |

| | | |
|-------------|---------------|--------|
| 11:50～ | WIL 報告・昼食及び懇談 | 会議室 |
| 12:50～13:30 | 高 1AN コース授業見学 | 7階 図書室 |
| 13:30～14:00 | 質疑・指導・助言 | 会議室 |
| 14:00 | 終了予定 | |

IX. 取り組みの発信

SGH の成果を広く発信するために、以下の取り組みを行った。

SGH 研究報告会

SGH 連携校との交流

第3回 SGH 全国フォーラム

SGH研究報告会

渋谷教育学園渋谷高等学校・幕張高等学校のSGH研究報告会を合同で開催した。

本学園の渋谷高校と幕張高校は、平成26年度にSGH校の指定を受け、それぞれの課題研究に取り組んできた。これまで研究発表会の機会を持てなかったが、同時期に開催される「世界高校生水会議 (Water is Life)」に合わせてSGH研究報告会を合同で開催することができた。両校の運営指導委員の先生方や、全国からSGH校・アソシエイト校の先生方や生徒たちをお招きし、両校の生徒・保護者の方も交えた賑やかな報告会となった。

最初に渋谷高校・幕張高校校長の田村哲夫より開会の挨拶を申し上げ、次いで常々ご指導ご助言をいただいている文部科学省初等中等教育局の佐藤由郎様、さらに高大連携でお世話になっている東京外国語大学大学院教授の藤縄康弘様よりご祝辞を頂戴した。

取り組みの報告は、渋谷高校から始まり、副校長高際伊都子の概略説明を受けて、SGH担当の北原教諭と生徒たちにより、「探求型学習を『行動できるリーダーの育成』へといかにつなげるか」という研究構想に対する具体的な取り組み事例として、「Project Hiroshima」、「フロリダのパートナー校における世界史授業の再現」、「Wars and Conflicts プレゼンテーションの実演」が発表された。

次に、幕張高校の副校長田村聡明が、研究構想「多角的アプローチによる交渉力育成プロジェクト」、およびテーマである「食」についての概略の説明を、SGH担当の深村教諭が具体的な取り組みの説明を行い、続いて生徒による「Onigiri Marketing Project」、「Taking On The Current Global Food Crisis ～our research on NERICA～」についてのプレゼンテーションが行われた。

午後は、「世界高校生水会議 (Water is Life)」のポスターセッションに参加し、投票も行った。なお、SGH研究報告会参観者の評価がもっとも高かったシンガポールのチームにはWater is Lifeの閉会式でSGH賞が贈られた。

場所をカフェテリアに移しての情報交換会には、遠方の先生方もご参加いただき、SGH活動を推し進めていく上での問題点や対応を中心に意見を交換した。



(発表)



(ポスターセッション)

SGH校等との連携

定期的に学校の広報紙やHPを通じて保護者や学校関係者へ周知し、カリキュラムの内容や実施成果についての広報に努めた。また多くのSGH校、関係委員会等の訪問を受け入れ、成果の普及に努めた。世界高校生水会議の開催にあわせて、SGH研究報告会を開催し、会議の公開と取り組みの発表を行った。通年で本学園の取り組みの公開に努めた。

受入れ総数16回：学校11校・海外2団体・教育委員会2回・官庁1回

学校広報誌掲載：6回 SGH研究報告会1回（12校より生徒教職員来校）

第3回SGH全国フォーラム

東京フォーラムで開催された第3回SGH全国フォーラムに高校1年生の女子生徒2名が参加した。ポスターセッションでは、夏に開催された世界高校生水会議の様子をまとめ、水問題についての取り組みを報告した。

X. 生徒の活躍

1、2018年度 SGH 活動記録

①【高校1年生】

- ・自調自考論文 課題研究 問いたて練習会（1学期）全員
- ・現代社会授業「女性の人権に関して」東京外国語大学大学院生ミリアムさん 全員
- ・広島女学院高校 交流（広島研修旅行）
- ・Hiroshima Brochure Project（11/1～12/1）全員（協力 東京外国語大学大学院）
- ・St. Stephen's Episcopal School 交流（HBP）
- ・自調自考論文 優秀作品 発表会とポスターセッション（2/16）全員
- ・フロリダ研修（1/31～2/6）生徒9名 教員1名 参加
- ・Wars and Conflicts（3学期）全員（協力 東京外国語大学大学院 留学生）

②【高校2年生】

- ・St. Stephen's Episcopal School 受け入れ交流
- ・北京第一中学との交流（修学旅行）選択必修
- ・北京市広渠門中学との交流（修学旅行）選択必修
- ・北京大学との交流（修学旅行）選択必修
- ・活動報告会 Social Justice Project（通年）全員
- ・イスラム講演会 全員
- ・自調自考論文 優秀作品 発表会とポスターセッション（2月16日）全員

③【高校生】

- ・第二外国語講座78名（通年）（中2クラス 仏1クラス 独1クラス 西2クラス）
- ・さくらサイエンスプラン（科学振興機構）によりベトナムの高校生が来校、交流（7月）
- ・渋谷ライティングセンター（通年）希望者 課題研究に関する支援（協力 卒業生）
- ・ユニクロ古着回収協力（全校）
- ・飛龍祭における募金活動（世界寺子屋運動 及び LGBT 支援）
- ・シンガポール Raffles Institution 生徒の受け入れ（9月）
- ・オーストラリア St. Francis Xavier College の生徒の受け入れ（9月）
- ・オーストラリア Loreto College の生徒の受け入れ（1月）

④ その他

- ・国際水学会（International Water Association）の世界大会での発表

Water is Life 2018 における渋谷教育学園の研究成果が審査員から高い評価を受け、東京ビッグサイトで開催された上記大会に招待された。研究をした生徒たちはWIL2018の概要と自分たちの研究成果について世界各国から集まった専門家や企業の方々の前で発表した。

- ・世界こどもの日ユース・フェスティバル内 SGH 校発表会

11月17日、聖心女子大学で開催された上記イベントにおいて、高2生4名が本校の社会貢献教育とその成果について発表した。特にこども食堂における活動と小学生や幼稚園児を対象とした教育活動が高く評価された。

2、生徒の主な活躍

- ・模擬国連世界大会 優秀賞
- ・第7回日本高校生パラメンタリーディベート連盟杯全国大会 優勝
- ・東京都高英研主催 第22回 高校生英語ディベート大会 優勝
- ・第4回 PDA 高校生パラメンタリーディベート世界交流大会 優勝
- ・第4回 PDA 高校生即興型英語ディベート全国大会 準優勝
- ・PDWC2019 高校生パラメンタリーディベート世界交流大会 準優勝
- ・JWSC 第2回全国高校生英語ディベート大会2018 準優勝(日本チーム内第1位)
- ・第7回日本高校生パラメンタリーディベート新緑杯 準優勝
- ・NSDA ディベート日本第4回全国大会 準優勝
- ・英語ディベート東京工業大学杯2019 準優勝
- ・国際言語学オリンピック世界大会 日本代表
- ・平成29年度第2回国際連合公用語英語検定試験 特A級外務大臣賞
- ・第57回全国高等学校生徒英作文コンテスト 入選(1名)
- ・図書館を使った調べる学習コンクール 毎日新聞社賞(日本語部門優秀賞)、図書館振興財団賞(英語部門優秀賞)、佳作(1名)
- ・第10回高校生英語エッセーコンテスト優秀賞
- ・東京家政大学主催 生活をテーマにする研究・作品コンクール 優秀賞
- ・旺文社主催 第62回全国サイエンスコンクール 旺文社赤尾好夫記念賞
- ・全国高等学校書評合戦ビブリオバトル in 東京 優秀賞
- ・第14回「地域の伝承文化に学ぶ」コンテスト 地域文化研究部門 佳作(1名)
- ・高校生の君たちへ漱石作品読書感想文募集 優秀賞(1名) 奨励賞(1名) 入賞(9名)

XI. 連携大学等との協力

SGH の取り組みでは、国際化を進める大学や企業、公的機関と連携した活動を行った。

東京外国語大学との連携

① 高大連携の取り組み

大学訪問と留学生交流会 （30年5月）

大学を訪問し、留学生と交流した。

② SGH プロジェクトとの連携

大学院生による授業

現代社会の特別講師として、シリアからの留学生を招き、イスラム圏の人権に関する講義と質疑を行った。

大学院生による授業参加（メンター）

生徒同士での英語でのディスカッションを支援するため、大学院で学ぶ留学生を招き、授業に参加していただき、アドバイスや評価をいただいた。1年間で延べ 人がメンターとして活躍した。多くは継続支援であり、生徒からの信頼も高まった。

その他の連携

① 国際高校生会議（渋谷教育学園幕張高等学校との協同プロジェクト・通年）支援

多くの企業、大学より、参加生徒への支援、評価をいただいた。

② 講演会実施 トランプ大統領から学ぶこと - アメリカ「Z世代」社会への影響力

講師 みずほ総合研究所 安井明彦欧米調査部長

③ 特別講座実施 「世界の水環境事情」

④ 講師 東京工科大学応用生物学部 浦瀬太郎教授

⑤ 授業協力

東京ジャーミー

XII. 評価分析

SGH のもたらす成果について、SGH に関する 2 種類の生徒アンケートの結果から考察する。また、英語の 4 技能を外部指標の基づき、その伸長を分析した。

SGH アンケート分析

英語の 4 技能の向上に関して

SGH アンケート分析

本校では、指定初年度より、SGH アンケートを無記名で実施している。これは、生徒の「英語運用能力」、「知的好奇心（英語に接する習慣）」および「グローバルリーダーへのモチベーション」という 3 つの部門に対して、計 27 個の質問項目に答えるものである。単年度の評価だけでなく、学年 3 年間の変化や学年ごとの違いも読み取り、次年度のプロジェクトに反映させている。

1. 高校 3 年生(SGH 第三期生)

(ア) SGH アンケート

① 3 年間における意識変化 (図 1)

図 1 は、SGH 第三期生である高校 3 年生(18 期生)について「よくあてはまる・そう思う」または「とてもよく当てはまる・そう思う」と答えた生徒の割合を、平成 29 年 3 月(高校 1 年修了)、平成 30 年 3 月(高校 2 年修了)、平成 31 年 3 月(高校 3 年修了)時点で比較したものである。昨年度に比べすべての項目で大幅に向上した。

▶質問項目(1)~(10) :英語の一般的な運用能力を問う質問

順調に伸びた。特に(7)地球社会が抱えている問題に関して 200 語以上の英語のエッセイを書くことができる、(8)地球社会が抱えている問題に関してとっさに英語で何らかの説明ができる、(9)地球社会が抱えている問題に関して自分の考えを英語で発信できる、(10)地球社会が抱えている問題に関して英語でディベート、ディスカッションができる、の項目では、それぞれプラス 30%以上という著しい伸びを見せた。

▶質問事項(11)~(19) :英語に接する習慣と知的好奇心を問う質問

この学年の自己評価の低さに驚いた昨年のアンケート結果から、一転して最も高い伸び率になっているのがこれらの項目である。プラス 40%の結果となったものもあるが、その要因として考えられるのは、多くの入試演習をやっていく中で、SGH プログラムとしてこれまで培ってきた内容や Service Learning などの社会貢献活動の経験や発表が (12)科学技術、研究開発 (13)政治・経済・社会問題 (14)環境問題 (15)文化、歴史 (16)紛争・平和 (18)国際貢献 (19)時事問題と結びついた生徒が多くいたことにあるだろう。英語を本質的に読めるようになったことから教科横断型の取り組みの意義やあらゆる知識、興味、関心がつながっているという感覚を得た生徒の気づきがこの結果となったと考える。

▶質問事項(20)~(27) :グローバルリーダーへのモチベーションを問う質問

もともとこれらの質問に関しては高い数値でスタートしているが、それでもさらに 20%向上した。国際人としての資質を高めるのに語学は欠かせないが、SGH プログラムが一つのキャリア教育の一環として機能した証明となった。特に嬉しいのは (26)グローバルリーダーとして活躍し、地球社会に貢献したい (27)海外の会社に対しプレゼンを行う、国際会議で発言したい の項目ではプラス 30%だったことだ。生徒が物怖じせず挑んでいく大切さを学んでいることに、この取り組みの意義を感じた。

② 高校 3 年修了時における第一期生から第三期生との意識変化 (図 2)

図 2 は、SGH 三期生である高校 3 年生(18 期生)について「よくあてはまる・そう思う」または、「とてもよく当てはまる・そう思う」と答えた生徒の割合を、SGH 第一期生(16 期生)、第二期生(17 期生)の高校 3 年生修了時の結果と比較したものである。

一見してほぼすべての項目において第三期生(18 期)の回答が右肩上がりに向上している。3 年間という取り組みの中で教材を繰り返し見直し、授業の時間配分などを丁寧に次年度に引き継ぎ、タイムリーな話題とその学年の性質を考慮し、よりよい授業に結び付けられたことに効果があったと考えられる。2 年間先輩たちの取り組む姿勢や成果、それらの発信を身近に見て、自分たちの取り組みを工夫できたことは生徒も教員も恩恵を受けた。

▶質問項目(1)~(10) :英語の一般的な運用能力を問う質問

全ての項目で第一期生から向上している。特に高度な英語運用能力を必要とする国際問題や社会問題について議論したり、発表したり、エッセイを書くということに自信を持っている生徒が確実に増えている。このことは SGH プログラムを初年度の示したベクトルに沿いながら、内容の丁寧な反省と改良を重ねながら進めてきたことが功を奏していると言える。

▶質問事項(11)~(19) :英語に接する習慣と知的好奇心を問う質問

特筆できるのはこれらの項目である。(12)科学技術、研究開発に関する英語を読むは第一期生(16 期)の 2 倍以上の伸びを示し、(13)政治経済など社会問題、(14)環境問題、(16)平和問題に関する英語を読むはほぼ 2 倍の伸びを示している。これは、英語の授業と他教科の連携がうまくいったことが要因の一つであろう。また、常に社会情勢に目を向け、国際問題を考える機会が多く、生徒にはそれらの答えのない答えを模索する忍耐力がある。これらの数値が高いのは、自分の考えを構築する上で大切な情報に敏感である生徒像を表していると言える。(14)環境問題は昨年度の教科横断型授業で文系生物の取り組みを紹介したが、日本語と英語を使ったこの取り組みのおかげで、高校 3 年生の入試演習で必ず出てくる環境問題、生物多様性といった分野で単語の難しさや内容の複雑さを読み解く上で大いに役立つ実感を得たことがこの結果となったのであろう。

▶質問事項(20)~(27) :グローバルリーダーへのモチベーションを問う質問

これらの質問事項もすべて向上している。海外からの留日生、訪日団受け入れ、姉妹校の生徒との交流、海外研修などを通して感じる刺激はもちろんあるが、グローバル社会に生きていく本人の自覚とそこで活躍していきたいという強い意志を持つ生徒が格段に多くなっているのがわかる。「内向き志向」、「根拠なき不安を持つ」と言われたこともあった学年だったが、ふたを開けてみるとすべての項目で向上している。(21)得意とする分野、興味を持っている分野を極めたい 92% (24)日本がグローバル社会の中で存在価値のある国になるよう

に自分ができるとをしたい80% (25)地球社会が抱える問題の解決に貢献したい80% と、第一期生と比べるとほとんどの項目で10%~15%の数値の伸びを示した。

生徒ひとり一人のニーズを満たすことは難しいことである。教材を選ぶ時や外部講師を招いての講演会参加など内容理解に重きを置くか、オーセンティックな英語を迫及するかのバランスのとり方は、様々な要因が絡んでくるので唯一の正解はないだろう。そんな試行錯誤の3年間の取り組みであったが、生徒たちはしっかりと受け止め、グローバルリーダーとしての素養を身につけて努力を続けたいという結果がアンケートに出ている。実際に、第三期生(18期生)は、高1、高2の世界各地の海外研修(希望者)に45名が参加し、熱心で実り多い成果をあげた。海外研修中の気づきから論文を執筆した生徒もいるし、海外の生徒との交流も一部の生徒に偏ることなく、皆が積極的であった。学年在籍200名の中で海外大学進学者は10名で、そのうち一般生として入学した6名の生徒がトップレベルの海外大に合格し進学を決めた。また、高校模擬国連国際大会2017で優秀賞を受賞したのは中学英語からスタートした一般生ペアであり、帰国生に交じって英語ディベート大会で活躍した一般生も多い。これらもSGHプログラムのもたらした副産物であることは間違いない。今後、彼らが大学や社会においてグローバルに活躍することを期待する結果となった。

2 高校2年生 (SGH 第四期生)

高校2年生では、Ⅰ. 授業アンケート Ⅱ. SGH アンケートの二種類を実施し、その成果を分析した。

① 授業アンケート

各学期の最後に、英語の授業に関する生徒アンケートを行った。SGHプログラムの一環として英語の授業で取り組んだ活動内容に対し、生徒からのフィードバックを得ることが主な目的である。生徒自身の英語力についてどのように認識しているか、授業の満足度などをリカートスケールで測定することに加えて、各々のトピック等について自由記述式で回答してもらった。回答は匿名で行われ、一学期末は178名、二学期末は195名、三学期末は167名から回答を得ることができた。

高校二年英語科の取り組みとしては(1)教科間連携授業、(2)外部講師を招いての講演会、(3)Social Justice Project を柱にしている。本稿では(1)と(2)について解説を加えながら、特筆すべきアンケートの結果について示したいと思う。

(1)教科間連携授業

➤ 家庭科と連携しての「子供の人権や難民問題、児童労働」についての学習

まず、①四人の児童労働のケースについてまとめたプリントを読み、児童労働の実情、その脅威について学んだ。その後、②What is Child Labor?において児童労働の定義を学んだ。また、児童労働の現状を別の媒体を使って学び、理解を深めるため、③BBC ニュースを使って、金属採取の仕事をしているコンゴの子供について学んだ。

生徒の満足度としては概ね高く、特に①では 50%以上の回答者が「興味関心を持ったか」という質問に対して、5段階評価(5が「とても関心を持った」)で4以上の評価をつけている。①と②に関しては

生徒の反響は高く、「将来役に立つ内容だったか」という質問についても 50%近い生徒が4以上のポジティブな回答をしている。生徒から寄せられたコメントとしては以下のようなものが挙げられる。

「世界にこんなに大変な環境で生活している子たちがいるんだということがわかり、私ももっと真面目に生きなければいけないと思いました」

「私たちが日頃手にしているものは児童労働の子供達が作ったものかもしれないと思うと胸が痛い。格差にもほどがあると思った。」

他にも「連携している家庭科の授業に活かされた」といったコメントも少なからず見られたことに加え、「児童労働と資本主義の関係性」といった先行して取り扱ったテーマである「経済格差」と結びつけて考えている生徒もおり、より広いパースペクティブから学習内容を捉えるきっかけにもなったようだ。

▶ 「水資源」についての学習

今年度夏に、SGH 最終年度の事業集大成として、本校を会場として世界高校生水会議 “Water is Life” が開催された。これに合わせて、高校二年生では水問題についての理解を深めてもらおうという意図で、水資源、汚染などについて授業で取り扱った。

まず、①Where is Water という UNESCO が提供しているアニメーション資料を使って水問題の概要をつかんだ。② We Can't Live Without Water という “Issues That Matter”(David Peaty & 川田潤、2018年、金星堂)に収録されている一節を用いて、主に水資源の枯渇、確保をめぐる諸問題を学んだ。次に、③Zawa-Zawa Land という架空の国々からなる地域における水問題のロールプレイで、様々な形態の水資源問題について、それぞれの国の立場からディスカッションをする機会を設けた。続く授業では、④Japan's Contribution という文章で、日本の民間企業が発展途上国の水問題を解決すべく行っている現地での事業の取り組みに触れた。

①、②においては生徒の反響は高く、「興味関心を持ったか」(5段階評価4以上が①では 60%以上、②ではおほぼ 60%)、「将来に役立つ内容だったか」(5段階評価4以上が①②ともに 50%以上)で好印象が見て取れる。要因としては、①がわかりやすいアニメーションを使って興味深い事実をとりあげる教材であったことがあり、②は全般として水問題の知識を深められたことが有益だったと感じている生徒は多いようだ。一方で③、④においては、そこまでポジティブな反応が得られなかったようである。③でも④でも「興味関心を持ったか」では評価4以上のポジティブなものが 30%程度、逆に2以下のネガティブなものが 30-40%程度となった。③ではロールプレイを用いたアクティビティであるが、架空の設定で行なったことで興味を上手く引くことができなかつた点や、そもそもアクティビティ自体にネガティブなイメージを持っている生徒も一定数いることがわかった。④についてはやや素材が難しかったことが原因とみられる。水資源に関する授業についての生徒のコメントを以下に引用しておく。

「1番衝撃的だったのはサウジアラビアについて。高1くらいにやった持続可能性の大切さがここでも関連してくると気づいた。」

「バーチャルウォーターを地理でも習った」

「水問題について具体的な値とともに理解できた。バーチャルウォーターという概念については今

回初めて知った。一見水ではなくても、間接的に水と関わっている時もあるということを学んだ。」

水資源問題についての見解が深まったことに高い満足感が得られているようである。数は限られているが、以前学んだことを引き合いに出して、社会問題の大きなつながりの中で今回の学習事項をコンテクスト化できている生徒も見られた。

▶ 文系生物科と連携して「生物多様性」についての学習

まず、①生物多様性に関する知識・リスニング・リーディングのクイズ大会を英語で行って生徒の知識や好奇心を喚起し、②TED Ed で提供されていた “When Will the Next Mass Extinction Occur?” というアニメーションを使って現在起きている人間が原因の大絶滅について理解を深め、③The Sixth Extinction: An Unnatural History という 2014 年にピューリッツァー賞を受賞した洋書を使用して、人間が起因である「第六の絶滅」に対する理解を深めた。

ここまでは例年と同様だが、本年度新たに、これに併行して、文系生物の選択者と、課外活動の模擬国連部の部員が中心となり、④「気候変動」について、模擬国連の形式に則って、世界の 200 近くの国が各国家の大使役である各生徒に割り振られ、COP24 (国連気候変動枠組条約第 24 回締約国会議) に準じる形で決議案の採択をした。概略プレゼン、決議案の原案作成、内容説明、集計等、授業の運営は、前述の生徒が行った。

アンケートの結果では①②③いずれも「興味・関心」「将来での有益さ」についてはポジティブなもの、概ね半々という結果になった。生徒たちから得た感想としては次のようなものがあった。

「比較的取り組みやすい話題だったということもあり、楽しみながら参加出来た。クイズが楽しかった。」

「いろんな面から大量絶滅について考察していて面白かった」

「人間も生物種絶滅の一因になりうると感じた」

一方、昨年度から行なっている④の活動では、作業の負担が一部の生徒に集中してしまうなどの課題が見られ、全体的な生徒の反応を見ても十分にコミットしきれなかった様子が伺える。もちろん、以下に挙げるような好感触のフィードバックも得られている。

「生物基礎を受けていて、プレゼンを準備するのは大変でしたが、気候変動について、知識を得ることができました」

「Saint Lucia という国について調べるのが楽しかった。模擬国連部だったことがあるので懐かしい気持ちになった。」

先述のようにネガティブな反応が見られたが、大きな要因としてはリベラルアーツ的に様々な知を統合しようという授業の意図と、行われたのが高校二年生の三学期であったこともあり現実問題としての大学受験対策へのニーズとの両立性を、結果として上手く確保しきれなかったことがあるかもしれない。

高校二年以上の学年でこのようなりべラルアーツ型授業を行う際の課題の一つと言えよう。

(2) 外部講師を招いての講演会

学習テーマに合わせ、二学期に外部講師を招いて講演会を授業内に行った。

▶ 東京ジャーミイ（モスク）のイスラム教徒

2学期には、代々木上原にある東京ジャーミイよりイスラム教徒の広報担当、下山茂氏ならびに様々な文化的背景をもった講師3名を招いて、講演会を行った。イスラム原理主義テロ組織の活動によってイスラム教徒への偏見が強まる中で、実際にイスラム教徒の方に会って話を聞くことで、生徒に正しい認識を持ってもらいたい、ということから、二年前から東京ジャーミイ様に講師を派遣していただいている。

講演会は、英語科の授業内で2時間を使って行われ、1時間目は日本人イスラム教徒である下山氏を軸に講師の方も含めての日本語での講演、2時間目は講師の方々に分かれて4つの分科会を開き、それぞれの講師の経歴や職業を見て各生徒が興味のある分科会に参加した上で、イスラム教自体、テロ問題、女性とイスラムの関係など様々な話題について、英語（必要であれば日本語も）で講演ならびに質疑応答を行った。

アンケートでは、「興味関心を持ったか」については、5段階評価で4以上のポジティブな回答が67%得られ、関心の高さが伺える。「将来役に立つ内容だったか」については、ポジティブな回答は60%を超え、ここでも生徒にとっての成果物の大きさが感じられる。上記2つの質問項目において最大評価の5をつけた学生がいずれでも一番多かったことは特筆に値する。生徒の声としては以下のものが挙げられる。

「自分の先入観が変わるいい機会だった。新鮮で楽しかった。またこういう機会があればいいなと思った」

「無意識に色々な偏見を持っていたのだなと思いました」

「人生の授業のようなかんじだった。感動した。」

生徒からの反応で興味深い点は、イスラム教自体への理解が深まり、偏見が減ったという意見に加え、「人生にとって考えるきっかけ」となったという意見も一定数見られる。別の価値観体系を持っている人との交流は、生徒がすでに持っている価値観に新しい軸を加えることができたという効果も認められるかもしれない。

② SGH アンケート

生徒の「英語力」「知的好奇心（習慣）」および「グローバルリーダーへのモチベーション」という3つの部門に対し、SGH 当該生徒が合計27個の質問項目に4点法で回答するという形式のものである。各年度末に高校生を対象に実施し、生徒の上記三要素の意識の変化を見ている。本稿ではSGH 第四期生である高校二年生（19期生）201名（匿名）から得られた回答を、昨年度末に同様のサンプルに対して同様に行ったアンケートの結果と比較、検証したい。

<SGH 第四期生(19 期生)の意識変化>

先述のようにこのアンケートは「英語力」「知的好奇心(習慣)」「グローバルリーダーへのモチベーション」の三セクションから成り立っている。全体的な結果から見ると、微増、微減の項目が半分ずつくらいであり、有意に生徒の意識が変化したということは難しい。ここでは、セクションごとに結果を考察したい。

セクション1「英語力について」においては、前年度の結果と比べ計10項目中8項目において、ポジティブな回答(「とてもよく当てはまる」、「よく当てはまる」)が減少した。減少とはいえ、ほとんどの項目では数%の変化しかないと、実際のところ見られた差は棄却できる範囲内のものと考えられ、生徒の自身の英語力に関する認識は大きな変化はなかったといえよう。ただ1項目「外国の人と英語で話することができる」においてポジティブな回答が前年度比較で7.6%とやや大きな減少を見せた。この要因としては、昨年度のHiroshima Brochure Projectでメンターらとの交流の時間が多かったことに比べ、本年度は違った文化圏の人と英語を介してコミュニケーションをするという機会が全体として少なくなったからではないかと推察される。

セクション2「知的好奇心(習慣)」は、項目により伸長度が微増～微減と分かれており、有意な差となっている項目はないと思われる。ただ、高校二年を通して取り扱うことの多かった環境問題に関しては、「よく英語で読んだり、聞いたり」するとポジティブに回答した生徒が7%増加していた。(本年度は水問題、エネルギー問題、生物多様性といった環境問題を取り上げている)

セクション3「グローバルリーダーへのモチベーション」は、全体的には微増・微減となっている。その中でも目立った項目としては、「グローバルリーダーとして活躍し、地球社会に貢献したい」では9.3%ポジティブな回答が増加した一方、「将来留学したり、仕事で国際的に活躍したい」では逆に9.7%ポジティブな回答が減少した。前者については、高校二年で取り扱った内容の多くが地球規模の環境問題や人権問題が多かったこともあり、地球全体に貢献するための個人として何ができるかの意識が刺激されやすかったという点が推測される。逆に後者に関しては「国際的に活躍する」ということ具体的なイメージが浮かばない、そこまでするつもりはないといったようなネガティブというよりニュートラルな考えになった生徒が多かったことが要因ではないかと考えられる。

全体として、短期的な目標としての受験対策ということと、中長期的な目線でのSGH事業での教養的教育の関連性がとらえきれない生徒が少なからずおり、内にアンビバレンスを感じてしまうという様子が見受けられた。一方で、この関連性を自分の中で咀嚼できている生徒も少なからずおり、SGHの取り組みが自分のキャリアにつながっているという意識がより多くの生徒に芽生えるような指導をできると可能性が広がるのかもしれない。

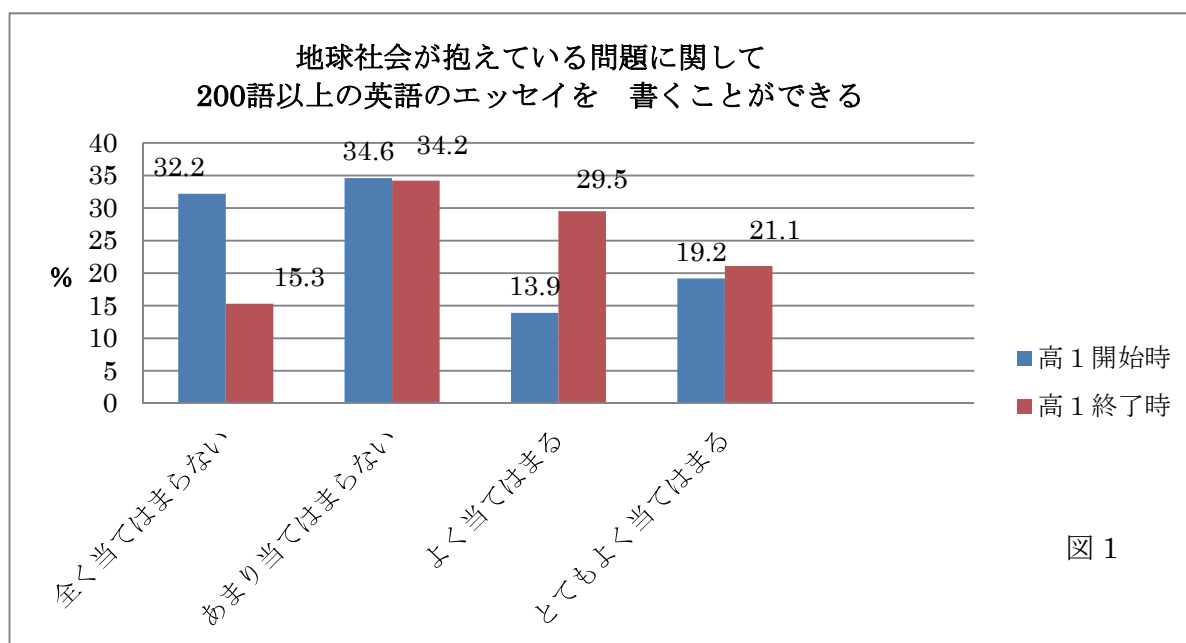
3、高校1年生(SGHの第五期生)

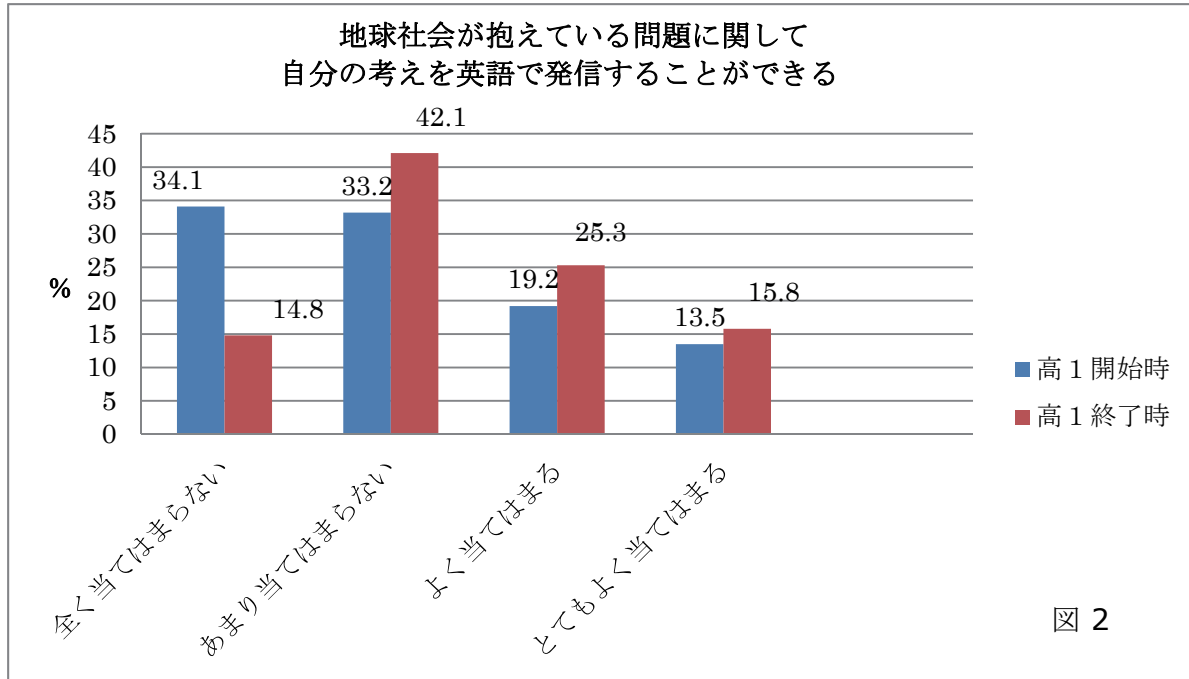
① SGH アンケート

高校に入学して、初めて触れるSGHであるが、「コラボレーション」と「アクティブラーニング」をキーワードとし、教科横断型の指導を行った成果は確実にアンケートの数値となって表れている。教科の枠にとらわれず、教員側が課題に対して様々なアプローチ方法を提示できたことで、生徒が持つ表現の幅も大きく広がった。その結果、生徒は得た知識を文章として効果的にアウトプットできるようになったと考えられる。

また注目すべき点としてほとんどの項目で「全く当てはまらない」の層が大幅に減少していることが挙げられる。英語の得意層だけでなく、英語の文章を書くことに抵抗を持っている不得意層にも指導の成果が表れていることがわかる。

「英語力」の部門では、(1)「洋書や英語で書かれた雑誌を読むことができる」(2)「英語の新聞を読むことができる」というインプットの部分で「よく当てはまる・とてもよく当てはまる」と答えた生徒が1年間で合計10%ほど増えた。また、英語を使用して情報を得るという点では、(5)「インターネットの英語サイトを利用することができる」という項目において「できる」と感じるようになった生徒が20%以上も増えている。また、アウトプットの力についても(6)「日常的な話題について100語以上の英語のエッセイを書くことができる」だけでなく、(7)「地球社会が抱えている問題に関して200語以上のエッセイを書くことができる」や(9)「地球社会が抱えている問題に関して自分の考えを英語で発信することができる」という項目において「できる」と感じるようになった生徒はいずれも合計約10%増加し、「全くできない」と感じる生徒が20%ほど減少した(図1、図2)。





「知的好奇心（習慣）」の部門では(11)～(19)の全設問で「よく当てはまる・とてもよく当てはまる」と答えた生徒が1年間で5～10%ほど増え、「全く当てはまらない」と答えた生徒が大きく減少した。「時事的な話題」「環境問題に関する話題」「国際紛争に関する話題」などを読むこと、「新聞やインターネットの英語で書かれた記事」を読むことに抵抗がなく、グローバル・イシューに対する基礎的な知識を得るために、海外のメディアから発信されるニュースからも積極的に情報を入手しようとしている。本校の掲げる「行動できるリーダーの育成」を考える際、不可欠な要素がしっかりと身につけられていると言える。

「グローバルリーダーへのモチベーション」の部門からは(24)「日本がグローバル社会の中で存在価値のある国になるように自分ができることをしたい」について「とてもよく当てはまる」「よく当てはまる」と回答した生徒は52.2%であり、4月の調査とほぼ変わらない数値であった。また、(25)「地球社会が抱える問題の解決に貢献したい」という項目では、4月の調査では「当てはまる」と回答した生徒が63.9%であったにもかかわらず、3月の調査では57.3%と若干の減少が見られる。これに関しては3学期でのプロジェクト Wars & Conflicts での生徒感想にも関連した発言が見られた。具体的には、1年間の学習や様々な人々との意見交換を経て、地球社会が抱える諸問題の解決策は、既に多角的な面から色々と考えられていることが分かったが、それでもなかなか解決できていないという現実を前にして、自分たちの力で本当に解決できるのかという不安を感じる、といったような内容である。様々な問題に対して、理想論だけではなく現実的な角度から受け止めている証拠であり、その不安をエネルギーとして、高校2年次に実際にアクションを起こす段階で何を感じるのか、という部分に期待している。

次年度では、社会に存在する諸問題に対し、アクションを起こす Social Justice Project に取り組む。本校の研究構想にもある「行動できるリーダーの育成」の一步を踏み出すためにも、日本だけでなく、グローバルリーダーとして地球社会に貢献したいと感じられるよう、当事者意識と自己有用感が高めら

れるような刺激を与えて行きたい。

② 授業アンケート

(1) メンター制度

初年度からの企画として、英語の授業に東京外国語大学の大学院留学生をメンターとして呼び出している。今年度は、2学期、3学期合わせて約25名の大学院生に合計10回来校していただき、生徒のグループ活動に対して助言をいただいた。アフリカやヨーロッパなど様々な地域からの留学生に協力していただいたが、母国語が英語ではない場合でも、生徒とのコミュニケーションには原則として英語を用いていた。

2学期末に行った授業アンケートでは、広島パンフレット作成における活動(Hiroshima Brochure Project)の項目に関して以下のような回答結果を得た(図3)。80%近い生徒が興味・関心を持って取り組み、この取り組みが将来役に立つと感じている。

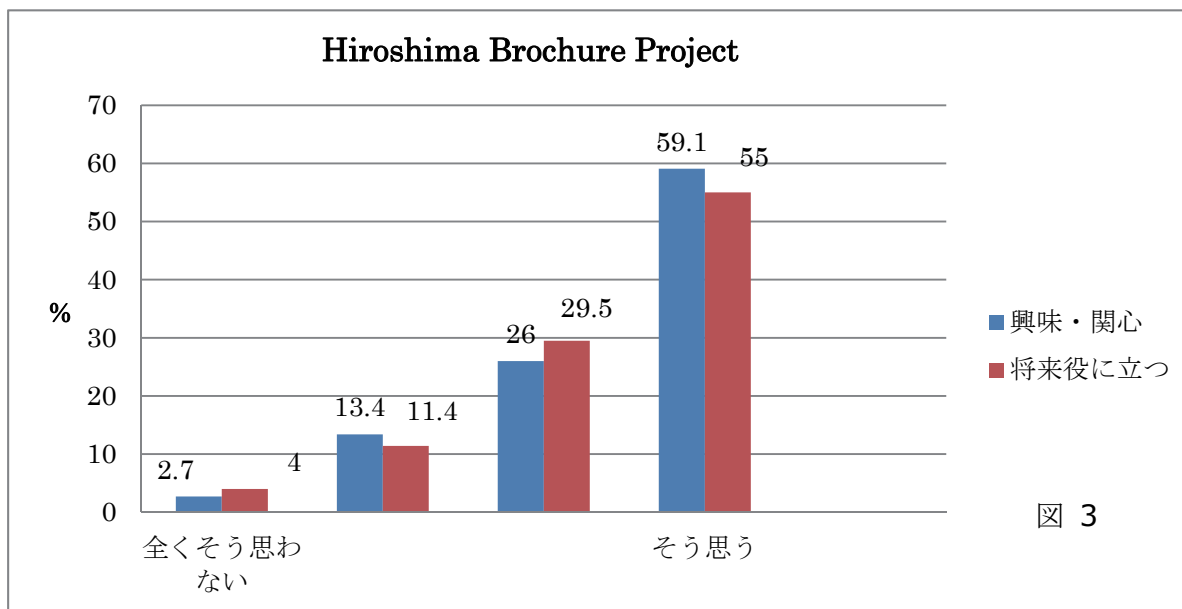


図 3

<意見・感想>

- メンターさんも人によって生まれ育った国が違い、意見が違い、それを知ることができて良かった。意外となまりのある人も多くて驚いたが、私たちの英語も理解しようとしてくれた。
- メンターさんと意思疎通を図ったり、日本人ではなく海外の人に伝わる発表やブローチャーを考えたりするのは難しかったが、楽しかった。
- メンターさんに自分から意見を聞きに行くのが大変だった。1人であれだけ長い文を書くのも初めてだったので苦労したが、楽しかった。
- Brochure ではライティング力、メンターさんとのセッション、プレゼンテーションではスピーキング力など総合的な力をつけることが出来ました。

- メンターさんとの会話は簡単ではなかったけど、実際の自分の英語を試す良い機会だったと思う。原爆や広島に関しての単語力は上がった気がする。

アメリカの高校生に見てもらおうパンフレットということで、英語の表現のほかにも、日本人以外の視点から読んだときにわかりにくいところをメンターに指摘していただけたことは、生徒にとって大変有益であった。

授業中の生徒の雰囲気としては、自分たちの成果物を少しでも良いものにしようと積極的にセンターとコミュニケーションを図っている様子が多く見受けられた。また、平和や紛争を専攻とするメンターが多かったため、専門的な知見や出身国の状況などを交えて、より具体的にアドバイスをしていただくことができた。

また、従来の英語の授業環境とは異なり、自分たちの目的を果たすために自然に英語をツールとして使用することができる、という点がこのプロジェクトの利点である。母語を共通に持たない者同士の意思疎通において、global language としての英語を使用する空間というのは、日本の高校生の大半にとってはまだまだ珍しいものであろう。また、その際英語の多様性に触れ、自分たち自身の英語にも自信を持つことができたことは大きな成果と言える。

メンターたちにとっても本校の取り組みは興味深く映っている。2 学期と 3 学期の両方に参加したメンターは、3 学期の指導時には、英語でのプレゼンテーションにおいてのふるまい方や、語彙の使い方などが格段に上達しているということに感心した、と感想を述べた。

(2) 授業を通して身についた力

各学期末に、この授業を受けてリーディング、スピーキング、リスニング、クリティカルシンキング、単語、文法のそれぞれの力が身についたと感じているかを尋ねた。1 学期末と 3 学期末を比較すると、「身につけている」と感じている生徒の数は大幅に増えている。特に、リーディング力 76.8%→80%、クリティカルシンキング力が 55.4%→70%、単語力が 54.2%→66%と大きく増加している（図 4）。

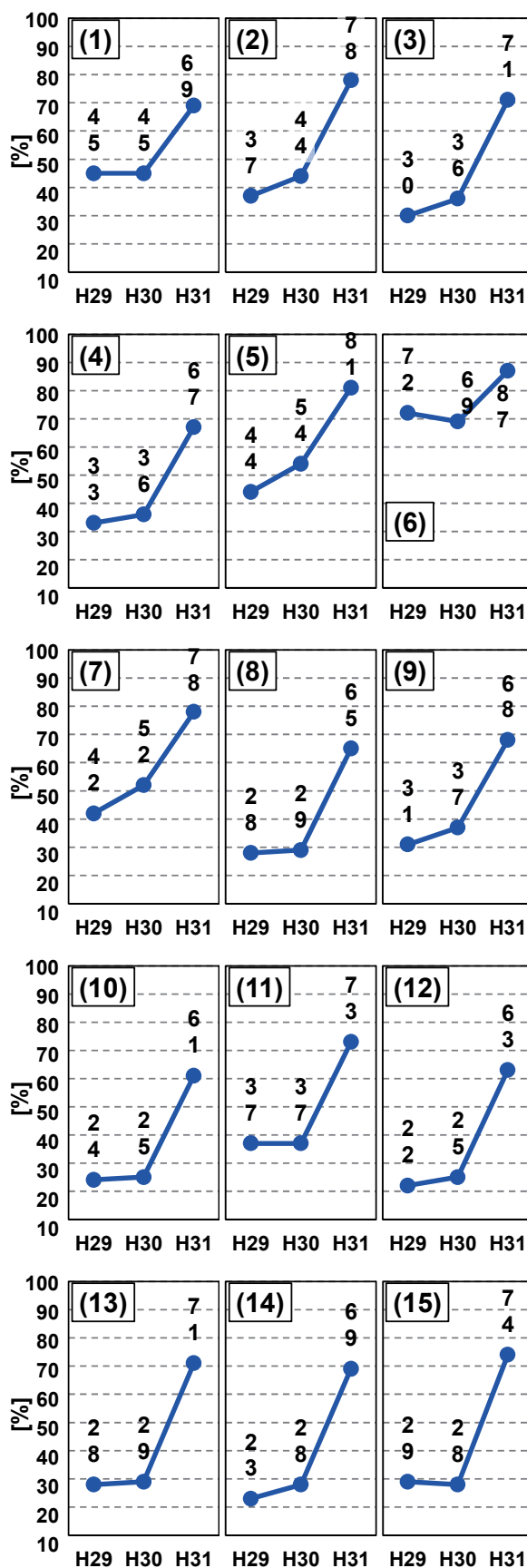
この授業を通じ、教科書だけにとどまらず英字新聞やインターネット上の記事など生の素材に多く触れたことで、単語知識が増強し、英語圏で使用されている文体での長い英語の文章も読みこなすことが出来るようになったと言える。また、クリティカルシンキングの力は、読んだ内容をもとに英語でディベートをしたり、エッセイを書いたりする際に、自分の意見をまとめ、表現する中で身についたことがわかる。そしてもちろん英語の授業でこのように感じられる背景には、SGH としての取り組みに各教科で連携して取り組んだことの影響がある。他教科で得た知識が英文を読み取るヒントになったり、ディベートでの立論の質を上げたりと、効果を発揮していた。この、他教科での学びの影響は、広島プロジェクトにおいても顕著で、英語、現代社会、現代文のそれぞれの授業で得た「自国、他国からの視点」というものが Brochure の作成やプレゼンテーション、そしてフロリダ研修でのプレゼンテーションやスピーチにもしっかりと生きていた。

図1. SGH 第三期生(18期)の3年間における意識変化

H29:高1 修了時(H29.3) H30:高2 修了時(H30.3) H31: 高3 修了時(H31.3)

-質問項目-

- (1) 外国の人と英語で話することができる
- (2) 洋書や英語で書かれた雑誌を読むことができる
- (3) 英語の新聞を読むことができる
- (4) 英語のテレビ番組や映画を日本語の字幕なしで理解できる
- (5) インターネットの英語サイトを利用することができる
- (6) 日常的な話題について100語以上の英語のエッセイを書くことができる
- (7) 地球社会が抱えている問題に関して200語以上の英語のエッセイを書くことができる
- (8) 地球社会が抱えている問題に関してとっさに英語で何らかの説明をすることができる
- (9) 地球社会が抱えている問題に関して自分の考えを英語で発言することができる
- (10) 地球社会が抱えている問題に関して英語でディベート、あるいはディスカッションすることができる
- (11) 新聞やインターネットの英語で書かれた記事を読む
- (12) 科学技術、研究開発に関する英語を読む、あるいは聞く。
- (13) 政治・経済・様々な社会問題に関する英語を読んだり、聞いたりしている。
- (14) 環境問題に関する英語を読んだり、聞いたりしている。
- (15) 異文化、歴史、文化遺産に関する英語を読んだり、聞いたりしている。



(16) 紛争、地雷の除去など平和に関する英語を読んだり、聞いたりしている。

(17) 国際紛争に関する英語を読んだり、聞いたりしている。

(18) 国際貢献に関する英語を読んだり、聞いたりしている。

(19) その他、時事的な話題に関する英語を読んだり、聞いたりしている。

(20) 海外の大学、または大学院で学びたい。

(21) 自分が得意とする分野、興味を持っている分野を極めたい。

(22) 自分が得意とする分野で自分の考えを英語で発信していきたい。

(23) 自分が得意とする分野で、リーダーとして活躍したい。

(24) 日本がグローバル社会の中で存在価値のある国になるように自分ができることをしたい。

(25) 地球社会が抱える問題の解決に貢献したい。

(26) グローバル・リーダーとして活躍し、地球社会に貢献したい。

(27) 海外の会社に対しプレゼンテーションを行ったり、あるいは国際会議で発言したい。

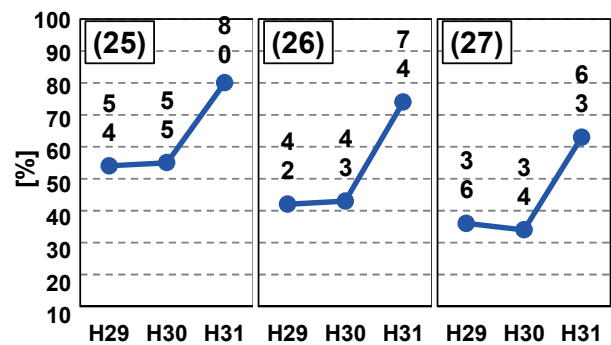
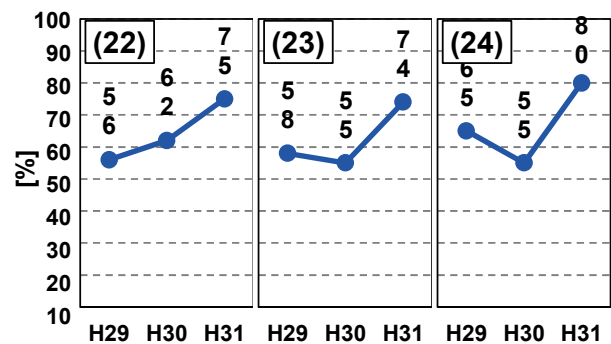
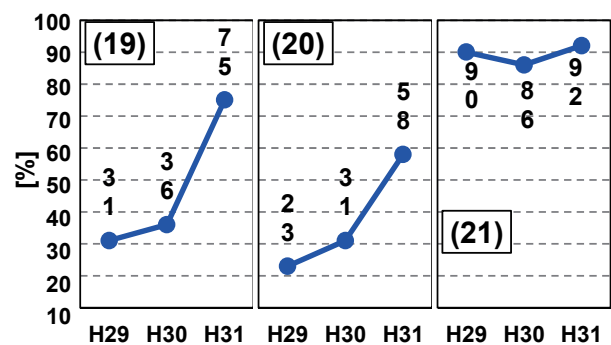
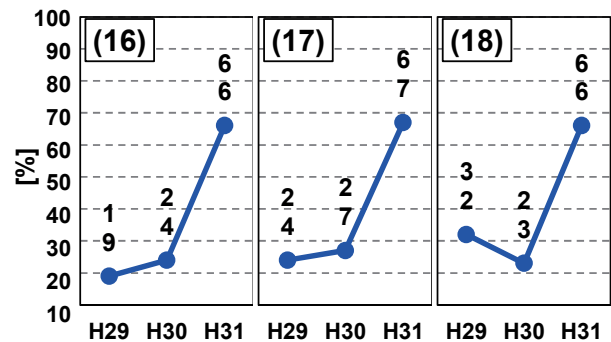
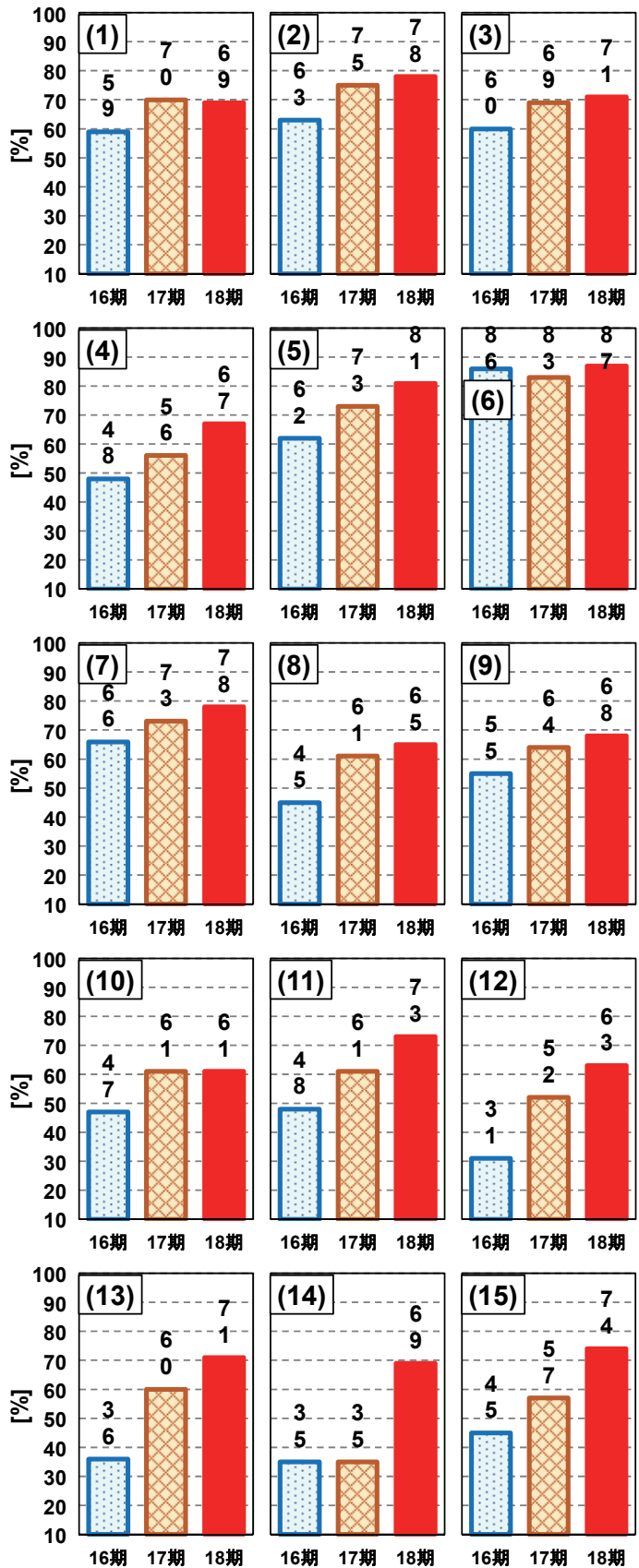


図2. 高3修了時におけるSGH第一期生(16期)から第三期生(18期)との比較

16期:H29.3、17期:H30.3、18期:H31.3

-質問項目-

- (1) 外国の人と英語で話をする事ができる
- (2) 洋書や英語で書かれた雑誌を読むことができる
- (3) 英語の新聞を読むことができる
- (4) 英語のテレビ番組や映画を日本語の字幕なしで理解できる
- (5) インターネットの英語サイトを利用することができる
- (6) 日常的な話題について100語以上の英語のエッセイを書くことができる
- (7) 地球社会が抱えている問題に関して200語以上の英語のエッセイを書くことができる
- (8) 地球社会が抱えている問題に関してとっさに英語で何らかの説明をすることができる
- (9) 地球社会が抱えている問題に関して自分の考えを英語で発言することができる
- (10) 地球社会が抱えている問題に関して英語でディベート、あるいはディスカッションすることができる
- (11) 新聞やインターネットの英語で書かれた記事を読む
- (12) 科学技術、研究開発に関する英語を読む、あるいは聞く。
- (13) 政治・経済・様々な社会問題に関する英語を読んだり、聞いたりしている。
- (14) 環境問題に関する英語を読んだり、聞いたりしている。
- (15) 異文化、歴史、文化遺産に関する英語を読んだり、聞いたりしている。



(16) 紛争、地雷の除去など平和に関する英語を読んだり、聞いたりしている。

(17) 国際紛争に関する英語を読んだり、聞いたりしている。

(18) 国際貢献に関する英語を読んだり、聞いたりしている。

(19) その他、時事的な話題に関する英語を読んだり、聞いたりしている。

(20) 海外の大学、または大学院で学んでみたい。

(21) 自分が得意とする分野、興味を持っている分野を極めたい。

(22) 自分が得意とする分野で自分の考えを英語で発信していきたい。

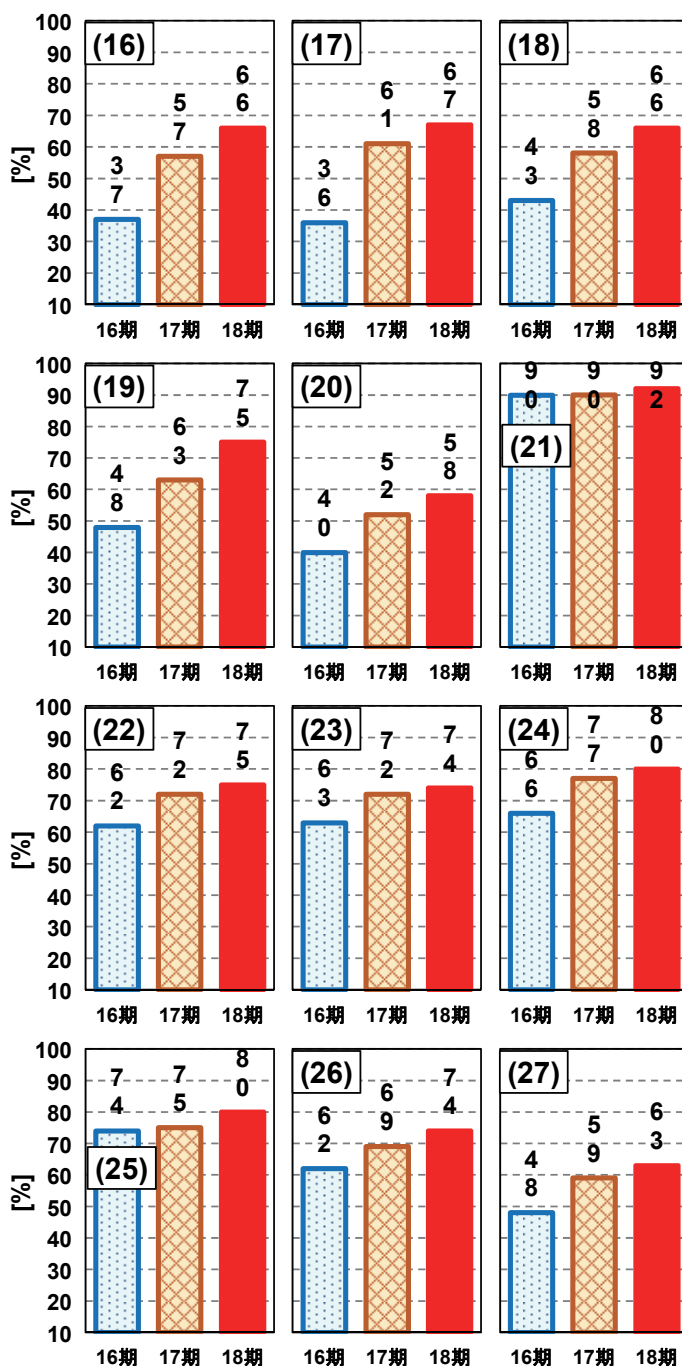
(23) 自分が得意とする分野で、リーダーとして活躍したい。

(24) 日本がグローバル社会の中で存在価値のある国になるように自分ができることをしたい。

(25) 地球社会が抱える問題の解決に貢献したい。

(26) グローバル・リーダーとして活躍し、地球社会に貢献したい。

(27) 海外の会社に対しプレゼンテーションを行ったり、あるいは国際会議で発言したい。



SGH 5年間の変化分析

最終年度を迎えて、これまでの取り組みの総合的に分析した。

学校設定科目を設けず、従来の教科のもと連携をはかるという今回の研究開発は、英語科を扇の要とし、より専門的な内容理解と言語を活用した発信力の育成を2本柱として、教科特性を活かした教科連携を進めることとなった。教員からのコメントでも、このことで、他教科の学びに目を向けるきっかけとなり、生徒の興味関心をとらえ、その成果を次の学年に伝えて、調整をはかるなど、縦横の連携が進んだ。また、SGH活動を公開することで、併設の中学生にも興味関心が広がり、中学3年の公民の授業でも取り入れるなど、学校全体で、研究開発に取り組むことができた。

《生徒の変化について》

SGHアンケートの学年（期）の比較からは、5年間の変化が読み取れる。200語以上でエッセイが書けると答えた生徒の割合は、高校1年ではあまり変わらないが、高校3年で上昇している。このことから、高校の授業で、力がついていることが読み取れる。（図1）

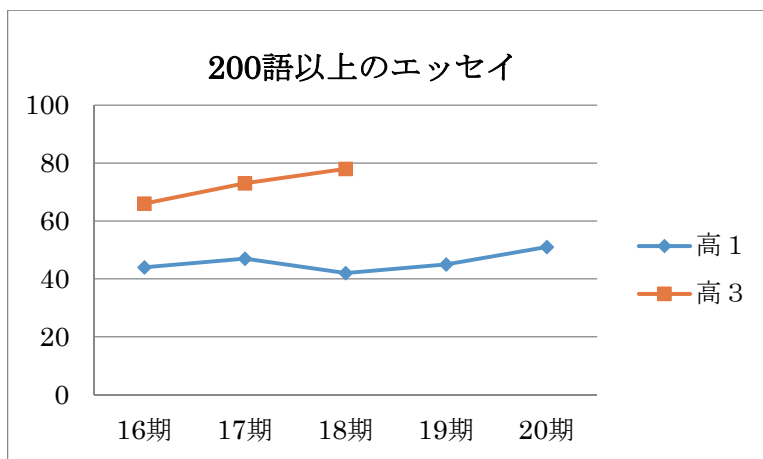


図1

グローバルリーダーと地球社会に貢献したいと答える生徒の割合も同様であり、授業での取り組みにより、高校時代に伸びた資質であるといえる。（図2）

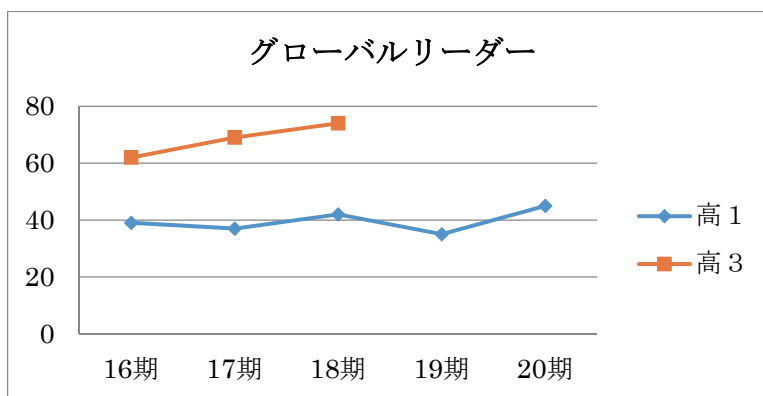


図2

一方、政治経済の社会問題に関する英語を読んだり、聞いたりしていると答えた生徒の割合は、高校1年では、5年間で減少し、高校3年で上昇している。これはSGHを進める過程で、このトピックを高校1年よりも高校2年で取り上げることとしたカリキュラムの変更が影響している。このことから、生徒の理解とカリキュラムの相関が高いことがわかる。(図3)

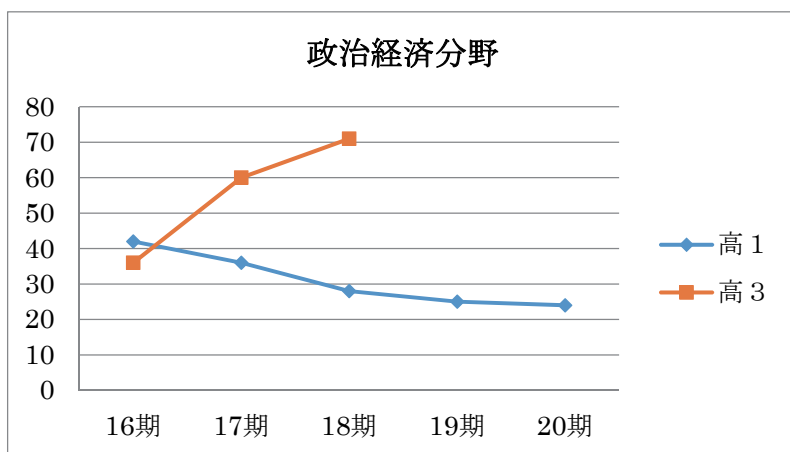


図3

海外大学・大学院への希望は、微増している。進学者の数値に変化がないことから、大学の国際化の影響もあり、進学後の留学を考える生徒が増加したと思われる。(図4)

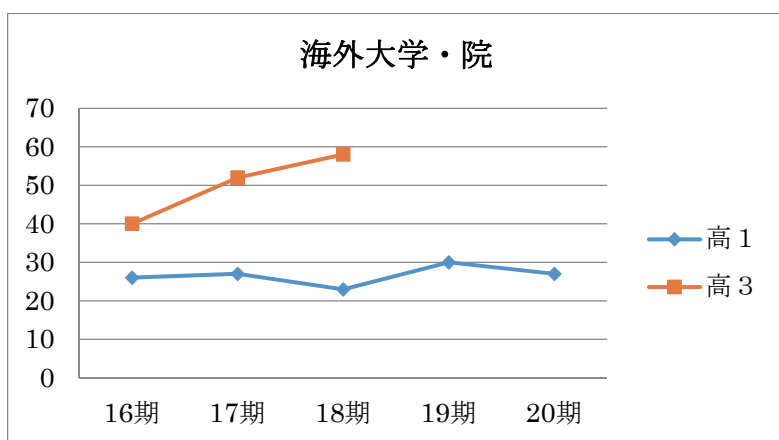


図4

その一方、「自分が得意とする分野を極めたい」と答える生徒は、もともと90%を超えており、SGHによって、大きな変化は見られない。ただし、「英語で発信したい」、「日本がグローバル社会の中で、存在価値のある国になるよう自分ができたい」と答えた生徒の割合が大きく上昇した。Service Learning を始めとする、社会貢献活動や国際会議を経験したことで、行動とするリーダーとしての認識が高まったことが読み取れる。

《教師の変化について》

専任教員数 78名のうち、5年間でSGH委員会に所属した教員は、47名、

該当する学年の関わった教員が述べ 51 名であり、W I L も含めると、ほぼ全教職員がなんらかの形で、この構想に関わった。関心をもって取り組んだという割合は 85% 近くになった。

また、毎年 の S G H アンケートの結果を次年度の授業に反映させていることから、ほとんどすべての項目で、生徒ができる と答える割合が上層しており、教科や学年として、このプロジェクトを活用していることが読み取れる。

S G H に関しては、

- ・他教科の学びに関心を持つようになった
- ・生徒の多様な面がはっきり視覚化できるようになった

と連携強化を挙げるコメントがある一方、

- ・生徒や教員の多忙化
- ・学業（受験）との両立の困難
- ・プロジェクトの種類が多い

といった、限られた時間の中での消化不良を心配するものもあった。

《世界高校生水会議（Water is Life 2018）アンケート》

1. 会議参加生徒の満足度の中で、特に高評価だった点

① 専門家から学ぶ

3 回の専門家による講演、企業のワークショップ、大学教授からの発表へのコメント相手を高校生扱いせず、時に厳しい指摘も多くあった。それでも研究を重ねて臨んだ会議で、自分たちの至らなさを感じることは、次への意欲につながったと感じている。

② 生徒同士で学び合う

各チームは、ポスタープレゼンテーションや分科会で自国の状況を発信して共有し、同時に、本やインターネットでは知りえないような他国の状況を知り、自分と同じ高校生による取り組みに刺激を受けたりする貴重な機会となった。

③ 国際交流を楽しむ

18 ヶ国から集まった 137 名の高校生と、東京謎解きオリエンテーリングや分科会で親睦を深めることができた。また最終日の **International Afternoon** では、個人やチームで、お国自慢のパフォーマンスを披露したことに会場は大いに盛り上がった。

2. キャスト（大会運営ボランティア）・ホスト（ホームステイ受け入れ）生徒の満足度

① 国際会議を自分の学校が開催したことへの自己肯定感

世界 18 か国の高校生と直接会話したことで、この会議に意義を実感した生徒が多かった。体験することの重要性を指摘する声が多かった。また、外国の生徒の頑張りをみて、自分も頑張ろうと思ったという声もあった。

② 自分の得意分野で会議に貢献できた達成感

英語に自信のない生徒でも自分の関心事や特技が活かせるような職種を多数用意したことで、無理なく楽しく参加できたと感じる生徒が多かった。

③ 英語のスキルアップへの意欲

英語の得意な生徒は、分科会でのファシリテーターや式典でのMC、また施設見学先の英語でのガイドなど、事前に勉強会や実践トレーニングが生きる経験を積んだことで、自分の英語力に自信が持てたとする生徒がいた。外国人の友達ができ、もっと英語を話せるようになりたいと思う生徒もおり、英語のモチベーションがあがったと答えた生徒も多かった。

平成26年度文部科学省指定（第五年次）
スーパーグローバルハイスクール研究開発報告書

2019年3月31日

編集 渋谷教育学園渋谷高等学校SGH委員会

発行者 渋谷教育学園渋谷高等学校

東京都渋谷区渋谷1-21-18

印刷 誠文社印刷株式会社